# とある魔術の天使

六甲水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある魔術の天使

【Ｎコード】
Ｎ８１２６Ｏ

【作者名】
六甲水

【あらすじ】
ベツレヘムの星にて、大天使と戦った上条当麻。だが、次に目覚めた場所は、いつもの病室ではなく、見知らぬ学園だった。そこで出会った天使と呼ばれる少女、そしてそれと戦う者たち。果たして当麻は……
ＡｎｇｅｌＢｅａｔｓととある魔術のコラボです。ちなみに、当麻は少しだけ記憶喪失です。

注意　原作２２巻のネタバレ有り

## プロローグ（前書き）

六甲水「まさかのコラボです」

当麻「思い切ったことを……」

奏「そうね、」

# プロローグ

「ん、」
少年が目覚めるとそこは、どこかの建物の入り口の前だった。
「俺は、一体。いつもだったら病院に……ん、何で病院なんか……」
何故病院という単語が出てきたのか分からなかった。辺りを見渡すとどうやらここは学校らしい。すると暗闇の中から一人の人物がやってきた。月が雲に隠れているせいで、姿が見えない。なので、男なのか女なのか分からない。
「あなた、こんな所で何をしているの？」
「いや、俺にも何が何だか。俺ってここの生徒なのか？」
「そう、記憶がないのね」
声を聞く限りでは、どうやら女性みたいだ。その女性は質問を続けた。
「あなた、名前は？」
「俺は……上条当麻。お前は？」
「私は、立華奏。」
この出会いで、当麻は不可思議な事に巻き込まれていく。

## プロローグ（後書き）

六甲水「上条さんはまた記憶喪失です」

当麻「またかよ。」

六甲水「次回は、ゆり達と出会います。」

## 第1話　ゆりとの出会い（前書き）

六甲水「今回はゆりと出会います。」

ゆり「一応原作通りにやるの？」

六甲水「一応。ちなみに、野球の話が終わっています。」

# 第1話　ゆりとの出会い

第1話　ゆりとの出会い

朝、目覚めると見知らぬ部屋にいた。それに寝ている場所はどうやらソファーだったらしい。

「そういえば、昨日立華に……」

「死んだ世界？じゃあ、俺はもう死んでるのか」

俺は立華に詰め寄る。立華はただ無表情で答えた。

「えぇ、そうよ。ここは死んだ人が来る世界。死んだ時の記憶がないときは、頭が潰されて死んでいるからよ。」

何だか混乱してきた。まさか死んでいるなんて……いや、待てよ。まさか、ただのドッキリだったりとか……

「もしかして、ただのドッキリとかだよな。そうだよ。うわー、驚いた。そりゃ、そうだよな。そんな世界あるわけ……」

「やっぱり混乱してるわね。」

「だったら、証明してくれよ。そうだよ。証明だ」

「なら、ハンドソニック」

すると、立華の腕から白い剣が生え、突然襲ってきた。俺は咄嗟に右手を出して防ごうとした。

「えっ、」

「へっ、」

白い剣は右手にふれた瞬間、砕けた。理由は何故か知らなかった。ただ、咄嗟に右手を出してしまった。立華はまた無表情で……

「あなた、何者？」

「いや、それは俺が知りたい。ただ本当に咄嗟に右手の幻想殺しで……ん、幻想殺しって何だ？」

「そう、あなたが何者か知らないけど、この世界では殺されても死なないって事は知っておいて、」

「あ、あぁ、」

その後、泊まる場所がないと立華に聞いてみると、立華の部屋で泊まることになった。部屋を見渡すとまだ立華は眠っている。とりあえず、起こさないように部屋を出て行った。

「たくっ、一体ここは何なんだよ」

学校の周りをうろうろしながら、俺は自分のことを考えた。名前は覚えている。生活する分には必要な常識はなども知っている。けど、分からないのは、何で俺は死んでしまったのか。それにこの右手は一体何なんだ。何で幻想殺しっていう名前を知っているんだ？

そんな事を考えていると一人の少女とばったり会った。その少女は髪が金色で、二つに縛っている。それにどことなく立華に似ているような……気のせいだと思うけど、

「……」

「えっと、こ、こんにちわ」

「……」

ち、沈黙が重い。なんなんだこの娘は……

「そいつが、新しく来た人ね」

すると、後ろから声をかけられた。今度は薄紫の髪のショートヘアーの少女だった。それに何故か手には……拳銃が

「あ、えっと、何で拳銃？この世界では男は狼だと思われてるんですか？」

「あぁ、何か変な事思ってるけど、別に貴方を撃つつもりはないわ。ただ、あなたにいくつか。質問があるのよ」

「し、質問？」

「えぇ、昨日夜、天使のハンドソニックを破ったところを見たんだけど、あなた何者よ。」

「えっと、天使って……つぅ、」

何故か天使という単語を聞いた瞬間、頭に痛みが響いた。それも一瞬ではなくずっとだ。あまりの痛みに、そのまま倒れこんでしまった。

その時、頭の中に写りこんだ映像は……青い異形の姿の天使だった。

## 第1話　ゆりとの出会い（後書き）

六甲水「こんな感じにだんだんと記憶が蘇る感じでやります」

ゆり「それより、フラグマスターの誰にフラグ立てるのよ」

六甲水「それはまだ考えてない。感想お待ちしてます」

## 第2話　選択（前書き）

六甲水「今回は上条さんが奏につくかゆり達につくかの話です。」

ユイ「私の出番は？」

六甲水「まだありません。多分」

# 第2話　選択

上条当麻が目覚めると、そこはどこかの部屋だった。

（それにしても、目覚めるたび部屋が変わるな。）

起き上がるとそこには、校長の椅子に座っているさきほどの銃をもっていた少女がいた。

「やっと起きたわね。まったく突然倒れるからびっくりするじゃない。」

当麻は、少し周りの様子を確認した。この部屋には自分とこの少女しかいない。さっきの金髪の少女はいなかった。

「それで、気分は？」

少女は少し心配そうに聞いてきたので当麻は、「あぁ、」と言って、起き上がる。

「そう、とりあえず、あなたはこの世界についてはもう知ってるのかしら？」

「あぁ、昨日会った女の子に聞かされた。死後の世界なんだろ。まだあんまり信じられないけどな。」

「誰だってそうよ。ちなみにこの世界に来る理由については聞いたかしら？」

この世界にくる理由？立華はとくに何も言ってなかったな。それに自分が何者かだって忘れてるのに

「その様子じゃ、天使から何も聞いていないみたいね。せっかく何か知ることができると思ったのに」

「なんつうか、いまいち、この世界の仕組みが理解できてないんだが、」

「そうね、説明するわ。まずこの世界は死んだ後の世界、そして、この世界では天使が用意したカリキュラムを受けると成仏するわ。」

「成仏か。やっぱり俺死んでるのか」

「そりゃ、死んでないならこの世界に来れないわよ。」

「だよな、じゃあ、次にお前は何ものなんだ？明らかに授業時間は過ぎてるのにここにいるのはおかしいし、」

「さっきも言ったように授業なんか受けたら成仏しちゃうじゃない。何で死んでまで神様が決めた運命（ルール）に縛られなきゃいけないのよ。私はそれに抗うために戦ってるのよ。」

「なるほど、何と言うか、レジスタンスみたいなもんか。」

「そんな感じ、それであなたに頼みがあるのよ。」

「もしかして、お前の仲間になれって、まぁ、特にやることないし、それに……神が決めた運命（ルール）に従うのはおれだって嫌だからな。いいぜ、俺は上条当麻」

「私はゆり。他にも仲間がいるけど、今は出払ってるわ。のちのち紹介する。とりあえずようこそ、」

「あぁ、」

二人は軽く握手を交わしたのだった。それから数日後、初めての任務が待っていた。

## 第2話　選択（後書き）

六甲水「次回もオリストです。」

## 第3話　夜の出会い（前書き）

六甲水「この世界での初めての不幸が起こります」

当麻「一体何があるんだ」

ゆり「てか、前回の後書きでオペレーションやるんじゃなかったっけ？」

六甲水「……」

ゆり「思いつかなかったみたいね」

## 第3話　夜の出会い

当麻は一人、夜の校舎をさまよっていた。理由は簡単だった。とりあえず、一回ぐらい授業というものを受けてみようと思い、授業を受け、そのまま奏の部屋に戻ったときに、財布がないことに気が付き、こうして夜の校舎をさまようことになった。

「はぁ、マジで財布取られてないだろうな。マジで心配だ。」

ため息を吐きながら歩く。ちなみに今当麻がここにいることは奏に内緒にしている。部屋に帰ったときにはまだいなかったため、書置きを残してここに来たのだ。

何とか教室に辿りつき、財布を無事確保して帰ろうと廊下に出た瞬間、何かの影が曲がり角を曲がったところを目撃した。

（まさか、ゆ、幽霊とかじゃないよな。でも、俺も一応死んでるから幽霊か。はは、死後の世界に幽霊とか、）

とりあえず、気になって、影が曲がった方に行くと、青い髪の少女が尻餅をついていた。

「ひゃあああああああああ」

当麻を見るやいなや、悲鳴を上げていた。とりあえず、落ち着かせることにした。

「待て、怪しいものじゃない。てか、夜に校舎にいる時点で怪しいものか」

「ゆ、幽霊じゃないですよね。」

少女は怯えながら聞いてきた

「ん、ここは死後の世界なんだから一応幽霊なんじゃないのか？」

「やっぱり幽霊だぁぁぁぁぁぁーーーー」

「うわ、めんどくせぇ、めんどくせぇよ。とりあえず、って、その制服は……」

当麻は少女が着ている制服に見覚えがあった。それは、ゆりが着ていた制服と同じだった。

「あれ？もしかして、新しく来た人ですか？」

「あぁ、てか、ゆりから聞いてるんだ。上条当麻だ」

「あ、私、入江っていいます。ガルデモのドラムをやっています」

「ガルデモ？なんだそれ？」

## 第3話　夜の出会い（後書き）

六甲水「まさかの入江との出会いです。」

ゆり「まさか、入江さんとフラグ立てるの？」

六甲水「一応、ちなみにあと何人か立てる予定だよ」

## 第４話　入江と当麻（前書き）

六甲水「入江のフラグを立てます」

ゆり「いつになったら、原作の話をやるのよ」

六甲水「とりあえず、登場キャラと絡んでから」

## 第４話　入江と当麻

入江と出会った当麻は昇降口を目指しながら、二人で話していた。

「ガールズデットモンスターか。死後の世界にでもそんなバンドとかあるんだな」

「まぁ、人気ありますし、陽動の作戦の時に大切な存在ですから、」

陽動って、ゆり達はどんな作戦をやってるんだよ。そういえば、まだそういった作戦に参戦してないな。

「それにしても、噂に聞いてましたけど、上条さんってそんなに怖くないんですね」

「どんな噂されてるんだよ。俺は……」

「えっと、天使と死闘を繰り広げて、天使を手玉にしたとか、色々と聞いてますよ。ゆりっぺさんから」

ゆりのやつ、なんつう噂を流してるんだよ。

ため息を吐きながら二人で歩いていると、昇降口が見えやっと出れると思った瞬間、近くに立華がいた。何故か腕から白い剣を生やしている。

「うわ、天使、」

「立華さん？何でいきなり臨戦態勢なんですか？」

「校舎に誰かが彷徨いていると聞いて、対処しに来たのよ。まさか、貴方だとは、それに夜の不純異性交遊は禁止されてるわ」

立華は剣を構える。というか、校則破ったら死刑かよ。どんな学校だ。

「とりあえず、その危ない剣は閉まってくれ。こいつとは偶然あったんだ。」

「じゃあ、何で校舎に？」

「書置き見てないのか？財布忘れたから取りに来たんだよ。」

「見てないわ。ずっと見回りしてたから、」

立華は剣を消し、昇降口の扉を開け、外に出る。

「早く出なさい。今日は見逃すから」

「あ、ありがとうな。立華。行こうぜ。入江」

「う、うん。」

二人で外にでて、宿舎に戻る途中、入江は不思議そうな顔をしていた。気になり聞いてみると

「上条さんって、凄いですね。あの天使を言葉だけで抑えこむなんて」

「いや、あいつ変な剣とかだすけど、それ以外は普通の人間だぜ。言えば聞いてくれそうだし、」

「そうなんだ、今日はありがとうございます。上条さん。また」

そう言い残し入江は宿舎に戻っていった。とりあえず当麻も立華の部屋に戻った。

（というか、いつになったら男子寮にいけるんだ？）

次の日、食堂に行くとゆりの仲間らしき男子と出会った。

## 第４話　入江と当麻（後書き）

六甲水「次回は、音無と日向と出逢います。其の次くらいには、原作のテスト回をやります」

## 第5話　男たちの出逢い（前書き）

六甲水「今回は音無さんと日向さんが登場です」

音無「やっとか、」

日向「更新が遅すぎないか？」

六甲水「気のせいだよ。」

## 第5話　男たちの出逢い

昼に食堂で飯を食べていると、二人の男子に声をかけられた。一人は茶色い髪で、優しそうな顔立をしている。もう一人は青い髪で、何と言うかチャラそうな顔をしている。

「お前、心で言ってるつもりだが、普通に声に出てるからな」

チャラそうな方が指摘してきた。まじかよ。普通に声に出てるとか、元々こういう性格なのか？
すると茶髪のほうが話しかけてきた。

「お前、新しく入った、上条だっけ？俺は音無。何つうか、お前と似たようなもんだ」

「もしかして、記憶がないんですか？」

「あぁ、音無は、お前と同じ記憶なしだ。ちなみに俺は日向な。仲良くやろうぜ。上条」

そう言って、二人は手を差し伸べてきた。俺はそれに応じて、左手で握手をした。

「よろしくお願いします。日向さん、音無さん」

その後、三人で適当にぶらついていると、昨日出会った入江と再会

した。

「上条さ～ん、こんにちわ。」

「ん、入江だっけ。昨日ぶりだな。」

「そうですね。」

二人で楽しげに話していると音無さんが、

「お前らいつの間にか仲良くなったんだな。」

「はい、昨日の夜、上条さんに助けてもらったんですよ。」

「助けたっていうか。なんていうかですけどね」

「あれ？みゆきち。なにしてるの？」

すると、後ろから金髪の少女がやってきた。制服的にはゆり達の仲間の一人か。

「しおりん。音無さんと日向さんと上条さんと話してたんだよ」

どうやら入江の友達か。それにしても、ここは可愛い女子が多い気がするな。入江といい、この娘といい、立華といい。

「へぇ～、昨日嬉しそうに話してたみゆきちがゾッコンの上条さんか。」

「ぞ、ゾッコンってわけじゃないよ。」

入江は何か顔を真赤にしてるけど、どうしたんだ？

「あっ、私、関根っていいます。みゆきちの大親友です。」

「あ、どうも。上条っす。」

とりあえず挨拶を返すと、関根は何故か怪しい笑顔で、言ってきた。

「所で、みゆきちのことどう思ってますか？やっぱり、可愛いですか？」

「ちょ、しおりん。何聞いてるの！？」

「ま、まぁ、可愛いと思いますけど、」

たしかに入江は可愛い部類に入りそうだし、てか、入江、何でそんなに顔を真赤にしてるんだよ。

「え、えっと、ほんとうですか？」

「あ、あぁ、入江は可愛いほうだぜ。」

「ほ、ほわ～」

入江は顔を真赤にしながら、倒れこんできた。何とか地面に倒れないように抑えようとすると、左手に柔らかいものが……それは……入江の胸だった。それを見て他の三人は……

「わぁ～、セクハラだぁ」

「やるな、上条」

「こんなトコロ天使に見られたらやばいんじゃ……」

関根は何か嬉しそうに言ってるし、日向さんは感心してるし、音無さんはお願いだから不安になるような事をいわ……

「……」

タイミングが悪いのか丁度良く立華が通りかかり、今の光景を見て……腕から剣を出した。

「不純異性交遊」

「立華さん。これは事故なんですよ。お願いですから許してください」

「ダメ、」

とりあえず、入江を音無さん達に預け、必死に立華の追跡から逃げることになった。

「不幸だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁー」

立華との追いかけっこは3時間ぐらい続いたのだった。

## 第5話　男たちの出逢い（後書き）

六甲水「上条さん。初めての不幸発動ですね。さらにフラグが」

入江「かわいいって、わぁ～」

関根「それにしても、上条さんは？」

当麻「許してくれ～」

奏「ダメ、」

六甲水「まだ追いかけっこしてます。次回はユイと出逢い、テストの話に突入です」

## 第6話　ユイとの出逢い（前書き）

六甲水「今回はユイと出逢います。」

ゆり「いつになったら、原作の話しやるのかしら。」

六甲水「絶対次にやります」

ゆり「本当かしら？」

## 第6話　ユイとの出逢い

立華から逃げること3時間、何とか立華を撒くことが出来たけど、かなり疲れた。

「まさか、本当に立華が来るとは、次見つかったら逃げられるか……はぁ、」

とりあえず、喉が乾き、近くにあった自販機からコーヒーを買って、どこかで休もうと思ったら、変な格好をした女子と遭遇した。

「おや、上条さんじゃないですか。こんなところで……」

とりあえず、怪しいので無視しようと思い、通り過ぎる。すると後ろから衝撃が襲った。

「ぐほ、」

「素通りしてんじゃねぇよ」

「うるせえよ。いきなり変な格好した女子に親しげに声をかけられたらだれだって素通りしたくなるわ。」

その少女は入江達と同じ制服を着て、いろんなところに色々と服飾している。何かしっぽみたいなもんもあるし、

「あ、そういえば、はじめましてでしたね。」

「そうだよ。お前みたいな奴あったら一生忘れなさそうにない。」

「あはは、そうですね。私ユイっていいます。上条さんのことはひさ子さんから聞いてます。」

ひさ子？多分入江とかの知り合いか？そういえば、まだ全然他の奴らと会ってないな。

「んで、ユイだっけ。お前はこんなところで何やってるんだ？」

「休憩中です。私ガルデモのボーカルとギターやってるんですよ。」

やっぱり、入江とかの知り合いか。何か女子との遭遇率高くないか？まぁ、嬉しいけど、

「とりあえず、俺は行くな。こんなところで油売ってるとアイツに……」

「見つけた。」

振り向くと、そこには汗ひとつかいていない立華がいた。まだ剣だしてるし、

「じゃ、じゃあな。ユイ。」

「はぁ、また。」

「待ちなさい。」

その日一日中、立華とおいかけっこをするはめとなった。

## 第6話　ユイとの出逢い（後書き）

六甲水「やっと、原作に入れる。」

ユイ「やっとですね。」

遊佐「本当に入れるか不満ですけど、次はあのゆりっぺさんの忘れたい話ですね」

六甲水「ある意味ね。」

## 第7話　テスト　その1（前書き）

六甲水「やっと更新できる」

遊佐「一体何をしてたんですか？」

六甲水「就活とか、就活とか、」

遊佐「大変ですね」

## 第7話　テスト　その1

「うわ……」

椅子が吹き飛び、天井に激突する日向を見て、ただそう言うしか無かった当麻。今の当麻の服装は今までの学生服ではなく、戦線の制服に変わっていた。当麻はある教室でテストを受けていた。何故テストを受けているというと……遡ること数時間前

「ついにこの時が来たわ」

窓から外を眺めながら、ゆりが小さくボソッと呟いた。

「何だ？　何か始まるのか？」

ソファに座る音無が、ゆりに向かって一言そう尋ねる。すると、緊張の面持ちで、ゆりはこう告げた。

「『天使』の猛攻が始まる」

「『天使』の、猛攻……！！」

その言葉を聞いた時の音無は、頭の中でたくさんの『天使』と自分達が戦っている構図が思い浮かばれる。……猛攻というのだから、これくらいのことはあるのだろうと予測してのことだ。しかし、そんな考えもやがてすぐに打ち壊されることとなる。

「猛攻って……どうしてなんた！？」

「……テストが近いから」

「……あー、何故？」

思わず気が抜ける音無。すると高松が、相変わらずメガネの位置を直しながら言った。

「考えてみればわかるでしょう。授業を受けさせることも大切ですが、テスト受けさせていい点を取らせること……それも大切なことです。『天使』にとっては」

「でもこのテスト期間……逆に『天使』を陥れる大きなチャンスとなるかもしれない」

高松の言葉に続くように、ゆりが言う。

「ん、どういうことだ？」

音無がさらに尋ねると、ゆりが説明を始めた。

「『天使』のテストの邪魔を徹底的に行い、赤点を取らせまくる。そして、校内順位最下位に突き落とす」

「それが何になるの？」

大山の疑問の声があがる。その言葉に答えるかのようにゆりは説明を続けた。

「名誉の失墜。生徒会長として彼女は威厳を保っていられるかしら？」

ツカツカと歩み寄り、そしてゆりはドサッと大胆に椅子に座る。その後で野田が、

「それで弱くなるのか？」

「少なくとも教師や一般生徒達の見る目は変わるわ。その行いには、今までになかった変化が生じるはず」

まずは野田の質問に答える。それからその説明に被さるように、松下が尋ねた。

「どんなだ？」

「さぁ。そこまでは私には読めないわ」

カーテンを閉めながら、ゆりはそう答える。やがてカーテンを閉めきった時には、質問にも答えきることが出来た。そして何時ものようにスクリーンが現れて、そこにはお馴染みの戦線マークが回転しているような映像が映し出された。

「さて、まずは今回の作戦の参加メンバーを発表する。『天使』と同じクラスでテストを受ける根回しは既に出来ているわ」

「じゃあメンバー全員が固まっちまった方がいいんじゃねえか？」

藤巻がそう提案してみると、ゆりの表情は不機嫌そうなものへと変

わり、

「『じゃねえか？』じゃないわよ！　ミスは許されないのよ。作戦がバレたら私達はすぐにでも『天使』とは別の教室に移されて、赤点工作を施せなくなるのよ？」

藤巻の意見をそうアッサリと切り捨てた後に、

「そこで今回のメンバーは……高松君・竹山君・大山君・日向君・音無君」

「また俺かよ！」

ゆりからメンバーを発表されて、驚きの声をあげたのは音無だった。

「僕のことはクライストと」

「見た目が普通そうな人を集めただけよ。あともう一人、初めてのオペレーションだけど上条くんに参加してもらおうかと思ってるわ。」

「上条を？アイツ、違う学年じゃないのか？」

日向がさらに質問をする。ゆりは帽子を直しながら答えた。

「まぁ、そこの所は大丈夫でしょ、それより上条くんは？」

ゆりが部屋を見渡すが当麻の姿はなかった。すると音無が答えた。

「あいつなら、制服に着替えに行ったぞ。」

「そう、なら後で合流するとして、オペレーション・スタート」

そのころ、当麻は空き教室で戦線の制服に着替えていた。

「たくっ、なんでまたこんな制服に着替えなきゃいけないんだよ。別にいいじゃんか。今までので」

ブツブツと一人で文句を言っていた。

「それは、ゆりっぺさんが『天使』に対する敵対心みたいなものだから作ったんだと思いますよ。」

「へぇー、そうなのか……うおおお

「すみません。声をかけるタイミングが分からなくって」

遊佐は無表情で答える。

（こいつ、本当に無表情だな。なんつうか、あいつにそっくりな気が……あれ？あいつってだれだ？）

何故か頭の中に巫女服を来た少女の姿が浮かんだ。一体何なんだ？

「どうしたんですか？」

「いや、なんでもない。所でなにか用か？」

ただ興味を持ってこんなところに来たわけではないだろう。何らかの理由があるはずだと思い聞いてみた。

「はい、ゆりっぺさんが呼んでます」

「ゆりが？一体何なんだ？」

この時、まさかあんな悲惨なことになるとは一つも思っていなかった。

## 第7話　テスト　その1（後書き）

ゆり「遊佐さん。上条くんの着替えずっと見てたの？」

遊佐「はい、」

ゆり「何か思わなかったの？」

遊佐「いえ、特には」

## 第8話　テスト　その2（前書き）

六甲水「テストの話その2です」

当麻「マジで飛ばされるのか？なぁ、」

六甲水「それは神のみぞ知る」

## 第8話　テスト　その2

着替えを終え、ゆりのところへ行き、今回のオペレーションについて聞かされた。

「いい。理解できた？」

「まぁ、だけど……」

「何か疑問でもあるの？」

当麻は少し悩ませた。いくら敵である立華を倒すためとはいえ、こんな作戦は間違ってる気がする。だからといって、今の俺に出来る事は……

ゆりは心配そうに見ているとりあえず、返事くらいは返しておこう

「いや、特にはないぜ。」

そして、テスト当日。

「席はくじ引きでその場で決められるわ。いい、『天使』の前の席を狙いなさい」

ゆりは一同に向かってそう告げると、とりあえず後ろの方に並ぶ。その前に、音無達がバラバラに並ぶという仕組みだ。

「まずは俺だな……16。全然駄目だな」

日向が引いた場所は、窓側から三列目の前から四番目。続く大山は廊下側から二列目の前から四番目。奏の斜め後ろという位置だが、工作するには無理がある場所だ。高松は窓際後方二番目という中々のベストポジション。とは言っても別に居眠りするわけでもないのでほぼ無意味に近かった。音無は廊下側から三列目の前から三番目。近いとも言えず、遠いとも言えない。続くゆりは……。

「やったー！　一番よ！！　……ってアホか！！」

引いたくじの数が一番だったことに素直に喜んだが、場所でいえば窓際の先頭。一番奏より遠い位置にいた。

「もう……誰か近い席を取った奴はいないの！？」

痺れを切らしたゆりが思わずそう叫んだその時だった。

「僕、『天使』の一つ前の席ですが」

竹山がくじの番号を見せつつ、ゆり達に向かってそう告げる。そのくじに書かれている番号を見て、ゆりはガッツポーズを見せて喜んでいた。

「やったわね。竹山くん。」

「えぇ、あと僕の事はクラ……」

「そういえば、上条くんは？」

「ん、俺は音無の後ろだな。」

ひらひらと手を振り、引いた席につこうとしたが、ゆりに引き止められた。

「まだ、作戦の方は説明してないわ」

それで、具体的にはどのようにすればよろしいのでしょうか？」

高松がゆりに尋ねる。するとゆりが、一度辺りを見回した後に、説明を始めた。

「いい？　まずはテストを受けて貰うわ。その後でみんなの気を引くアクションを起こして、視線がそっちに向いている時に、竹山君が解答をすり替えて欲しいの」

「解答を……ですか？　でも解答用紙は……」

「その時に二枚とっておけば問題ないわ。そしてその紙には何かアホ解答を書いておいて欲しいの。で、その時にアクションを起こすのは……日向君、お願いね」

「うぇ！？　俺かよ！！」

心底予想外という表情を浮かべて、日向は思わずそんな反応をとる。そんな日向にゆりは、笑顔で告げた。

「何のために貴方をメンバーに入れたと思ってるのよ」

「……まさか、そんな道化師役を演じさせる為に俺を……！！」

日向が絶望にうちひしがれている時に、竹山がとあることを尋ねてきた。

「ところで……すり替える方の解答用紙に、名前をどう書けばいいんですか？」

瞬間、彼らは固まった。いつも『天使』としか呼んでいない彼らにとっては、その質問は答えることが不可能な問題だった。そこからは、アホな会話が続いた。

「……『天使』？」

「アホか。生徒会長……とか」

「まぁそれでもいいよね。どうせテストの答案だってまともに解けてないわけだし……」

「いやいや、自分の名前すら書けないなんてどんだけアホなんだよ！　ていうか、今まで名前を知らずにいたお前達の方が驚きだよ！！」

アホなことしか言わない高松・日向・大山の三人に加え、今まで『天使』の名前を調べようともしなかったゆりに、耐えきれなくなった音無がとうとうツッコミを入れていた。当麻にいたっては、このまま黙っていれば、このオペレーションは失敗するだろうと思っていた。

「知るタイミングがなかったのよ……それじゃあ音無君、『天使』

の名前を調べてきてよ」

「はぁ！？　……ったくしょうがねぇな」

音無はゆりに命令されて、即座に行動開始をする。目指すは生徒名簿があるだろうと思われる職員室。だが、教室を出る前に、音無は何者かに裾を引っ張られた。誰なのかを確認する為に音無がその方向を振り向くと、

「どうしたの？　テスト始まるわよ？」

そこにいたのは『天使』だった。まったくもって予想外の来訪。思わず音無は声を張り上げそうになり、それを抑えると、

「あーその……ちょっと緊張してきちゃって」

とりあえずそう理由を告げるが、しかし『天使』は音無の裾を離さない。……このままでは職員室には行けないが、音無の頭の中では、別のことが思い浮かんでいた。

「（いくらなんでも名前位書いてやらないと可哀想だよな……というか、『２０Ｖの電流を流した時の電圧は何Ａ？』『電車の車掌さんＡ』なんて答えがぁあああああ！！）」

頭を両手で抱えて、音無は動揺を見せる。それを見た『天使』が何を勘違いしたのか。

「そんなに緊張しているの？」

「へ？」

そう言ってから、『天使』は更に励ましの言葉を繋げた。

「大丈夫よ、落ち着いて……えっと」

名前を呼ぼうとして、『天使』はどうやら音無の名前を知らないらしい。なので音無は、

「ああ、音無」

「音無君……」

そして、これはチャンスだと思い至った音無は、『天使』の名前も聞いてしまおうということにした。

「俺もアンタの名前……知らない」

「私？　立華」

「下の名前は？」

「下？　……奏」

若干身を乗り出して、奏は音無に名前を告げる。この時音無は……美しい名前だなと素直に考えていた。文字通り、音を奏でるような、綺麗な名前。

「ありがとう、おかげで少し落ち着いたよ」

「そう……それじゃあ、テスト頑張ってね。貴方なら、出来ると思

うから」

「え？　あ、ああ……」

若干奏の言葉に疑問を感じた音無だったが、ともかくこれで職員室に行かずにミッションを達成することが出来た。とりあえずゆり達の所に戻り、奏の名前を告げると、

「……ああ、そういえばそんな名前だったわね」

「なんだよ、知ってたのかよ」

「別に」

「……？」

何故かゆりの表情は、音無の目には不機嫌そうに見えたのだという。

テストはこうして幕を開けた。それぞれが必死に問題を解く中で、音無は何故かスラスラと問題を解くことが出来ていた。それこそ、自分でも疑問に思ってしまうくらいに。

「（あれ……俺、記憶もないのにどうしてこんなにもスラスラと問題が解けるんだ？）」

だが、同時にゆりに言われたことも思い出し、慌てて音無は、今まで解いていた解答を消し、

「（真面目に解いてたら消えちまうんだったな……）」

心の中で、そう呟いていた。同じ頃、当麻も悩んでいた。

（やべぇよ。数学とか全然分かんね。くそ、このままだとマジで赤点じゃねぇか）

真面目に悩んでいたのだった。

キーンコーンカーンコーン。そしてチャイムが鳴り、テスト終了の合図が響く。

「はい、じゃあ解答用紙を集めて」

教師からその声が聞こえると共に、生徒達は溜め息混じりに解答用紙を後ろから前へと流していく。日向はそんな中で身体を震わしていた。

（くっ……くそっ！！）

そして次の瞬間。勢いよく自分の席から立ち上がり、窓の方を指ししながら、叫んだ。

「な、なんじゃありゃあああああああああああ！！　グラウンドから、超巨大なタケノコがニョキニョキとぉおおおおおおおおおおおおおお！！」

「「「「……」」」」

一般生徒は、当然のごとく日向の言葉を無視した。その言葉を聞いていた戦線メンバー＋当麻は、思わず固まってしまった。そして、音無は心のなかでつぶやいた。

（アホ日向）

「ふぐぅ……！！」

恥ずかしさのあまり、日向は勢いよく自分の席に座った。

「ったく、仕方ないわね……」

ボソッと呟いたゆりが、机の下で何かを操作する。それは……ボタンみたいなものだった。ゆりは片手でそのボタンをぽちっと押すと、

「うわぁっ！」

ボゴッ！！日向の椅子が何かの力により浮上し……そのまま天井に激突した。

「ぐはぁあああああああああああああああああ！！」

一時間目のテストを終え、当麻はトイレにいた。

「日向のさっきの何なんだ？てか、まさか、俺もやらされるのか？」

## 第8話　テスト　その2（後書き）

六甲水「いい飛びっぷりだったね。日向くん」

日向「頼むから、テスト後の話で頼むよ。」

六甲水「何で？」

## 第9話　テストその3（前書き）

六甲水「今回こそ、上条さんは飛びますよ。」

当麻「何をやらされるんだよ」

六甲水「それは秘密。そして、新たなフラグも」

## 第9話　テストその3

二時間目、世界史。
竹山がゆりの指示の元で、『宇宙人に侵略されたことにして』解答している中、当麻が答案用紙に掻いた内容はおかしな物だった。例えば、『現在ローマを収めている人物』はという問題に『神の右席』や
『世界に存在する教会を3つ答えよ』という問題は『オルソラ教会・歩く教会・三沢塾』などおかしな回答を書いていた。そんなおかしな回答をしているといつの間にか終了を示すチャイムが鳴り響き、

「はい、後ろから前へ流して」

スーツを着た女性教師が、生徒達に向かってそう言う。そんな中で、高松は、

「……やるしかありませんね」

と決意を見せ、ゆっくりと椅子から立ち上がった。

「ど……どうしたの？　そこの君」

女性教師が高松に向かってそう尋ねると、

「先生、実は私……」

するとバッと上半身を覆っている服を脱ぎ出して、一言。

「着痩せするタイプなんです！！」

「「……」」

教師は何も答えない。もちろん、一般生徒は振り向かなかった。

「……どうですか？」

「分かったから座りなさい」

「……はい」

そのまま黙って、高松は椅子に座る。そしてその瞬間。高松の座っていた椅子が、先程の日向同様に浮上。ただし、今回のは回転が加わったバージョンで、やはりそのまま、高松は天井に激突した。

「……ったく、よくもまああんな浅はかな案を遂行出来たものね」

当麻もゆりのもとに寄って来て、話を聞いた。高松に至ってはまだ上半身裸だった。

「今回も首尾は大丈夫ね」

「抜かりはありません。そろそろクラ」

「じゃ、次は大山君ね」

「やっぱり来たかぁあああ！　僕持ちネタなんてないよ！」

竹山の言葉は無視して、次にゆりが指名したのは、大山だった。大山はかなりオーバーに混乱していたが、そんな大山に、ゆりが救いの手を……。

「大山君の席は『天使』の斜め後ろだったわよね？」

「な、ならネタをやらなくてもいいの？」

「ええ。『天使』に告白してくれたら」

「うん！　……え、何だって？」

余計に大山の立場が悪くなっていた。そんな大山を、ゆりは更に地獄へと突き落とそうとするように、ニヤニヤ顔でこう言った。

「だから『天使』に告白するのよ。『こんな時に場所も選ばずごめんなさい。貴女の事がずっと好きでした！　付き合って下さい！』って」

「えええええええ！！」

「か、可哀想に……頑張れよ」

先程までは肉体的ダメージのみで済んだのだが、今度は精神的ダメージの面もかなり大きい。

そう言う意味でも、今回は大山が可哀想だなと当麻は考えていた。

……もちろん、だからと言って代わる気はないし、ただ同情するしか無かった。

「なんだよ……告白するだけでいいのかよ……なんかズルいなぁ」

「そんなぁ！　日向君達は肉体的ダメージだけで済んだかもしれないけど、僕のは精神的ダメージの方も受けるんだよ！　それに僕にとっては初めての告白なんだよ！しかもフラれるって分かってるんだよ……」

「いいじゃねえかよ。ちょうどいい練習になって」

最後の方は、もはや涙声になっていた。そして大山は、更に抗議の言葉を述べる。

「僕は日向君とは違って本気の恋しかしないんだ！」

「なんだと！？　それじゃあまるで俺が遊んでばかりみたいじゃねえか！」

またしても口論が始まり、痺れを切らしたゆりが、

「ゴラァ！　テメェら喧嘩するなぁあああああ！！」

またしても、叫んでいた。その声に反応するように奏が立ち上がり、そんな奏の所に、音無が慌ててフォローを入れに行った。

「スマン！　ゆりが情緒不安定だ！　理由は昨日夢の中に日向が出て来て、『今日の俺と昨日の俺が同じだと思うなよ。気を付けな☆』と忠告したことによる。そして今、それが証明されちまったところなんだ」

「……日向君は二人いるの？」

奏の天然スキル、発動。

「え？あ、まぁ……」

「三人以上いるかもしれない？」

「へ？　あ、あり得る……」

「お気の毒に……」

心底心配するような表情を浮かべて、奏がペコリと頭を下げる。何となく話が変な方向に向かっていることを自覚しながらも、音無は更に言葉を繋げた。

「心配かけて悪かった。けど、もう大丈夫だ」

そう伝えると、奏は椅子に座った。

次のテストの時間。

「はいそこまで」

教壇にいる教師により、そんな言葉が告げられる。大山は、自分が動かなければならないこの状況に対して、恐怖からか、身体が勝手に震えてしまう。そして大山は、タイミングを見計らって、

「立華さん！」

ガタッ！　と勢いよく立ち上がり、立華の名前を呼ぶ。そして、そのままの勢いに任せて、顔を赤くして、言った。

「こんな時に場所も選ばずごめんなさい！　貴女のことがずっと好きでした！　付き合って下さい！」

「それじゃあ時と場所を選んで」

奏は、一発でその告白を断る。分かっていたこととは言え、大山の心には……深いダメージが与えられたという。

「そこ、座れ」

「……はい」

大人しく大山は自分の席に座る。その表情は、かなり寂しそうなものであり、見ている方が格別辛いものであった。

「あーあやっちまったなぁ」

遠くの席で、日向が笑顔を見せていた。その表情には、次はお前が吹き飛ぶ番だという気持ちが込もっていたとかいないとか。

「これでお前も……ガハァッ！！」

……しかし、予想に反して吹き飛んだのは日向の方であった。回転付き＋天井に頭からダイブ付き。日向は、首から上を天井に突き刺すような形で、しばらくの間ぶら下がっていたという。

「ちょっと待てゆりっぺ！」

「何よ！　近づかないでよ！」

怒りの形相を浮かべて、日向がゆりに近付いて来る。その表情があまりにも見ていられないものだった為か、ゆりは近付くなと言う拒絶の反応を見せていた。

「今回も首尾はバッチリよね？」

「抜かりはありません。それよりもクラ……」

「さて、次は上条君、頼んだわよ？」

「俺もやるのかよ。俺も大山と同じで持ちネタとかねぇぞ」

「じゃあ、告白したら？適当な女子生徒の手を握って、『好きだ。付き合ってくれ』って言って、」

確かに大山と違って自分はそんなに精神面は弱くないし……とりあえず、やって見る価値があるな。

そして、テスト終了後。

「それじゃあ集めて下さい」

教壇にいる教師により、そんな言葉が告げられる。当麻は立ち上がり、ゆりのもとに寄った。当麻以外の戦線メンバーも最初何事かと思っていたが……次の瞬間、全員が理解した。それは……

「ゆり、好きだ。付き合ってくれ。俺にはお前しかいないんだ。」

とゆりの手を握りながら、告白したのだった。その告白は生徒全員が注目し、奏までもが見ている。

（よし、これで、ゆりが振れば成功だ。）

そう思い、ゆりを見ると思いっきり顔を赤らめていた。

「ば、馬鹿な事を言ってないで、さっさと席に、す、す、座りなさい」

とりあえずは作戦は成功みたいだったので、当麻は自分の席に座った瞬間、思いっきり、それも今までと比べものにならないくらい吹き飛び、天井に上半身がめり込むぐらいだった。

（……成功したじゃん。）

薄れる意識の中、当麻のそう思ったのだった。

## 第9話　テストその3（後書き）

六甲水「やっと飛ばせたよ。」

音無「上条の奴、入江以外にゆりにまでフラグを立てたか」

六甲水「直井の話を終わったら、上条争奪戦の回でもやろうかな」

音無「苦労人だな。」

## 第１０話　落ちる天使（前書き）

六甲水「今回はテストからその後です。」

遊佐「更新が遅れた理由は？」

六甲水「やることが多すぎてね」

## 第１０話　落ちる天使

テストから数日後、音無と当麻は一緒に歩いていた。何故この二人が一緒に歩いているかというと……

「テストの日からゆりが目を合わせてくれないんだが、何故か知らないか？」

テストの日からゆりに話しかけようとしても、しっかりと目を合わせてくれず、顔も若干赤らめていたりする。当麻は何故なのか全然分からなかった。

（というか、告白相手をゆりにしたからじゃないのか？というか、こいつ全然気づいていないのかよ）

すると、音無と当麻は奏が職員室から出てくるのを目撃した。当麻は奏が無表情だが少しだけ落ち込んでいる気がした。

「立華、どうしたんだ？職員室から出てきたけど、」

「もしかして、怒られたのか？」

「…少し、」

そう言い残し、奏は立ち去った。その様子を見て当麻は……

「もしかして俺達のせいかもな。」

「え？　それって……」

やがて当麻が、音無に向かって言った。

「テストで全部赤点……もしくは０点のことで、教師達に呼ばれたんだろうな」

「ま、マジかよ……」

当麻達戦線メンバーがやったことを、教師達は奏一人でやったと思いこみ、教師をバカにしているのかと怒ったということになる。教師連中から見てしまえば、奏のやったことは、単に教師に対する一人きりの反乱にしかみられていなかったということだろう。

「でも教師は、そんなの天使自身じゃなく、誰かの仕業だってわかるだろ？」

しかし音無からそんな疑問がわき出てくる。それは当然のことだと思うし、恐らくそう考える方が現実としては正しい。

「……それがよく分からないんだよ。教師だってそれぐらい気づいても……」

「……多分、教師もＮｐｃだからだと思う」

「ＮＰＣ？なんだそれ？」

当麻は聞きなれない言葉を聞いて、困惑した。すると音無が説明した。

「ＮＰＣっていうのは、いわゆるプログラムって言うことだよ。決まった動きしかしない人達の事だ。普通に起きて、普通に授業を受ける。そのためにいる人たちだ。」

「だからか、Ｎｐｃである教師たちは生徒会長が不真面目な解答……教師を馬鹿にしたような解答を出してきた。ならその本人を呼び出す……これがアイツらの思考だ。教師としての最低限の行動とは思うんだ。」

「そんな……」

「俺達はやり方を間違えたのかもな。」

そう言い残し当麻は歩いて行った。音無はその場でただ立ち止まったままだった。

数日後、当麻はトルネードという作戦に参加するようにと遊佐からゆりからの伝言を伝えられ、食堂の入り口で待機していた。

（……今から何とかしてあげたいけど、俺みたいな一般生徒の意見でなんとかなるわけないか。一人ぐらい庇ってくれるような先生がいてもいいよな。）

当麻の脳裏に小学生ぐらいの身長の少女の姿が浮かんできた。その少女は凄くいい人だということを何となく思った。

「ん、あれって、立華？音無達止めなかったのか？」

目の前にはまっすぐと食堂を目指す立華の姿を発見した。普通なら妨害するから止めるようにと言われたが、今は止める気にはなれなかった。どことなく悲しそうな感じがしたからだ。

「……おかしいわね」

ゆりはボソッとそう呟いていた。ライブは好調。作戦は順調に進んでいると思われる。しかし、肝心なことが進んでいないような予感がして、ならないのだ。そんな中でゆりに何かを伝える、高松。高松は手を振って、入口を見るようにゆりを誘導する。それに合わせて入口を見たゆりは、

「なっ……？！」

本来ならあってはならない光景を、目の当たりにしてしまった。そこには……『天使』がいたのだから。

「外は何をやってるのよ！？」

思わずゆりは叫んでしまう。もちろんライブの盛り上がりによってそれは下まで聞こえてこないが、無線越しに遊佐には声が届いていたようで。

『どうしますか？　作戦を中止にしますか？』

という連絡が入ってきた。しかし、ゆりは『天使』の行動が気にな

った為、

「ちょっと待って」

そう言って、一旦待つように指示を仰ぐ。『天使』は、ふらふらと人混みの中を歩き、やがて券売機の前まで到達した。

「様子がおかしい……？」

その様子は、どこかおかしかった。それこそ、見てわかる程の、明らかなる不調。何かに対してショックを受けているような、そんな表情だった。ゆりは双眼鏡を使って、『天使』が購入した物を見る。そして、かなり驚きを見せていた。

「あれは……全校生徒が一切手を出さない、激辛の麻婆豆腐！？ どういうこと？　何であんなものを頼んだりしたの？　私達に食べさせて一矢報いようとしてるの？」

『天使』の意図が分からず、ゆりは混乱を見せる。だが、そんな中で遊佐から連絡が入る。

『ゆりっぺさん。ライブの方の盛り上がりが最高潮に達しましたが……どうしますか？』

「へ？」

遊佐に言われて、ライブの方を覗き込んでみれば、ユイによるボーカルの様子が確認できた。新ボーカルのお披露目ということもあり、どうやらＮＰＣ達の盛り上がりもいつもよりもさらに高い段階まで来ているようだ

「……回せ」

『了解しました』

やがてゆりは、短くそう指示を出す。そして……巨大な扇風機によって、生徒達の食券が巻き上げられていく。……それは、『天使』の持つ食券とて例外ではなかった。

「……どういうことなの？」

そんな様子を見て、ゆりは一言、そう呟いていた。食券を手放す時の『天使』悲しそうな表情が、ゆりの脳裏にしっかりと焼き付いていたという。

「うわ、お前、それにしたのかよ」

「ん、あぁ、なんか駄目だったか？」

「それ、激辛の麻婆豆腐だぞ。」

「激辛って、そこまで辛くは…」

音無は一口食べると、一気に口の周りが赤くなった。

「辛、でも、旨い」

「おいおい、ウマイって」

日向の音無の麻婆豆腐を一口食べると、

「辛、でも旨いな。」

「それは『天使』が買った食券よ」

「え？」

ゆりは、日向と音無の席に近づいた。

「あの子は生徒会長を辞任させられたことに対してショックを受けて……自分を慰める為に、自身の好物である麻婆豆腐を購入したってわけよ」

「あ」

音無は思い浮かんだ。それは……奏が一人で、周りに誰もいないような四人テーブルで、一人ただ黙々と好物である麻婆豆腐を食べる、そんな光景を。生徒会長を解任されたことで、生徒達からの信用だけでなく、興味すら失ってしまった彼女が、ただ自分を慰める為だけに、一人麻婆豆腐を食べる、一人の少女の細やかなる幸せ。

「（そんなささやかな幸せまで、奪っちまった……俺）」

音無は、心の中でそう呟き、そして……もう一度だけ、奏が一人きりで麻婆豆腐を食べる光景を、思い浮かべた。

離れた席で当麻はあることを決意していた。それは……

（いくらなんでもこんなのは間違ってる。俺は……立華を助けたい。だから、この戦線を……）

コツコツと音を立てて近付いてくる、七・八人の男子生徒を率いる……生徒会副会長こと、直井が現れて、そして宣言した。

「そこまでだ。いろいろと容疑はあるが……とりあえず時間外活動の現行犯として反省室に連行する」

帽子を直し、それから更にこう言った。

「僕が生徒会長になったからには、貴様らに甘い選択はない」

そう告げると、今度はバックにいる生徒達に向けて……言った。

「……連れて行け」

## 第１０話　落ちる天使（後書き）

六甲水「タイトル通り落ちた天使だね。」

当麻「それに俺もある決意したし、新キャラ登場だな。」

音無「それにしても、これが終わる頃にとあるの新巻出るのか？ちゃんと上条が復活して、出るのか？」

六甲水「うーん、新巻出てから最終回を書くか、それとももう一個のエンディングをやるかだね。それはまだ決めてないんだけどね。どっちやるか」

## 第11話　Ｆａｍｉｌｙ　Ａｆｆａｉｒ　前編（前書き）

六甲水「今回は上条さんがまたフラグを立てます。」

当麻「またかよ」

# 第11話　Family Affair　前編

「何なんだよアイツは……」

夜が明けて。反省室より出された音無達は、悪態をつきながら廊下を歩いていた。戦線メンバーはもちろん、近くにいた当麻までもが巻き込まれたこともあって、全員のテンションは一段と下がっていた。

「てか、あれって生徒会長代理だっけ。ゆりどうするんだ？」

当麻はゆりにこれからどうするか聞いた。

「そうね……直井君は恐らくNPCだから、攻撃するのは駄目ね……」

「とすれば、お色気作戦いっちゃいますか♪」

真剣に考えているゆりの側で、自らの身体を擦り寄せるユイ。だが、そんなユイを見て、日向が一言。

「そんなに小さな胸じゃお色気なんて無理だろ」

「何ぃい！？　見たことあんのかゴラァ！」

即座に日向に近づき、抗議を始めるユイ。だが、日向はまったく動じずに、

「見ただけで分かる」

そう、一言でぶっちぎった。この言葉にさらに火がついたユイは、

「揉んだことあんのかゴラァ！！」

と、自らの胸を揉むようなしぐさを見せて、日向に言った。構わず、日向は無視。

「お前ら、仲がいいな。」

「とりあえず、まずは行動を起こしてみましょ。それで、相手がどう動いてくるのか検証してみるのよ」

ゆりは日向とユイの事を無視して、話を進めた。

「どうするんだ？」

当麻が尋ねると、ゆりが答えた。

「まずは授業を受けているフリをしてもらうわ。真面目に授業を受けると消される可能性があるから、授業には参加しないこと。各自教室に入って自由に行動しても構わないから」

「まぁ……そうして敵の動きを見て行くしかないよな」

音無が同意を見せる。珍しく、廊下を歩くゆりの表情は……あまり晴々としていなかった。

次の日。
ゆりに言われた通り、音無達は授業に参加していた。音無の制服のズボンの中には、昨日ゆりより受け取った無線機が入っていた。理由を聞いても漠然とした答えしか返ってこなかった為に、音無はその理由についても少し頭の中で考えていた。

「そういえば、上条はどこいったんだ？」

日向が教室を見渡すが、当麻の姿がなかった。

「なんか考え事するとか言ってたけど、それにしても、俺らはこうしてるだけでいいのか？」

他のメンバーは……大山は満面の笑みを浮かべながら机の上に置いてあるポテトチップスを食べている。……恐らく大山にとっては、これも一種の冒険なのだろう。続いて椎名は、後ろで箒と定規を手の上に乗せて、バランスをとっていた。その横では、ひさ子・ＴＫ・松下・藤巻の四人がテーブルを合わせて、麻雀をやっていた。

「ドラドラ親萬！」

「くっそ……またひさ子の一人勝ちかよ……」

「Ｏｈ　ｎｏ……」

「女子相手にここまで手こずるとは……無念」

じゃらじゃらと麻雀牌をかき混ぜるものだから、黒板に字を書いていた教師も、

「そこの一角……もう少し静かに」

と、とりあえずの忠告をしていた。それに対して、

「ああ、スンマセン」

と藤巻が謝罪の言葉を述べるが、もちろん静かにする気など一欠片もなかった。野田は机を二つくっ付けて、その上で優雅に居眠り。……もはや居眠りとは言わず、単に寝ているというべきだろう。高松は、何故か上半身裸で、腕立て伏せをしていた。

「先生、トイレ！！」

先頭に座る生徒――――ユイが、元気よく手を上げたと思ったら、立ち上がり、教室を出ていく。彼女曰く、『一分おきにトイレに行く生徒』らしい。

「……あ、戻って来た」

すぐに帰ってきたユイは、椅子に座ったと思ったら、

「生徒、トイレェ！！」

「ああ、行ってこい……」

またもや元気よく手を上げて、立ち上がり、そのままスタスタと扉の前まで歩いて行った。

「あ、アホだ……」

日向がそう呟いたのとほぼ同時。そのままユイが扉を開けて、トイレに行こうとしたその時だった。

「そこまでだ」

「ヒィッ！」

短い悲鳴は、ユイのものだった。何せいきなり目の前に……数名の男子生徒を連れた直井が現れて来たのだから。

「や、やべぇ！」

「退却するぞ！！」

戦線メンバー、行動開始。

「私、トイレに行くだけですからぁ！！」

ユイはそのままの勢いで、トイレに行くと告げて……逃走。麻雀をやっていたメンバーは、すぐさま片づけて、窓からダイブ。その時TKが、

「I' ll be back」

と言って脱出して行ったのは、きっと気のせいではないのだろう。他のメンバーもいつの間にか脱出していて、ただ唯一脱出していなかったのは……ずっと机の上で寝そべっている野田と、ポテトチップスを机の中に突っ込んだ大山、そしてだべっていた日向と音無。

「来たぜ、直井文人様」

日向は音無に向かってそう告げる。そんな中、直井は寝転がっている野田の所まで近づき、

「……貴様、何のつもりだ」

「……」

野田は寝ているのか、答えるつもりはないらしい。

「……いいだろう。コイツを反省室まで連れて行け」

男子生徒達に直井がそう命令した瞬間。勢いよく立ちあがり、生徒の内の一人を倒した後で、どこから出したのか分からないハルバードを向け、

「何を反省しろというのだ！？」

そう、叫んだ。だが、野田のハルバードを見て、近くにいた女子生徒が驚きの声を挙げる。

「……お？」

「授業中に堂々と居眠りをしていて、その上生徒を恐喝しておいて、よくそんなことが言えますね……ある意味滑稽です」

「何だと……！！」

そして今にも野田は直井に飛びかかろうとしていた。もしそうなってしまってはまずい事態に陥ってしまうと考えた日向と音無は……

慌てて野田を取り押さえて、そのまま教室の外へと連行した。

「な、何故逃げるというのだ！？　俺に戦わせろぉおおおおおおおおおおおお！！」

去り際に、連れてかれた野田がそんなことを言っていた。

屋上では、当麻一人黄昏ていた。

「このまま、戦線にいてもいいのか？やっぱり、立華の方についたほうが……」

すると、後ろから誰かがいることに気が付き、振り向くと、そこには遊佐が立っていた。

「上条さん。みなさん、作戦中ですよ。こんなところにいて、いいんですか？」

「遊佐だっけ、少し迷ってるんだ。俺はこのままいていいのか？」

「消えるんですか？」

遊佐は無表情で答えた。当麻は遊佐の瞳を見つめ、考え込み、言った。

「このまま消えるのは駄目だ。俺には立華と……天使と戦う事とこのまま消える以外の選択肢があると思うんだ。」

「そうですか、ですが、今はその選択肢が見つかっていないんです

か？」

「あぁ、そうだ。悪いな遊佐。こんな愚痴みたいなこと言って、俺、教室に戻るわ。遊佐も早く戻れよ」

「はい」

当麻はそのまま屋上の扉を開こうとしたが、開く前に誰かに開けられた。そこには直井がいた。

「授業をサボって、こんなところに何をしてる。反省室に連れていけ。それと、そこにいる女もだ」

当麻と遊佐はそのまま反省室に連れて行かれた。

ドン！重い扉が閉まり、そんな低い音がする。中には、ベッド・洗面所・トイレなど……

そこはまさしく独房だった。扉は鋼鉄製であった。

「悪かったな。俺のせいで遊佐まで巻き込んで」

「いえ、私は大丈夫です。それにしても、反省室というより、独房に近いですね」

「そうだな。立華が作ったのか？でも、あいつがこんな所を作る意味はないし、直井のやつが……」

「Ｎｐｃがですか？決まった行動しかしないのに、反省室ならこの

間入った場所でも……」

遊佐の言葉に当麻はフッと、あることが浮かんだ。それは……

「直井がＮＰＣじゃない可能性があるんじゃないのか？だったら、」

「考えられますね。」

## 第12話　Family Affair　中編

当麻と遊佐はここから出る方法を話していると、さらなる来訪者がやってきた。それは、音無と奏だった。

「くそっ……！　休み時間に麻婆豆腐食ってたからって、これはないだろ！！」

「しょうがないじゃない……それで反省になるんだから」

奏は音無の言葉に答えると、そのままベッドの上に乗っかる。

「……何してるんだよ、立華」

その行動が意味することが分からず、音無は思わず尋ねてしまっていた。奏は、一度欠伸を洩らした後に、こう答える。

「何って……寝るのよ？」

「はぁ？　寝る！？　この状況でよくそんな選択肢が出てきたな！！」

音無には、奏の考えがイマイチ理解出来なかった。

「しょうがないじゃない……他に何かすることがあるの？」

「そ、それは……」

確かに、こんな独房みたいな部屋ですることなんてほとんどなかっ

た。そして、音無が何かを言うことなく……奏は『お休みなさい』と言ってから、僅かな時間で直ぐに眠りについてしまった。

「くそ、立華のやつ、天然なのか？」

「というか、ふたりとも直井に連れてこられたのか？」

「あぁ、そうだよって、上条。それに遊佐まで、いたのか」

音無は二人の姿を見て驚いていた。さすがにこんな狭い空間でいることに気がつかないのはある意味すごいことだと思う。

「そうだ、音無。お前に話したいことがあるんだ。」

「何？何だ？」

当麻と遊佐は音無に自分たちが気がついたことを話した。直井はＮｐｃではなく人間だということを……

「それ本当か、くそ、ここから出られれば、」

「……ん？」

遊佐が何かに気がついた。

「どうしたんだ？」

「いえ、部屋が揺れたような気がしたんです」

ズウン。

今度は音無の耳にもはっきりと聞こえてきた。間違いない……揺れている。

「地震？　……戦闘か？」

「戦闘……ということは、助けか！？」

音無は、上で起こっているだろう事態を予測して、興奮してしまっていた。ひょっとしたらここから出られるかもしれない。そんな期待が、彼らの中で広まっていたからだ。

「……そうだ！　この無線機で……」

「……」

音無は、ズボンのポケットの中から小型の無線機を取り出す。そして、

「ゆり、俺だ！　閉じ込められた！？」

恐らくは無線機越しにいるだろうその人物に向かって、そう叫ぶ。しかし……反応はない。

「壊れてるのか？」

当麻が聞くと、遊佐が音無から無線機を借り、しばらく考えこみ、言った。

「電波状況が悪いみたいです。少し調整すれば……」

すると、無線機から声が聞こえた。

『……君、……無君。音無君、聞こえる！？』

音無は急いで、遊佐から無線機を取り上げ、

「聞こえるぞ。ゆり！」

だが、向こうには音無の声は届いていないらしく、

『音無君がこれを聞いていると信じて話すわ……よく聞いて。直井文人はＮＰＣではなかったの』

「やっぱり、」

「上条の言うとおりだったな」

ゆりは直井のことについて説明をする。ある程度説明した後に、

『抑止力であった「天使」が失脚したことで、彼は自由を手に入れた。まだ目的は分からないけど……こっちではすでに戦いが始まってる。事情を聞こうと思って近付いただけなのに、結果戦闘になってしまったわ。そしてその戦いは……貴方が今まで見たこともないような、酷いものよ。彼は私達が一般生徒に手を出せないことを知っている。だから人質にだって何だってするのよ。それはもう、戦いなんかじゃない。一方的な暴力』

「……一方的な暴力か」

『私はね、「天使」は幽閉されていると思うの。私達がかつて入れ

られた反省室は、すでに探させたわ。けど見つからなかった。多分もっと厳重で、誰にも見つからないような場所に閉じ込められてると思うのねぇ音無君。私は思うの。貴方今、「天使」や上条君と一緒にいるんじゃないかって。お願い、「天使」を連れて来て。この酷い戦いを終わらすには……「天使」の存在が必要なの』

懇願するような声で、ゆりは言う。無線機越しでも分かるような、明らかに困っているその口調。そして、先程の言葉を肯定するかのように聞こえてきた、戦線メンバーの悲鳴。

「「「!?」」」

『時間がないわ……グラウンドに来て。これから私も出る。じゃ、健闘を祈るわ』

ブッ。

無線は、そこで一方的に途切れた。その後で、ほんのわずかな時間だけ訪れた……静寂の時間。そしてそんな時間を打ち破ったのは。

「くそっ……何だって俺はこんな場所にいるんだよ……畜生……!!」

そう言ってから、音無は奏を起こそうとする。だが、当麻はそれを止めた。

「音無、お前、さっきの無線聞いて、何も思わなかったのか?」

「えっ、」

「お前ら戦線メンバーが今までやってきたことは、一方的な暴力だ」

音無は、ハッとした。そうだ……戦線のメンバー達がやってきたことは、現在直井達がやっていることと何ら変わりはない。つまり直井は……戦線が行ってきたことを再現しているようなものなのだ。

「確かに、この状況だ。立華に協力してもらうのはいいが、その前にやることがあるだろ」

「な……何を？」

「……立華に、謝るんだよ。今までのことを全部な。立華に話を振るのは、それからだ」

「……ああ、分かった」

音無は奏を起こし、精一杯、謝っていた。奏も特に気にしていなかったらしい。そんな二人を見て、遊佐は

「これが、上条さんが言っていた。もうひとつの選択肢なんですか？」

「ん、まぁ、そうかもな。天使と分かり合える。これもいいかもな。」

「そうですね。」

遊佐は当麻の事を見ると少し顔が熱くなるのを感じていた。すると、音無が

「ふたりとも、話してないで考えてくれ」

「ん、何がだ？」
奏はさっきからハンドソニックで扉を斬りつけていたが、ビクともしなかった。
「駄目か……」
「しょうがないわ。だってこれは、あくまで自衛用だから」
「……立華。他には何か用意してないのか？」
当麻が、奏に向かってそう尋ねる。すると奏は、
「……あるわ」
そう言った後に、刃を上に向けて、
「Ｈａｎｄ　Ｓｏｎｉｃ　Ｖｅｒｓｉｏｎ２」
瞬間。腕に生えていた刃が形を変え、更に長くなった。
「高速性に特化した薄いフィルムが特徴」
「他には……？」
「Ｖｅｒｓｉｏｎ３」
すると今度は、三個の刃先がついた槍みたいなものになった。

「……無粋ね」

「カックイイじゃん」

音無が親指を立てて、奏にそう言った。更に奏は、もう一つのバージョンを出現させる。

「Ｖｅｒｓｈｏｎ４」

瞬間。ドン！　という効果音が似合いそうな程、結構な大きさの、華みたいなものが現れた。そして奏は一言。

「華の形にしてみたのだけど……果たしてこれは可愛いかしら？」

「いや、結構禍々しいというか……」

「趣味がわかりません」

「……待てよ。行けるかもしれない」

素直に感想を述べた当麻と遊佐とは裏腹に、音無は何かを思いついたような表情を見せて、そして奏に言った。

「ひとつ……試して欲しいことがある」

奏はその言葉を聞いて、刃を一旦引っ込ませる。その後で音無は、奏の耳元で何かを告げる。やがてその言葉に同意を示した奏は、扉の前に立ち、

「……Ｇｉｒｄ　Ｓｋｉｌｌ　Ｈａｎｄ　Ｓｏｎｉｃ」

まずは腕から刃を出現させる。その後で、

「……Ｖｅｒｓｉｏｎ２」

刀身を長くした、バージョン２が出現。奏はそれを……扉にあるわずかな間に差し込む。ガキン！　という音が、中に響く。気にせず奏は、

「Ｖｅｒｓｉｏｎ３……Ｖｅｒｓｉｏｎ４」

どんどんバージョンを上げて行く。やがて扉は、少しずつだが悲鳴をあげてきていた。

「よし……行ける！！」

そして音無がそう叫んだ、ちょうどそのタイミングで。扉はバァン！！　という音と共に、ぶっ飛んだ。

「よっしゃ！」

「このまま脱出だ！！」

当麻・遊佐・音無・奏の三人は、扉が壊れたことでようやっと独房の中から脱出出来た。後は、ゆり達がいる場所を探しに行くだけだった。

「……なんだよ、これ」

脱出をし、雨が降る校庭に出ると、当麻達がそこにたどり着いた時に、一番最初に見た光景は……広範囲に渡る、血の海だった。その上に転がる……何十もの死体。時期に復活するとはいえ、この状況は、まさしく地獄絵図だった。

「遊佐。お前は下がってろ」

「……はい」

当麻は遊佐を避難させると、倒れる死体の中、うめき声をあげる人物が一人。

「う……」

「ひ、日向ぁ！」

真っ先に、音無が駆け寄る。当麻も駆け寄った。音無は、日向の頭を優しく持ち上げる。

日向はそんな音無に身体を預けて、一言。

「真っ先に俺のところに来るなんて……コレなのか？」

「冗談言ってる場合かよ！」

いつもは音無がやっているネタを、今度は日向がやってみせる。しかし、音無はそんな場合ではないと分かっていたため、そう言葉を返していた。そしてその時……直井が当麻達の方を向いて、少し近付く。その後で、力弱く笑い、そして直井は言った。

「彼処からどうやって出た？」

「……扉を破壊した」

奏は、一言そう返すだけ。しかし、それだけで直井は、事情を把握した。

「どれだけ時間をかけて作ったと思ってるんだ……生徒会長代理として命ずる。大人しく戻れ」

直井は、銃口を向けながら、奏にそう言い放つ。

「生徒会長代理だ。ふざけんじゃねぇ。お前は人でもなんでもない。ただのクズだ」

当麻は直井を睨み、叫んだ。奏に至っては、無言で『Ｈａｎｄ　Ｓｏｎｉｃ』を出現させていた。そんな彼らに、直井は言い放つ。

「逆らうのか？　……神に」

「は？」

「頭でも打ったのか？」

その言葉に、一同は思わず呆気にとられる。

「僕が神だ」

その質問に答えるかのように、直井は言った。

「ハァ？　頭イカれちまったのか……？」

日向がそう呟くも、構わず直井は続けた。

「愚かな……ここが神を選ぶ世界だと誰も気付かなかったのか。生きていた頃の記憶がある。皆一様に酷い人生だっただろう……だがそれこそが、神になる権利だ。生きる苦しみを知っている僕らだからこそ、神になる資格があったんだ」

「……神になって、どうするつもりだ？」

当麻がそう尋ねると、直井は平然とした表情で、或いは不敵な笑みを浮かべて、言った。

「……安らぎを与えよう」

「俺達にかよ！」

「むちゃくちゃしてくれてんじゃねえかよ！！」

「抵抗するからだ」

倒れている日向と、そんな日向を支える音無が、直井に向かって否定的な言葉を述べる。しかし直井はその一言を言った後で、更に言葉を続けた。

「君達は神になる権利があると同時に、生前の記憶にもがき苦しむ者達だ。なら僕は、そんな君達に安らぎを与える神になる」

ツカツカと、血だまりの中を、直井は歩く。
そして歩みを止めた直井は、その場に倒れていたゆりの髪の毛を掴み、無理やり身体を起こした。

「ゆり！」

音無が、ゆりの名前を叫ぶ。
直井は、抵抗をしないゆりの身体を掴むと、こう言った。

「岩沢まさみの件を覚えているか？　生前彼女は声を失い、歌の道を諦めざるをえなかった。そして酷い家族環境の中、彼女は惨めな死を遂げた……だが彼女はこの世界で夢を叶えた。満足はした筈だ」

音無は、今すぐにゆりの側に駆け寄りたい衝動に襲われた。怪我こそ少なく、身体の方の心配は無用だった。しかし問題は、ゆりの『存在』の方。

「ちっ……！？」

当麻が近付こうとしたが、その動きは、銃を持つＮＰＣ達に阻まれた。音無も同じ状況となっていることに、ようやっと気付いたのだった。

「それが……どうしたって言うのよ」「君は今から成仏するんだ。幸せな夢と共に」

「貴方は私の過去を知らない……！！」

だが、直井はそう指摘されても崩れなかった。

むしろ、そんな回答が返って来ることを、始めから予想していたのではないかと思わせる表情を浮かべて、言った。

「知らなくても出来るさ……僕がこの世界で用意してきたのは、『天使』を閉じ込める為の牢獄だけじゃない」

そう言ってから、直井はこう、結びの言葉を告げた。

「催眠術だ」

「！？」

言われて、音無達は周りにいるＮＰＣ達を見回す。見れば、その瞳はどれも虚ろで、焦点が定まっているようには見えなかった。

「さぁ、目を閉じるんだ。こんな世界でも、幸せな夢は……見れるんだよ」

そう命じる時の直井の瞳の色は……赤くなっていた。その瞳を直視してしまったゆりは、次第に瞳を閉じていく。

（嘘……まさか……そんな……こんなことって……）

そしてそのまま、ゆりは瞳を、閉じた。

目を覚ませば、そこは白い空間だった。およそ物と呼べるようなのが、何も置いていない……まるで無の空間。しかし、ゆりの目の前には、腰の辺りまでの大きさしかないような子供が三人立っていた。

内一人が男子で、二人が女子。ゆりはこの三人に見覚えがあった。

（ああ……あの子達だ）

この子達は、ゆりの妹弟。かつて生きていた時に、目の前で強盗に殺された……ゆりにとっては大切な存在だった者達。そんな彼らは、ゆりのことを見上げて笑っていた。……だが、当然彼らは生きている筈がない。

（違う、これは幻……本物である筈がない）

戸惑いを見せるゆり。その内……その戸惑いは、やがて罪悪感へと結び付く。彼らの笑顔を見ているのが……辛くなってきた。

（やめて、そんな笑顔を見せないで……私、守れなかったのよ？目の前で貴方達を見殺しにしたのよ？　それなのに、どうして……？）

やがてその子達の内の一人が、ゆりに向かって……笑顔で、こう言った。

「あのね……お姉ちゃんが私達のお姉ちゃんでよかった」

瞬間。

ゆりの頭の中で何かが崩壊する。怨まれてもいい筈なのに……。罵声を浴びせられてもいい筈なのに……。聞かされた言葉は、『お姉ちゃんがお姉ちゃんでよかった』という言葉。ゆりは頭を抱えて、

「そんな……そんなぁあああああああああ！！！」

白い空間の中で、葛藤に打ち負けてしまわないように……そう叫んでいた。

だが、そんな空間もだんだんとひび割れ、砕け散った。ゆりが目を覚ますと、目の前のには右手で自分の頭を撫でる当麻がいた。

「安心しろ。お前の記憶はあんな幻想で消させはしないからな」

当麻は優しそうな表情でいい。直井を睨んだ。

「ば、馬鹿な。催眠術を解いただと、そんなことが……もう一度」

直井は何が起きたかわからず、再び催眠術を歌謡とすると、音無が直井を殴った。

「そんな紛い物の記憶で消すなぁあああああああああああああああ！！」

音無は直井の胸ぐらを掴みながら、自分の想いを、ぶつけた。

「俺達の生きてきた人生は本物だ！　何一つ嘘のない人生なんだ！
皆懸命に生きてきたんだよ！　そうして刻まれた記憶なんだ！！
必死に生きてきた記憶なんだ！！　それがどんなものであろうが、俺達が歩んできた人生なんだよ！！　それを結果だけ上澄みしようだなんて……！！」

そして音無は、今自分が一番言いたかったことを、直井に言った。

「お前の人生だって……本物だった筈だろぉおおおおおお！！」

言われて、直井は思い浮かべる。
自分が……かつて生きていた頃の、出来れば思い出したくはない……自らの記憶を。

# 第13話　Family Affair　後編

兄が死んだ。

陶芸の名手の家に生まれてしまった少年――直井文人。彼は双子の弟だった。兄は幼いころから才力を発揮し、後継ぎとして世に名前を知らしめていた。一方で、弟であった――文人は、部屋にこもって一人で遊ぶ毎日だった。

親からも誰からも期待されない、意味のない人生。

いつしか文人は、そんなことを考えるようになった。だが、ある日……二人で山の中にある木に登っていた時のことだった。一本の枝が、激しく揺れて……二人はそのまま、地面へと真っ逆さまに落ちた。

文人は下が草だったこともあって命は助かった。……しかし、兄は運悪く、下にあったのが岩石だった為に、そこに頭をぶつけて……血を流したまま、息をひきとった。

死んだのはお前だ。

そう、空は告げていた。……文人は、空に浮かぶ太陽を見ながら、こう思った。

そう、生きてる僕は兄なのだ。

この日以来、文人は兄とすり替わった。死んだのは……弟である『文人』ということになった。そして、彼にとっては『意味のある人生』が始まった。しかし……現実は厳しかった。怪我の治療と言う

ことで世間から離れて、リハビリと言う名の厳しい修行が続く。

「恥を知れ！　こんなもの……作ってきおって！！」

父親の罵声を聞く毎日だった。文人が作り上げてきた作品が、父によって放り投げられて……粉々に散っていく。彼が作ってきたものは、『形』をとらずに、どんどん捨てられていく。それは自分の存在を認めてくれていないような気がして……同時に、彼は知った。自分の兄が……追い付きもしないような、かなり高い所に居たのだという事実を。だが、彼はその事実を知っても尚、挑み続けた。自分の人生を……意味のあるものに変える為に。

もう、一人で遊ぶ毎日になんて戻らない。

文人は、心の中で、固くそう誓ったのだった。そしてその努力が実ったのか……彼は展覧会で見事入賞を果たしたのだった。『兄』としては全然駄目な結果だっただろうが、『文人』にしてみれば、今現在出せる自分の最高の力だった。そんな時、隣に立っていた父親が、文人に話しかけてきた。

「何だ？　お前……泣いているのか？」

「！？　……バカな」

強がり、文人は否定する。……だがこの時、事実文人は泣いていた。自分が今まで積み重ねてきた努力は……決して無駄ではなかったことが分かったからだ。

「まったく……バカな話だ。わしに恥をかかすな！　……なんたる結果だ」

相変わらずの罵声。だが、それは何時もよりも柔らかかった。これを聞いて、文人は思った。

よかった。厳しい父について、これからも修行を続けていこう。そして日本一の陶芸家になろう

……その矢先の話だった。

父親が、床に臥せったのだ。医者からは、回復の見込みはないと言われた。もう轆轤を回すことも、文人に陶芸を教えることも、文人を叱ることも……なくなった。文人が布団に横たわる父親に食事を与えると……ニッコリと、微笑むのだった。

僕の人生の意味は、こんな腕じゃ工房は持てないし、一人立ちも出来ない。ずっとこの人の世話をしていく人生なの？　……ねぇ、神様

そう考えた時、文人は同時にこうも考えた。

あの時死んだのは、本当に僕だった。あそこから頑張ってきたのは兄で、ここにいるのも兄で、父と兄しかいなかった。僕の人生は……偽りだった。この世界に、僕は存在しなかった。

「お前の人生だって、本物だった筈だろぉ！」

叫びながら、音無は直井の身体を……抱いた。直井からの抵抗は、特になかった。

音無はさらに言葉続ける。

「頑張ったのはお前だ！　必死にもがいてきたのもお前だ！！　違うかぁ！！」

「……何を知った風な」

「分かるさ！　ここにお前もいるんだから……！！」

そう言って、音無はさらに直井を抱きしめる力を強める。直井はそんな音無に……尋ねる。

「ならアンタは認めてくれるの？　この僕を」

すると音無は……真剣な表情で、こう言ったのだった。

「お前以外の何を認めろって言うんだよ。俺が抱いてるのはお前だ！　お前以外いない……お前だけだよ……！！」

「！？」

瞬間。直井の頭の中に……たった今さっき思い出した記憶の、さらに前の記憶が流れ込んでくる。それは木に登って、一個の渋柿を取ろうとしているところ。兄と二人で、一個の渋柿を取ろうとしている情景だった。木の下には父親がいて、

「取ったって渋柿じゃぞ？」

聞こえていたが、二人はそれをやめない。……しばらくして、その渋柿を取ったのは。

「やった！　兄さんに勝った！！」

渋柿を父親に見せて、喜んでいるのは……弟の文人の方であった。しかし、喜んでいた為にバランスを崩し、文人はそのまま地面に落下した。幸い、低かったのもあって怪我はなかったが……その手の中には、自らの手で取った渋柿が、ちゃんと握られていた。

「渋柿ごときで何を……」

おかしそうにそう言って、父親は文人達に背を向けて、歩き始める。だが、少し歩いた所で立ち止まり、それから文人に向かって、言った。

「だが……文人もやりおる」

「！！」

それは……文人にとって一番聞きたかった言葉。自分の存在を認めてくれた、そんな言葉。かつて自分に父親が言ってくれたように……音無もまた、自分の存在を認めてくれた。

「……」

当麻はゆりを抱え、音無と直井を見て、微笑んでいた。音無と直井は、そのまま抱き合う。雨はいつの間にか止んでいて、空には虹がかかっていた。水たまりの中に、一滴のしずくが、ポチャンと音とを立てて落ちたような気がした……。

## 第13話　Ｆａｍｉｌｙ　Ａｆｆａｉｒ　後編（後書き）

六甲水「というわけで、一気に上げてみました。書くのに結構疲れましたが、」

直井「ふん、ようやく、僕の出番か。」

遊佐「ところで、前編の前書きで新しいフラグってまさか、私ですか？」

六甲水「そうだよ。遊佐は当麻のかっこ良さに惚れたという感じだから、」

遊佐「はぁ、ところで、次回は？」

六甲水「次回はゆりが音無の記憶と当麻の記憶を蘇らせようとしますね。幻想殺しも少しやる予定です」

## 第１４話　蘇る記憶　その１（前書き）

六甲水「今回は音無と当麻の記憶が蘇ります」

当麻「俺の場合全部か？」

六甲水「それは、秘密で、」

## 第１４話　蘇る記憶　その１

校長室の中は、何処か賑やかになっていた。松下は何故かＴＫとダンスの練習をしていた。理由は……不明だ。大山と椎名は、いつの間にか増えている犬のぬいぐるみ（ゼンマイ付きなので動く）を眺めていた。

「可愛いぬいぐるみだね～」

「……浅はかなり」

「え」

椎名の言葉を理解することが出来ず、驚きの声をあげてしまうのだった。野田は部屋の中だというのにハルバードで素振りをしていた。そのすぐ近くには、刀の手入れをしている藤巻が……。

「うおっ！？　危なっ！！」

藤巻の頭の上を、野田の持つハルバードが通過する。下手をしたら、藤巻はそのハルバードの刃で頭を切られていたかもしれなかった。

「あ、危ないじゃねえか！！」

「あ？　ボサッとしてるテメェが悪いんだろうがよ」

「なんだと……野田！　テメェ表に出ろや！！」

「いいだろう……売られた喧嘩は買ってやる！　テメェのようなノ

ロマが戦線にいると、ゆりっぺが迷惑するからな！！」

売り言葉に買い言葉。二人はにらみ合いながら、そのまま校長室から出ていってしまった。そんな中でも、松下はまだＴＫと踊っていた。

「ううむ……難しいな」

時折そう唸っては、再び努力する。しかし、どう頑張ったってＴＫに追い付けないのは見て分かる通りだった。そんな中で、ピンク色の髪の少女は、青髪の少年の腕を掴んで、何やら要求していた。

「ねぇ～新技かけさせてくださいよ～名付けて……百二十字固め！！」

……もうお分かりだと思うが、ユイである。ユイは日向に新技をかけさせて欲しいと頼みこんでいるのだが、当の本人はまったくの無視。というか、眼中に入れないように必死に目を逸らしているようにも見えた。何しろ、肯定したら……次に自分に訪れるのは『死』だからだ。いくら復活するからと言って、痛いのは勘弁したいところ。だから日向は、シカトを決め込んでいたのだ。

「ねぇ～新技、新技～」

昨日までの落ち込みっぷりは何処へ消えたのやら。能天気ユイ、ここに登場と言ったところだろうか。

「う～もういい！　大山先輩にかけよっと」

とうとう諦めたユイは、その後で大山の所へと向かう（ちなみに、

大山には拒否られた）。それを確認すると、日向はようやっと口を開いた。

「しっかし本当に変な奴らばっかり集まってくるよな……ここ最近」

隣のソファーに座る少年の方を見て、日向はそう呟いた。その呟きは、少年の耳にも届いたようで。

「……貴様、それは僕のことを言っているのか？　僕は神だぞ？」

帽子を被り、文庫本を読む少年……直井文人は、本から目を離し、日向の方を睨んだ。というか、戦線メンバーは、直井がこうして当たり前のように校長室にいるという事態を見て、誰一人として疑問に思わなかったのだろうか？いくらゆりが入隊を認めているからと言っても、多少の違和感を感じてもよいだろうに……彼らにとっては、そんなことはもうどうでもいいみたいだ。

「神ねぇ……よく言うぜ。音無に抱きついて大泣きしてたくせによ」

「誰が泣いたって……？」

「うおっ！？」

禁止ワードを言ってしまったらしく、怒りの形相を浮かべる直井が、一瞬にして日向の近くにまでやってきていた。思わず身体を後ろに下げて、日向は逃げようとした。だがその前に、

「泣くのは貴様だ……」

そう告げると同時に、直井の目が赤く光る。日向はその目を、まと

もに直視してしまっていた。直井は更に言葉を続ける。

「さぁ、洗濯バサミの有能さに気付くんだ。洗濯バサミにも劣る自分の不甲斐なさを、嘆くがいい……」

その後で、カランと何かが落ちるような音が聞こえてくる。日向がその音のした場所を見てみると……そこには一つの洗濯バサミが置かれていた。それを見た日向は……頭を抱えて、まるで情緒不安定な人間のように混乱しながら、言った。

「洗濯バサミ……挟める……挟んで落ちない……洗濯物が汚れない……素晴らしい！　クリップ代わりに紙を挟んだりとか、応用も効く、使える……！！　それに比べて俺はなんなんだぁあああああああああ！！」

「……ふっ」

叫びながら、かなり落ち込んでいる様子の日向を見て、直井は勝ち誇ったかのような表情を見せる。だが、そんな直井の首根っこを、後ろから何者かが掴み、そして一言。

「お前なぁ……催眠術を腹いせに使うな」

「あ……音無さん♪　おはようございます」

先程までとはうって変わる、直井の態度。それもそのはずで、直井に言葉をかけてきたのは、音無だったからだ。

「挨拶はいいから……それよりも、これは一体どういうことだ？」

「あっちからふっかけてきたんですよ～僕は出来るだけ穏便に……」
悪びれた様子もなく、いかにして自分は悪くないかを表現する直井。
しかし音無は呆れた目つきで、ソファーの前で跪いている日向を見て、
「どこが穏便だよ……大の男があんな風に跪いているんだぞ？」
当麻は校長室に入るやいなや、日向の変わりっぷりに驚いていた。
「日向、ついに壊れたのか？おい、ユイ、一体何やったんだよ。」
何故か日向がこうなった原因はユイだと思った当麻だった。
「えぇー、私が原因じゃないですよ。先輩は元からこうなんです。」
「あぁ、ならいいや。疑って悪かったな」
とりあえず納得した当麻だったが、音無は心のなかで
（いや、納得するなよ）
と突っ込んでいた。そんな時だった。ガチャッと扉が開き、そこからゆりが入ってくる。そして、
「音無君、直井君、上条君、話があるの。ちょっと来てくれない？」
「俺達か？」
音無と直井と当麻の三人を、とある場所に呼び出したのだった。

## 第１４話　蘇る記憶　その１（後書き）

六甲水「今回の記憶関係は結構長くやります。その後辺りに女性メンバーの恋話でも」

ゆり「やるの？」

六甲水「現在、上条さんがフラグ立ててるのは、ゆりっぺさん、遊佐、入江だからね。あと一人ぐらい建てるつもりです」

関根「誰でしょうね」

ゆり（絶対に関根さんね）

## 第15話　蘇る記憶　その2（前書き）

六甲水「今回は音無の記憶をやりますね。」

当麻「俺のは？」

六甲水「次ぐらいに、やりますよ」

## 第15話　蘇る記憶　その2

教員棟三階、空き教室。音無と直井と当麻は、ゆりに連れられてこの教室までやってきた。

「何だよ、こんな所に呼び出して」

直井と音無と当麻が扉の前に立ち、横に並ぶ。最初に言葉を発したのは……音無だった。ゆりは窓から外を眺めるような素振りを見せていたが、やがて音無が話しかけると共にその方向を向き、こう言った。

「直井君、音無君と上条君の失われた記憶を戻して見せて」

この言葉に対して、直井は何故か敵意をゆりに向ける。そして、

「僕に命令だと？　……さっきから貴様、何様のつもりだ！！」

ゆりの方を指さしながら、直井はゆりに対してキレた。どうやら自分のことを神だと思っているらしい直井は、誰かに命令されるのを極端に嫌がるらしい。しかし直井は、今や戦線のメンバー。そしてゆりはそんな戦線のリーダー。どちらの方が立場が上かは、一目瞭然だった。

「テメェのリーダーだ！　上司だよ」

「あうっ！」

ポケットの中に突っ込んでいた手を引っこ抜いて、直井の頭をパシ

ンと音無は叩く。叩かれた直井は、短い悲鳴をあげて、頭を抑えた。それほど重い一撃でもないが、叩かれると頭を抑えるのは人間として当然の条件反射だった。

「おとなしく言うことを聞け……って、俺達の記憶！？」

「マジかよ。何でまた」

直井にそう言った後で、音無と当麻は驚く。その理由は……話の中に突然自分の記憶についてのことが現れてきたからだ。いきなり呼び出されて何の話題が出るかと思っていたら、まさかの自分達の話題に関してだ。それで驚かない人間はそう多くはいないだろう。

「そうよ、貴方達の記憶」

窓の方に近づいていた身体を動かし、ゆりは中央に置かれたテーブルの方へと歩みを進める。そしてテーブルの上に両手を置き、本題に入った。

「直井君の催眠術は本物よ。貴方達の失われた記憶も取り戻せるはず」

「ふぅむ……なるほど。それは僕の手で何とかしてみたいですね」

右手であごの部分を抑えながら、直井はそんなことを呟く。だが……音無は身を乗り出して、反論した。

「ちょっと待てよ！　勝手にそんなこと決めんなよ！！」

「どうして？　まさか忘れたままでいたいの？」

「あ、それは……違うけど……」

ゆりの疑問は正しかった。記憶を失った人間が、その記憶を取り戻すのを否定しようとしているのだ。

普通なら、失われた記憶を取り戻したいと考えるはずなのに……どうも音無は逆の言動をとっている。

これを聞いておかしいと思わない人間は、いないだろう。だが、現に音無は記憶を取り戻すことに戸惑っていた。その理由を、音無はこころの中でこう考えた。

（もちろん思い出したい。けど……この不安はなんだ？　それは……もしかして、俺の記憶のせいで、この生活が終わってしまうんじゃないかと……え？　俺は……俺はこんなにも……皆との生活を気に行っていたんだ。でも、過去を思い出してしまって、それでも、これまで通り一緒に過ごしていけるのだろうか？　でも、それでも……）

「音無君？」

「え？」

途中で、ゆりに名前を呼ばれて、音無はようやっと反応を見せた。じっと見つめるゆりの目は……かなり真剣味を帯びていた。音無はそれに少し驚きながらも、

「あ、ああ……分かった」

「あのさ、一ついいか？」

当麻が横にいた直井とゆりに質問をした。

「何かしら？上条君」

「音無はいいとして、俺の場合、直井の催眠術は効くのか？俺にはなんか幻想殺しあるし、催眠術自体無効にしちゃうんじゃ……」

当麻はこの間の一件以来、自分の能力にある程度理解していた。なので、折角のゆりの願いも幻想殺しで無くしてしまうかもしれない。そう思っていたが、

「それなら、大丈夫だと思いますよ。」

直井が直ぐに答えた。

「上条さんのその右手ですが、この間、催眠術を無効化するときに、上条さんはそこの女の頭を触ったんです。肩や腕に触っても解けなかったので、有効な範囲は頭です。きっと大丈夫ですよ」

「な、ならいいが」

戸惑いつつ、そう答えた。すると、横にいた直井が、音無に少しずつ近づきながら、

「どんな過去を見ても……どうか自分を見失わないで」

帽子を取り、徐々に音無に近づいて行く直井。やがて直井は、音無の両手をしっかりと握り、そして語りかけるかのように、言葉を続けた。

「もし貴方がどうなっても、僕だけは、味方ですから……！！」

「……」

笑顔でそう言ってみせる直井の表情を見て、音無はジト目となっている。その表情からは……『何言ってるんだコイツ？』という、明らかにおかしな物を見るような感じがうかがわれた。

「……何か言ってください」

あまりにも音無が反応を示さないので、思わず直井は一言、そう言っていた。その直後に、ゆりが言う。

「私も味方だから、安心しなさい」

「ああ、頼もしいよ」

「俺も味方だぜ。音無」

「ありがとうな、上条」

笑顔でそう言う音無は、どこか清々しいようにも見えた。

「えぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！？　何この差！？」

あまりにも自分とゆりとの扱いが違いすぎるので、直井はどこか不服そうな表情を見せていた。

しかし、その後で帽子をかぶり直し、

「……まぁいいですよ。どうぞ座ってください」

相手が尊敬する音無ということもあって、直井はそれ以上は何も言えなかった。音無に向かって、とりあえず座るように指示を出すと、自分も音無の向かい側の席に座る。何故か慎重に音無はパイプ椅子に座る。ギシッという音を立てて、パイプ椅子が軽い悲鳴をあげた。

「では……始めます」

「……（コクッ）」

直井の言葉を聞いて、音無は無言で頷く。直井の横には、腕を組んで音無の様子を眺めるゆりの姿があった。音無はそれを確認した後で、直井の目をじっと見つめる。すると……直井の目が、赤くなった。

催眠術が、これから音無にかかろうとしているのだ。

「……」

そして、始まる。音無の……過去の物語が。

季節は夏。

窓からはひまわりの花が綺麗に咲いているのがうかがえる。そして今、彼がいるこの場所は……とある病院の病室だった。別に彼が何処かを病んでしまったわけではない。病んでいるのは……彼――――音無結弦の妹。名前を、初音という。音無……結弦は、左目を前髪で隠したような風貌をして、他人の目線から見てみれば、ただその場にいて、無駄な時間を過ごしているかのような感じを読み取らせていた。一言で言うならば……彼からは、生きているような感覚は

しなかった。

「お兄ちゃん、学校楽しい？」

そんな結弦に、初音はそう尋ねてきた。結弦は、面倒くさそうに答える。

「楽しかねぇよ。行ってねぇから」

「行ったら楽しいかもしれないよ？」

「頭がよかったら楽しいかもな」

結弦は、学校に行くのを嫌っている少年だった。初音は、ベッドの上で上半身だけを起こして、結弦と話をする。

「俺バカだからな……成績の悪い奴には、居場所のない所だ」

「勉強は楽しくない？」

「楽しいわけねぇだろ……勉強だぞ？」

「友達は？　友達と遊ぶのは？」

「一人でテレビを見たり、ゲームをしてる方が楽しい。相手の趣味に強引に合わせなきゃいけなかったり、面白くもない冗談に笑わなければいけなかったり……疲れるだけだ」

この頃の結弦は、人づきあいというのが苦手であった。話相手と言ったら、たった今目の前でベッドに寝ている、妹の初音だけ。そん

な初音は、笑顔でこう語る。

「私は勉強楽しみだなぁ……友達作るのも楽しみ」

「……」

身体が弱い為、二年前から初音はずっと入院をしていた。それだけに、学校に行って友達を作るという経験も、一緒に勉強をするという経験もしたことがなかったのだった。

「ああ、そうだ」

この時、何かを思いついたらしい音無は、横に置いてあったカバンを拾い上げ、中を探る。その中から出してきたのは……茶色の紙袋だった。大きさは、何かの雑誌なら一冊は入るくらいのものだった。

「……これ」

それは、結弦と初音の間でいつも行われていること。袋の中身は……漫画雑誌だった。結弦が初音の病室を訪れる時は、いつもこれを買って持っていくのだ。

「わぁ……ありがとうお兄ちゃん」

そして初音は、結弦の本を受け取ると、いつも嬉しそうな顔でほほ笑むのだった。

（俺は、生きている意味が分からない）

生きがいを知らない。他人に興味を持てない。誰とも関わらずに生きているのは……彼にとってその方が楽だからだ。最低限生きていけるだけのバイトを続けて……それだけで、彼にとっては十分だった。

彼は工事現場で交通整理のバイトをしながら……自分が生きていけるだけのお金を稼ぐだけの、他には何もない毎日を続けていた。それでも彼は……初音には毎日会いに行っていた。なけなしの金で、漫画雑誌を買いに行く。いつも適当に、本屋で平積みになっている物を買って行くだけなので、彼にとっては、同じ雑誌を買っているのかどうかも分からなかった。もしかしたら違う雑誌になっていて、話は続いていないのかもしれない。でも……初音は、結弦が雑誌を与える度に、『ありがとう、お兄ちゃん』と、笑顔で、決まってそう言ったのだった。結局、初音にとっては何でも嬉しいようだった。

（妹はきっと俺とは違う。生きることに希望を持っているし、生きる意味も、きっと見つけられる）

結弦は、そう考えた。だが、初音はここ二年、ずっと入院している。

（かわいそうに……代わってやれたらいいのに……）

心の中で、時々結弦はそう呟くのだった。何の希望も持たない、生きる意味も知らない。その蓮杖が、結弦を初音の病室まで連れてっていた。

季節は代わり、冬になった。生い茂っていた木は、葉をなくし、枝だけになっている。
気温は大分下がった。結弦にとっては、この時期のバイトは辛いものだった。指先が傾がんで、裂けそうだった。それでも彼は、生きる為にバイトを続けた。

（生きる？　何の為に？）

時々、彼の頭の中でそんな思考が巡ってくる。その度に、彼は頭の中でその考えを振り払う。なぜなら、そのことを考えてしまったら……今やっているバイトすら辞めてしまいそうだったからだ。

（これだけは続けなきゃな……食う為に、そして妹にプレゼントを買ってあげる為に）

そしてバイトが終わった後で、結弦は公園のベンチに座り、空を見上げる。空からは……粉雪がパラパラと降ってくるのが見えた。そんな光景を見て、結弦はふと思いついたのだった。

（そうだ。クリスマスは、医者に相談して、少しだけでも外に出られるようにしてもらおう）

もうすぐクリスマス。彼はそのことを思い出し……初音の喜ぶ顔が見たいと思った。『ありがとう』という初音の笑顔が見たいと思った。だから、そんなことを計画しようと思い至ったのだ。

（車椅子は雪が積もると使えないのかな……だったらおんぶでいいや。アイツ一人くらい、いくらでもおぶって歩ける。それで、好きな店で好きなものを買ってやろう……出来れば、いいお店でケーキを食べさせてやりたい。だったら、もっと稼がないとな）

そのことを考えついた結弦は、ベンチから立ち上がり……再び、歩き出した。

「初音、もし今度のクリスマスに出歩けるなら、何処へ行きたい？」

次の日。早速結弦は初音にクリスマスの日に何処へ行きたいかを尋ねてみた。すると初音は、マスクをつけたせいでくぐもったような声で、こう言ったのだった。

「街の大通り」

「あんな所でいいのか？」

結弦にとって、街の大通りというのは、単に人が多いだけの場所だと考えていた。それだけに、そんな所に行ってどうするという考えが真っ先に思い浮かんだのだった。だが、初音はその後で理由を述べる。

「だってね～全部の木に電気がつくんだよ？　知ってる？」

「いや……クリスマスにわざわざあんなとこ行かねぇし」

「すっごく綺麗なんだって……去年からそうだったんだって、先生がねぇ、言ってた」

「へぇ……」

楽しそうに話す初音を見て、結弦は少し嬉しくなった。なるべくなら初音の願いを叶えてやりたい……そう考えた結弦は、

「んじゃ……そこ行くか？」

「行けるの？」

「行けるように掛け合ってみる。もし駄目でも、内緒で連れてってやるよ」

すると初音は、一度『本当？』と尋ねる。結弦がそのことに対して肯定の意を示すと、

「やった～♪ありがとうお兄ちゃん♪」

……これまでで、一番大きな『ありがとう』だった。そして、その『ありがとう』を聞いた結弦は、絶対にこの願いを叶えてやりたいと思うようになった。まずはお金をたくさん貯める為に……バイトのかけもちを始めた。家では、寝るだけの生活になった。疲れのあまりに……他に何もすることが出来なくなっていたのだ。そして結弦は思う。

（今は目的があるから働ける気がする）

ただ一つ、結弦が心配していることは……初音の体調が、悪くなっていることだった。そのせいで、医者からの外出の許可は、当然降りなかった。だから結弦は、面会時間が終わった後、病室に忍び込み、初音を夜の街へと連れ出した。

街の大通りは……今までで見たこともないほど絶景となっていた。それこそ……この情景を、いつまでも見ていたい程だった。雪が降っているということもあり、その光景は……どこまでも幻想的だった。

「すげぇ……！　おい、見えてるか！　すっごく綺麗だぞ！！」

心なしか、結弦自身も興奮を覚えていた。背中におぶさっている初音も、

「うん……凄く綺麗……」

弱々しい声で、しかししっかりと感動を覚えていた。それが結弦にとっては嬉しいことだったのか。

「だな……凄く綺麗だ。俺も来てよかったよ。お前のおかげだ！」

嬉しそうに、そう語りかけるのだった。そして、さらに言葉を続ける。

「さぁて～これから楽しい時間が続くぞ？　まずはプレゼントだ。何でも買ってやる。兄ちゃん実は、この日の為にすげぇ貯金貯めてきたんだぜ？　だからどんな高い物でも買ってやる。何が欲しい？」

すべては、初音を喜ばせる為。初音を背中におぶる結弦は、これから訪れる楽しい時間を想い浮かべながら、そんなことを初音に向かって言っていた。……自分自身も楽しくなかったのかと聞かれれば、

恐らくは嘘になるだろう。結弦も、こんなにも美しい景色を見れているのだから、少しばかりテンションが上がっていたのかもしれない。

「まず店に入ろうか。宝石店でもいいぜ……あ、普通にデパートの方がいいか？」

「お兄ちゃん……」

「ん？」

その時、初音からそんな声が聞こえる。結弦は、その場に一旦立ち止まり、初音の言葉を聞く。

そして初音は、一言……こう言ったのだった。

「ありがとうね……」

「あ……ああ！」

その言葉が嬉しくて。結弦は、早く初音に楽しい想いをさせてやりたいと考えた。だから、もう一度歩き出し、そして、矢継ぎ早に、

「買い物の後にもな、いいこと待ってるんだぞぉ？　今度は夕飯だ！　よくわからないけど、雑誌に載っていたいい店予約してあるんだ……」

大きなクリスマスツリーの方へ向かうように歩きながら、背中におぶさっている初音に向かって結弦は言う。その後も……彼は歩きながら、一人で語り続けたのだった。

「では、行きます」

「このまま一人であの家で暮らしていくの？　寂しいだけでしょ？」

「大丈夫です、慣れてますから」

「そう？　……本当に大丈夫かしら。困ったことがあったらいつでもいっておいでね。ご飯だっていつでも食べさせてあげるから」

「……はい、ありがとうございます。このたびは、本当にお世話になりました」

身よりが誰ひとりいなくなった結弦は、しばらくの間親戚の家に引き取られていた。しかし結弦は、自分からその家を出ることにした。理由は……このままいても、生きる意味を再び見つけることが出来そうになかったからである。

（俺は……ちゃんと生きがいを持って生きていたんだ。生きる意味は、すぐそばにあったんだ）

彼が気付かなかった……生きがい。それは、妹の初音に、笑顔で『ありがとう』と言ってもらえることだった。それこそが彼の生きがい……彼の生きる意味だったのだ。それだけで、彼は生きていられたのだ。しかし、彼はそれに気付けなかった。

（バカだ俺……今頃気付くなんて……！！）

今気付いても、失った後では……もう遅い。

（そんな大切な存在だったのに……何もしてやれなかった……！）

募るのは、後悔ばかりだった。大切な存在だったのに……彼女がいるだけで生きていられたのに。

結局彼は何もすることが出来ず……。初音はただ、結弦の買ってきた漫画雑誌を病室で読む……そんな人生しか、送ることが出来なかったのだ。

（そして……そんなアイツを失った俺の人生は……もう、終わってしまったのだろうか？）

気付かない幸せに、満たされていた日々。その時間は、もうすでに過ぎ去ってしまった。後戻りのしようのない……幸せだった、ほんの一瞬の時間。そして結弦は、思った。

（もう俺には……何も残されていない）

それは、もう彼には生きている意味がないということだった。このまま生きる意味も見出せず……惰性する毎日を送ることも辞め。彼は……自らの人生を、絶ってしまうかもしれなかった。だが……そんな彼が、ただ目的もなく道を歩いていただけの彼は、とある病院の前で繰り広げられている会話を、偶然耳にしていた。

「お世話になりました……！！」

「退院おめでとう」

「ありがとうございました♪」

それは、小さな女の子が、初音くらいの年の女の子が。両親に見守られ、看護師に頭をなでられ。
そして、退院の喜びを分かち合っている場面だった。この場面を見た時……結弦の頭の中で、何かのスイッチが入った。

（俺はもう一度……生きがいを見つけられるかもしれない。生きる意味を、見つけられるかもしれない……この命を、誰かの為に費やせるのなら……！！）

そして結弦は、本屋で大量の参考書を購入し、医学事典等も購入した。そう……彼は、医者になることを夢見ようと思ったのだ。その日からの彼は……人が変わったかのように、勉強し始めた。学校では成績優秀生徒として名を連ねるまでに至った。そうして、着実と自らの夢を叶える為に……毎日を生きて行くようになった。だが……そんな夢すらも奪っていった、とある事件が起きた。それは、彼がとある名門大学の受験の為に、電車を使っていた時のことだった。外は雪が降っていて、真冬の受験シーズンの為か、電車内には何人か学生の姿も見受けられた。結弦は、そんな電車の中でつり革につかまり、受験票を確認する。そこには自分の顔写真と、『音無結弦』の名前が記されていた。写真から見受けられるように、彼は左目を覆っていた紙を切り、さっぱりとしていた。

「……？」

少し、電車が揺れたような気がした。だが、気のせいだと考えた結弦は、そのままもう一度受験票に目を通す。……それは電車がトンネルに差し掛かった時の……ことだった。

「！？」

起こってみれば、それは一瞬の話。突然電車が、ガタン！！　という音を発し、車体は大きく揺れ始める。車内の電源は消え、パニック状態。そんな中、結弦は……手にしていた受験票が、宙に舞ってしまうのを見つけた。それを取ろうと必死に手を伸ばしたが……。伸ばした手が、受験票を掴むことは……決してなかった……。

「……」

過去を思い出した時。音無は……かなり落ち込んでいた。そんな音無に、ゆりは尋ねる。

「……思い出した？」

「……ああ」

「素晴らしい人生だったとは……言えそうにないわね」

辛そうに呟く音無の言葉を聞いて、ゆりは言う。そして音無は、目の前にいる直井とゆりに向かって、言った。

「しばらく……一人にしてくれ」

「……」

その言葉を聞くと、ゆりは無言で部屋から出ようとする。その際に、未だに椅子に座ったままその場を動こうとしない直井の肩を叩き、

早く出ろと目で語る。それを悟った直井は、音無を心配するような眼差しを浮かべながら、ゆりと二人、教室から出て行った。当麻はまだ眠っているが、音無は気にせずに、教室の扉が閉まったのを確認すると、やがて頭の中で、思考を始めた。

（惰性で生きて、無気力だった俺は……自分の生きる理由を、お前に教えてもらって……見つけて……それで、夢半ばで死んだのか……何も成し遂げずに死んだのか……！！　そんなのってねぇよ……ねぇよ……死にきれねぇよ……！！）

そして音無は、最愛の妹の名前を……生きる理由を教えてくれた少女の名前を……呟くのだった。

「初音……！！」

## 第１５話　蘇る記憶　その２（後書き）

六甲水「今回も長めですみません。」

音無「謝るなよ。」

六甲水「とりあえず、次回は上条さんの記憶です」

## 第１６話　甦る記憶　その３（前書き）

六甲水「今回で、二人の記憶は蘇ります。とは、いっても、ふたりとも完璧にはという感じではないですが、」

ゆり「そういえば、上条君に催眠術が効くって言うのは、原作でもアリなの？」

六甲水「実際、原作の二巻でも同じようなことあったしいいかなって、」

## 第１６話　甦る記憶　その３

音無が催眠術にかかっている頃、当麻は……

「ところで、直井は何で俺に対する態度が若干音無と同じみたいになってるんだ？」

ある疑問を直井に問いかけていた。確かに、音無以外にはかなり偉そうだが、自分に対する態度が他と違うのが意外だった。

「簡単な話です。あなたに僕の催眠術を破ったからです。あんなの初めてですから、」

「そんな理由かよ。」

「とりあえず、さっさと始めてくれない？」

ゆりが早くしろと促す。直井は「やれやれ」といい。当麻にも催眠術をかけ始めた。

（……確かに、この世界はいつか滅んでしまうかもしれない。惑星にだって寿命はあるし、その前に膨らんだ恒星に呑み込まれるって事も分かっている。そんな風になる前に、地球の表面から生き物がいなくなってしまう確率のほうが高いかもしれない）

でも、と拳を握って突っ込みながら、上条は思う。何も、こんな悲

劇的な結末じゃなくっても良いはずだ。そいつを食い止めるために戦っても良いはずだ。

二つの影が激突した。この記憶は落下するベツレヘムの星で、大天使との戦い。上条当麻の最後の記憶。さらに、記憶は遡っていく。

「確かに、俺は最低の人間だ。ＸＸＸＸＸを騙し続けてきたくだらない人間だ。ひょとしたら、胸をはって、あいつを守ってきたなんて言えないような人生を送ってきたかもしれない。」

上条当麻は。再び右の拳に力を込めた少年は、前を見据えたままこう告げる

「でも、だからって……俺が頭をさげるべき相手は、フィアンマなんかじゃない」

この記憶は、フィアンマと戦うために改めて誓ったときの記憶。

それからあらゆる記憶が蘇っていく。クーデターを起こした王女との戦い。自分が住んでいる学園都市に神の右席の一人と死闘を繰り広げた記憶。フランスのアビニョンへと連れて行かれ、今回の騒動の原因が「Ｃ文書」と呼ばれるローマ正教の霊装をめぐって戦った。左方のテッラとの戦いで、幻想殺しの真実を聞きそこねたこと。

「ああ、ちくしょう。何が必ず約束を守る、だ。」

その視線の先にあるのは、今にも落ちてきそうな夜空の星々ではな

く、

「そうだよな。自信満々に姫神と約束しておきながら、結果がこのザマってんじゃ、俺は本当に心の底からおしまいだよ」

地面に転がって光を放つ、空虚な携帯電話の画面だけで、

「なぁ、そう思うだろう。リドヴィア」

彼は画面を見ながら、最後の言葉を放つ。

「いくらテメェの幻想をぶち殺せたっつってもよ」

この記憶は大覇星祭で使徒十字を破ったときの記憶。

「涙を拭って前を見ろ。胸を張って誇りに思え。ここにいる全員が、お前に死なれちゃ困ると思ってんだ。今からお前に見せてやる。お前の住んでるこの世界には、まだまだ救いがあるって事を！そして教えてやる！お前の居場所（げんそうで）1は、これくらいじゃ簡単に壊れはしないってことを！！」

ＸＸＸＸの友達、風斬氷華の正体を知っても魔術師と戦った時の記憶。

「ああ、俺は確かに不幸だったこの夏休みだけで何度も死にかけたよ、　一度なんか右腕を丸ごと切断された事もあった。　そりゃクラスメイトを一列に並べて比べりゃ、こんな不幸な夏休みを送ってんのは俺一人だろうさ。」

けどな、と上条は続けて、

「俺はたった一度でも、後悔してるなんて言ったか？　こんなに『不幸』な夏休みは送りたくなかったなんて言ったかよ！　冗談じゃねえ、確かに俺の夏休みは『不幸』だった。だけど、それが何だ？　そんな程度で、この俺が後悔するとでも思ってんのか？」

そうだ。姫神秋沙を『三沢塾』から助け出したのは、上条当麻だ。そうだ。御坂妹を『実験』から救い出したのだって、上条当麻だ。そして。あの白い少女の笑みを守り抜いたのだって、恐らくは。たとえそれが誰かに巻き込まれたものでも、　きっかけはほんの偶然が重なった『不幸』によるものだったとしても、　その一点だけは誇るべきだ。　逆にゾッとする。もしも上条が『幸運』にもこれらの事件に巻き込まれなかった時のことを考えると。

「確かに俺が『不幸』じゃなければ、もっと平穏な世界に生きていられたと思う。　この夏休みだって、何度も何度も死にかけるようなものにはならなかったはずだけど、そんなもんが『幸運』なのか？

自文がのうのうと暮らしている影で別の誰かが苦しんで、血まみれになって、助けを求めて、そんなことにも気づかずに！　ただふらふらと生きていることのふどこが『幸運』だっていうんだ！？惨めったらしい『幸運』なんざ押し付けんな！　こんなにも素晴らしい『不幸』を俺から奪うな！この道は、俺が歩く。　これまでも、これからも、決して後悔しないために！」

だから、邪魔をするな。　『幸運』なんて欲しくない。すぐ側でみんなが苦しんでいる事にも気づけずに、　ただ一人のうのうと生き続けるぐらいなら、　『不幸』に苦しむ人々にいくらでも巻き込まれてやる。　だからこそ、上条当麻は言う。

「『不幸』だなんて見下してんじゃねえ！　俺は今、世界で一番『幸せ』なんだ！」

父親が自分のことを思って行った事だが、自分が不幸だからこそ、幸せの人では決して出会えなかった不幸を奪おうとした父親を叱った時の記憶。

「歯を食いしばれよ、最強（さいきょう）1――――――俺の最弱（さいじゃく）1は、ちっとばっか響くぞ」

ある姉とその妹達を殺そうとしたレベル5と。　そんな彼女達を助けようとしたレベル0との最後の戦いの記憶。

そして……

「とうま、覚えてない？私達、学生寮のベランダで出会ったんだよ？」

「――俺、学生寮なんかに住んでたの？」

「……とうま、覚えてない？とうまの右手で私の『歩く協会』が壊れちゃったんだよ？」

「――あるくきょうかいって、なに？『歩く協会』……散歩クラブ？」

「……とうま、覚えてない？とうまは私のために魔術師と戦ってくれたんだよ？」

「――とうまって、誰の名前？」

XXXXXの口は、あと少しで止まってしまいそうだった。

「とうま、覚えてない？」

それでも、これだけは言っておきたかった。

「XXXXXは、とうまの事が大好きだったんだよ？」

ごめん、と透明な少年は言った。

「XXXXXって、何？人の名前じゃないだろうから、俺、犬か猫でも飼ってるの？」

この記憶は、ある少女の為についた優しい嘘の記憶。自分の記憶は全部無くなっているだけど、

「案外、俺はまだ覚えているかもしれないですね」

カエル顔の医者が少しびっくりしたように透明な少年を見た。

「君の『思い出』は、脳細胞ごと『死んで』いるはずだけどね？」

我ながらつまらないことを言ってるな、と医者は言う。けれど、医者は言った。

「パソコンで言うなら、ハードディスク　丸ごと焼き切ったって状態なのに。脳に情報が残ってないなら、一体人間のどこに思い出が残ってるって言うんだい？」

なんとなく、この少年の答えは。

そんなつまらない理屈など、一発で吹き飛ばしてくれるかも、と思ったから。

「どこって、そりゃあ決まってますよ」

透明な少年は答える。

「――――心に、じゃないですか？」

当麻が目覚めたときには、すでにゆりや直井がいなく、音無が一人泣いていた。当麻は一人にしておくべきだと思ったが、音無は当麻が起きたことに気が付き、話しかけた。

「お前も、記憶が戻ったのか？」

「……それなりにはな。あんな人生だったなんてな。」

辛い戦い。楽しき日常。当麻の記憶はそれに満ちていた。だが、ただ一つ思い出せなかったのは……

「だけど、ひとつだけ、思い出せなかったんだ。」

「何を？」

音無は質問した。音無自身も自分の記憶がまだ思い出せていないことがある。なので、同じ境遇の当麻に質問した。

「俺はある女の子に一つだけ、誰も傷つけない優しい嘘をついたんだ。その嘘は覚えている。だけど、その女の子のことが思い出せないんだ。記憶を無くした俺に大切な事を教えてくれた女の子のことを……」

「上条……少し、外に出ようぜ。」

屋上に向かう途中で、当麻と音無はお互いの記憶のこと話していた。

音無は自分には夢を与えてくれた大切な妹のことを……
当麻は7月の頃から記憶を失っていることを……そこに大切な女の子がいた事を……

夕方の屋上。
一人たそがれているのは……ゆりだった。音無のあれだけの落ち込みっぷりを見て、やはり記憶を思い出すと言うのが……辛いことだったんだなということを考えていた。それもそのはずで、この世界に送られる人々というのが、生前に未練や後悔を残した者達だからだ。音無自身にも、そんな過去があって当然のことだったのだろう。片手に持つＫｅｙコーヒーのタブも開けないで、ゆりはフェンスに寄りかかって、ただ空を眺めていた。ちょうどその時のことだった。

「……」

「落ち着いた？」

ポケットに手を突っ込んでいる音無と当麻が、屋上にやってきた。
ゆりの質問に対して、

「ああ……」

「なんとかな」

と、二人は短く答える。

「記憶が戻ってしばらくは心が不安定なものよ。貴方だけじゃないわ。上条くんは何か大丈夫そうね」

そう言いながら、ゆりはあらかじめ買っておいたもう二本のＫｅｙコーヒーを音無と当麻に渡す。音無はそれを無言で受け取ると、

「俺は弱いな……お前の強さが改めて分かった」

呟くように、音無は言った。しかしゆりはそれを柔らかく否定する。

「そんなことないわ」

Ｋｅｙコーヒーを軽く握りしめて、音無は笑った。ゆりは尋ねる。

「それで、何か変わった？」

「ん？」

「気持ちよ。これからも戦線に居続けるの？」

その問いに対して、音無は即座に答えた。

「居続けるよ……このままじゃ死にきれねぇし」

「そっ。貴方にも目的が生まれたってわけね」

「ああ……」

コーヒーのタブを開けて、それから音無は言った。

「改めて……よろしく」

「ええ……」

カツン、と缶と缶がぶつかり合う音がする。その後で、音無はＫｅｙコーヒーを一気に飲む。

「……」

ゆりは、そんな音無の姿を見て、優しげに微笑むのだった。

「上条君の方は？完璧に戻ったのかしら？」

今度は当麻に尋ねるゆり、当麻は少し考えこみ。

「まだ一つだけ、思い出してないけど、今はこの世界で、お前達と一緒に戦うよ。きっと、ここで、無くした物が見つかると思うから」

「そう。じゃあ、ふたりとも、これからよろしくね」

## 第１６話　甦る記憶　その３（後書き）

六甲水「とりあえず、当麻の記憶はまだ不完全ですね」

ゆり「そうね。それで、ラストはどうするか決めたのかしら？」

六甲水「もちろん、ちなみにこの話で、第１部は終わりです。次から第２部です。お楽しみに」

## 第17話　関根の情報収集（前書き）

六甲水「第2部のスタートです。今回は上条さんがフラグを立てている人たちに関根が……」

ゆり「フラグ立てる気まんまんね」

## 第１７話　関根の情報収集

ある日の午後、入江は一人ため息を付いていた。

「はぁ、あの噂本当かな？」

あの噂というと、テスト中に当麻がｓｓｓのリーダーであるゆりに告白をしたとか、オペレーターの遊佐と二人っきりで何かをしてたとかの噂が今、学園中を盛り上げていた。もちろん、他のｓｓｓメンバーは本当のことを知っているが……入江はだんだんと悪い方向に考えてしまっていた。

「上条さんって、ゆりっぺさんみたいな人が好きなのかな？それとも、遊佐ちゃんみたいなおとなしい子が好きだったり、私はどうすれば……」

入江の独り言は誰も聞いていないと思っていたが、教室の扉の影で関根が聞いていた。

（これは、親友であるみゆきちのピンチだ。ここは私が……）

この関根の行為がある問題を起こすのだった。

関根はまず、ゆりの所に向かった。ゆりは校長室で一人、椅子に座って今後の事を考えていた。

「失礼します。ゆりっぺさん。」

「ん、どうしたの関根さん？あなたがここに来るなんて珍しい。」

「実はですね。ゆりっぺさんに一つお聞きしたいことがあるんです」

「聞きたいこと？」

普段、校長室に来ない関根が来た事自体珍しいことだが、さらに珍しいことに何かを聞きたいと言われると、本当に珍しい。とりあえず、聞いてみることにしたゆりだが、

「ゆりっぺさんは上条さんのことどう思ってるんですか？」

聞かなければよかったと後悔したのだった。

「どうって、上条君はただの仲間よ。そう、大切な仲間。それぐらいにしか思ってないわ」

少し頬赤らめながら、答えるゆり。だが、関根はまだ質問を続けた。

「では、この間、上条さんに告白されたと聞きましたが、そのことには？」

「な、何で知ってるのよ。」

「噂になってますので、上条さんがゆりっぺさんにコクッたと。」

「誰よ。そんな噂流したのは」

その噂自体初耳のゆりだが、噂を流した犯人は、目の前にいる関根だったということはだれも知らない。

「それで、どうなんですか？」

「え、えっと、そりゃ、あれは、いわゆる上条君なりの天使の気を引くためにやったことだし、本気にしてないわ。ただ……」

（直井の催眠術から救ってくれた時の上条君は、凄くかっこ良く思えた。）

ゆりはあれから少しだけ、当麻のことが気になり始めていた。そんな事を考えていると中、関根は……

（ふむ、これは脈アリだね。）

とりあえず、ゆりに当麻のことを聞き納得したので、関根はそのまま校長室を出て行った。

今度は、屋上にいる遊佐に質問をしに行った。

「遊佐ちゃん。」

「……関根さん。どうしたんですか？」

（遊佐ちゃんは無表情で、聞き出すのは難しいと思うけど、こういう子こそ、案外ボロを出すかもしれないね）

そう思い、関根は遠まわしに聞かず、直球勝負で挑んだ。

「ねぇ、遊佐ちゃんって、上条さんのこと好きでしょ」

「えっ、それはどうでしょう」

遊佐は顔を赤らめながら答えた。これは脈アリだなと思い、関根はさらに質問を続けた。

「どうでしょうって、思いっきり顔に出てるよ」

「それは……あんまり私は恋と云うものを知らないのです。ただ、彼のことを思うとなんだか顔が熱くなって、それ以前に、上条さんの顔を見るたびに直視できないんです」

（ふむ、こういう子ほどいいね。とりあえず、これぐらいにして、練習に戻ろう）

屋上を後にし、駆け足で教室に戻ろうとしたとき、とっさに階段を踏むはずしてしまい、そのまま落ちてしまった。

（あっ、これは死んだ。）

そう思い、目を閉じたが……あまり痛くなかった。目を開けるとそこには、当麻が自分の下敷きになっていてくれた。さらに、落ちそうになった私をキャッチしようとしたが、失敗してしまい、一緒に倒れてしまったんだと思う。

「いてて、大丈夫か？関根」

「え、あっ、上条さん。上条さんの方こそ、大丈夫ですか？」

当麻は頭を抑えながら、立ち上がった。

「俺は大丈夫だけど、お前は怪我とかしてないよな。」

「はい、大丈夫です。」

「なら良かったけど、お前が怪我でもしたら、困るからな。（ガルデモのメンバーが）」

「えっと、そうですね。ありがとうございます」

そのまま、走り去ってしまった。関根であった。当麻は何事かと思ったが、あまり気にせず屋上に向かっていった。

（ど、ど、ど、ど、どうしよう。上条さんの事好きになっちゃったかも）

現在の上条当麻のフラグ　入江、ゆり、遊佐、関根。

## 第17話　関根の情報収集（後書き）

六甲水「とりあえず、この四人でフラグ立つのは終わりかな」

ユイ「ひさ子さんや椎名さんには立てないんですか？」

六甲水「ユイと奏以外の女子メンバーにフラグでも立てたら、男子メンバーに殺されるからね。上条さん」

ユイ「確かに」

## 第１８話　モンスターストリーム　前編（前書き）

六甲水「今回はあのモンスターストリーム回です。」

# 第18話　モンスターストリーム　前編

「で、報告って何？」

いつものように、校長室にて作戦会議が始まった。ゆりは校長の椅子に座り、高松の報告を聞く。

「本日の食券が不足しているとのことです」

「確かに腹減るのは嫌だぜ。ゆり」

当麻の言う通り。この世界が例え死後の世界といえども、この世界の住人はお腹は空く。飢えはしないが、空腹だけはどうしても感じてしまうのだ。もっとも……生きていた頃の生活を再現している世界という点では、それも合致するのだが。

「どうする？　トルネードいっとくか？」

藤巻がそう提案する。『トルネード』とは……音無と当麻が初めて戦線に入った時に行った『オペレーショントルネード』のことを指すのだが、その説明に関しては省略しても構わないだろう。

「いや、今日のオペレーションは……モンスターストリームよ」

ゆりは、両手を組んで顔の前に出している体勢で、全員にそう告げる。バックスクリーンには、『モンスターストリーム』という名前が、回転するＳＳＳエンブレムと共に映し出された。瞬間。

「ついに来おったか！！」

「あああああああ

先ほどまで好き勝手に想像していた当麻と音無の二人が……固まった。そして音無は、ようやっとこう尋ねる。

「そ、それってもしかして単なる川釣りなんじゃ……」

「そうだけど……それがどうかしたか？」

何を言っているんだ、というような表情で、日向は言う。それに対して、音無は『ああ』とだけ答えた後、

（また釣られてバカな想像してしまった……）

と、心の中で呟いた。

とりあえず、ＳＳＳメンバー全員でいくことになった。途中であった入江達と遊佐も誘い、一緒に行くことになったが……そんな時に。

「……あ」

植物園の前を通る時。音無は、その中央に、しゃがんでいる少女を見つけた。その少女は麦わら帽子を被っていて、何やら花を眺めている様子だった。

「……そんな所で何してるんだ？」

自然と、音無は話しかけていた。しゃがんでいた少女は、立ち上がって……手を広げる。すると、その中にいた蝶が、何処かへ飛び去って行った。その蝶の行方を音無が追っていると、

「草むしりとか、色々……」

短く、少女———立華奏は、そう呟いて見せた。その声を聞いた音無は、首を奏の方に向ける。そして……花壇とはいえど、花に囲まれている奏の姿を見て……一瞬、見惚れてしまっていた。

「そ、そうか……」

恥ずかしさのあまりか、少し頬を赤らめて、右手で頬を軽く掻く。その後で、何かを思いついたような表情を浮かべて、

「そ、そうだ！　お前も来いよ！」

「え？」

当然、何処へ行くか目的地も伝えられていない奏は、そう答える。そんな奏に説明するように、音無は言った。

「今からみんなで川釣りに行くんだ」

「川……？　あそこに近づくのは校則違反よ。危ないから」

いつもの口調で、奏はそう言う。しかし、音無はそれでも諦めなかった。

「いいじゃねえかよ。お前だってもう生徒会長じゃないんだし、破ってやれよ」

「でも、生徒だから……」

それでも川に行くことを拒む奏。少し考える素振りを見せて……音無は、何かを思いついたような笑顔になった。

「……へっ！」

「……？」

奏に近づいたかと思うと、その手を掴み……引っ張って行った。何の抵抗もしてなかった奏の身体は、音無によって引っ張られて行く。その際に、麦わら帽子がその場に落ちたのだが、二人の内のどちらかが拾うことはなかった。

# 第19話　モンスターストリーム　後編

「「「「うう……！！」」」」

「あ……いや、その……」

音無が奏を連れて川まで来てみれば、戦線メンバーは全員で奏から離れて塊となり、警戒心を剥き出しにしていた。それも当然だろうと思われる……何故なら、戦線のメンバーにとっては、奏は……『天使』は敵なのだから。ただ、塊となっている彼らの陣形は、少し可笑しいようにも見えた。リーダーであるゆりの背後に隠れているのは、百歩譲っていいとしても、前衛として戦える筈の野田と藤巻が、一番後ろに隠れていた。更に言えば、男子が女子の背後に隠れているという、何とも情けない姿を見せていた。

「お前ら、何か見てて悲しくなってきたぞ」

「何だか見ていて情けないね……」

「みゆきち……それは言っちゃいけないと思うよ」

少し離れた場所で、ガルデモのメンバー（ユイを除く）と当麻が呆れた表情で戦線メンバーを見ていた。普段『天使』と戦うことのない彼女達は、特に怯える必要は何処にもない為に、平然としていた。当麻にいたっては出会った当初からある程度仲がいいので、そこまで怯えていなかった。

「お前、なんて奴連れて来んだよ……」

最初に戦線メンバーの中で話しかけてきたのは、日向だった。彼自身も怯えているような素振りを見せつつ、ようやっとのことであった。

「いいじゃねえか。混ぜてやろうぜ？」

「まぁ……俺も音無の意見には賛成だ。お前達はどうだ？」

音無の言葉の後で、当麻が戦線メンバーに尋ねる。特に奏と仲良くするのは、今後この世界で必要なことなのかもしれないと思ったからである。だが、野田が反論する。

「敵だぞ！　我らが戦線の宿敵だぞ！！」

「アホですね☆」

「浅はかなり……」

その後で、ユイ・椎名が付け加える。どうやら戦線メンバーは未だに奏を敵だと思っているらしい。

「聞いてくれ！　もう無害だ……敵じゃない！！」

音無は必死に説得する。

「だがまがりなりにも元生徒会長だぞ！？」

だが、野田はまともな反論を述べる。その後で、高松が付け加えるように言った。

「ちなみに、現生徒会長代理もいますが」

「その通りです……が、その前に僕は神です」

「どうすんだよ、ゆりっぺ」

「……」

日向がゆりにそう尋ねる。するとゆりは、一旦奏のことを一瞥して、少し考える。そして……。

「もう生徒会長でもないし、いいんじゃない？」

「「「「うぇえええええ！！！？？？？」」」」

これには一同は全員で驚いた。何しろ、『天使』に一番敵対しているはずのゆりが、まさか賛成するとは思っていなかったからだ。

「だ、大丈夫かよ……」

「何か凄いメンバーになりつつあるな……」

藤巻と日向が、そんなことを呟いた。

「そういえば、俺ら道具持ってきてないが、大丈夫なのか？」

「あ、私もそれ思った！　どうなの？　音無君」

「どうなのと聞かれてもな……」

当麻の言葉に入江が反応したと思ったら、自分に話が振られるとは思っていなかった音無は、運悪く回答を持ち合わせていなかった。それをフォローするかのように、日向が言った。

「既にギルドに連絡が行ってるから大丈夫さ」

「ギルド？なんだそりゃ？」

「そういえば、上条は知らなかったっけ」

と音無が言った。確かに、当麻は一回もギルドに行ったこともなく、初耳でもあった。

「ギルドって云うのは簡単に、地下で俺達の武器を作ってくれるんだよ。」

「そういえば、思いっきり気になってたな。てっきり最初からあるものを使ってるんだと思ったけど、」

当麻と音無が話していると、入江が何かに気がつき、指を差した。音無と当麻も入江が指さした方を見ると、そこには岩場に座り、麦わら帽子を被った青年だった。よく見ると……釣竿を持っているようにも見えた。瞬間。

「しゃあああああああああ！！」

「「「「おおおおおおおおおおおお！！！！」」」」

驚きの声をあげる一同。それもそのはずで、目の前にいた青年が……うまく魚を釣り上げたのだから。

「……彼は？」

「斉藤って奴だ。銃にも詳しいが、ギルドではフィッシュ斉藤と呼ばれる釣りマニアでねぇ」

「ギルドってそんなところなのか」

「いや、あれは違うからな。」

ギルドに関して、少しばかり残念なイメージを持ってしまった当麻にやんわりとツッコミを入れる音無。それを無視するかのように、日向の説明は続く。

「このオペレーターの時だけは、大量の釣り道具を荷車に積めて地上まで上がってくる」

「……あの距離をか！？」

そうツッコミを入れて、そして一言。

「どんだけ釣り好きなんだよ……」

「ようはアホですね☆」

ユイによる付け足しの言葉が入ったところで、

「よぉし、始めるか！」

「おおおおお！」

松下の言葉を受けて、戦線メンバー＋ガルデモメンバー＋奏による川釣りが始まった。

そうして始まった、一同の川釣り。こんなにもたくさん人が来ていることもあって、かなり賑やかなものとなっていた。釣りというものは、本来集中力が必要となってくるので、もっと静寂な時間が流れるものだと思いきや。

「上条さん。餌つけられないです」

「ん、しょうがねぇな。ほら、入江。針と餌貸せ。」

餌を付けられない入江の代わりに餌の虫を掴んで、餌をつける当麻。つけ終わると入江は嬉しそうに

「ありがとうございます。上条さん。」

「いや、別にいいけど、」

若干桃色の空間が広がりつつあった。だが、それを見逃さなかった女性たちがいた。

（まさかあの手で攻めるなんて）

と餌をつけようとしているゆり。

（みゆきち、みゆきちの天然があそこまでやるなんて……）

と二人の様子を観て、観察する関根。

「……上条さん。私のもお願いできますか？」

そういって、釣竿と餌を持っていった遊佐。当麻は「やれやれ」といいながら付けてあげる。

（馬鹿な、あの遊佐さんがあんなふうに動くなんて）

（これは、やばい。ここは、同じ手で、いや。いい加減呆れてるはずだ。なら、）

何かを思いついた関根は、釣竿の針をスカートに引っ掛け、当麻を呼んだ。

「上条さ～ん。助けてください」

「ん、どうしたって、うわ、なにしてるんだよ」

関根の作戦、それはパンチラだった。できないところをアピールするのではなく、色仕掛けを仕組んだ。結果、当麻は顔を赤らめながらも、針を取ってくれた。

（まぁ、実際こんなハピニングがあって、上条さんに見られたら、平手打ちだけど、今回はサービスということで）

（くっ、やばいわ。こうなったら……）

「か、上条く～ん。私もつけらんな～い」

ゆりの精一杯の猫かぶりで、当麻に甘えてみた。だが、当麻は思いっきり嫌そうな顔をして、

「ゆり、お前怖いぞ」

「う、う、うるさーーーーーーい」

同じころ、音無が普通に川釣りを体験していると、竿を持って立っている奏がいた。何かを考えているようで、その表情はやはり無表情なのだが、何処か戸惑いを感じられた。

「……立華」

「……？」

だから音無は、無意識の内に奏に話しかけていた。話かけられた奏は、首を傾げて音無を見る。

「俺達は消えない。だから、仲良くしてもいいんだよ」

「……」

「ほら、みんなと一緒に釣りしよう」

「……うん」

音無の言葉に頷くと、奏は竿を後ろに思い切り振る。すると……偶然後ろにいた日向の口に、

「イハハハハハ！　伸びる伸びる！」

「……ここからどうするの？」

「違う違う！」

どうやら釣りについてあまり詳しくないらしい奏に、音無はとりあえずある程度のことだけは教えることにした。まずは日向の口に刺さった針を取る作業から。

「ふぅ……助かったぜ。俺、あっちに行ってみるから、『天使』のことはお前に任せたぜ」

「ああ……分かった」

釣り道具を持って別の場所に移動する日向を見送った後、音無は奏の方を向いて、

「よし……まずはルアーか、餌を針の先につけるんだ」

「……うん」

言われて、奏は針の先に、うねうね動いている虫をつけた。それを平然と眺める奏に、音無は思わず一言。

「お前……虫平気なんだな」

「次は？」

奏は次の行動を要求する。音無は、竿を振るようなジェスチャーを交えながら、

「川に向かって竿をおもいっきり、振ってみろ！」

「……！」

奏は、言われた通りに竿をおもいっきり振りかぶって……そして、一気に振り下ろした。すると、

「ぅおわあああああああああ！」

何か人らしきものが、空の彼方へと飛び去っていくのが目に映った。それは確かに人であり……竹山であった。鼻に餌をくっ付けた状態で、何処かへ飛んでいっていた。

「た、竹山ぁあああああああああ！！」

「つかお前……凄い怪力だな」

奏の横にいる音無は、驚愕の表情を浮かべつつ、そう尋ねる。すると奏は、いつもの表情で、一言。

「オーバードライブはパッシブだから」

「……パッシブ？」

「もしかしたら……」

「？」

その時。今まで黙っていたフィッシュ斉藤が、奏の近くに寄ってきて、そして言った。

「もしかしたら、アンタならいけるかもしれないな」

「？　……何がだ？」

音無がそう尋ねている内に、奏はもう一個の餌をつけて、川の中に入れていた。そんな動作をフィッシュ斉藤は見つつ、話を続けた。

「主を釣り上げるってことだよ。ソイツはオペレーションネーム通りの化け物なのさ」

「……？」

音無が反応に困っていた、その時。音無の裾を奏が引く姿があった。

「……何か引いてる」

「え？」

瞬間、竿がビシッと悲鳴をあげたかと思ったら……突如として川の中央で巨大な竜巻が発生した。それを見たフィッシュ斉藤が一言。

「モ……モンスターストリーム！？」

「え？　これが！？」

音無は、たじろぎながらそう尋ねる。フィッシュ斉藤は、あまり冷静とは言えないような口調で、言った。

「本来モンスターストリームは主の怒りの証。これが起きたら即全員離脱！！　だが……その子ならもしや……！！」

期待を込めてフィッシュ斉藤は言う。しかし、奏の身体は……徐々に川に引きずり込まれつつあった。

さすがにこのままではまずいと思ったのか、音無は自然と身体を奏の方へ動かしていた。

「……マジでやんのかよ！！　どんだけでかいんだよ！！　竿が折れるぞ！！」

奏の身体をしっかりと抱きしめ、川に引きずりこまれないようにする。すると、音無の後ろにフィッシュ斉藤がやってきて、

「おいらの腕を侮っちゃ困る！　主にも耐えられる特別製だ！！」

「だとしても！　このままじゃ絶対に無理だぁあああああああああ！！」

さすがに主を釣り上げるとなると、三人じゃ人手不足だ。そう考えている最中、

「！？　なんだよ……主をやる気か！？　正気じゃねぇな……！！」

最初に気付いた日向が、音無達のやろうとしていることに対してまずそう感想を持ち、そして。

「松下五段！　肉うどん優先して回してやるから手伝え！！」

「おうよ！！」

日向は松下を呼び、どんどん音無達に加勢して行く。

「おいおい、だんだんと凄いことになってるな。手伝うか」

当麻も加勢にいく。それを見て、入江や関根、遊佐までも加勢をしに行った。次第に人数は増えて行き、やがてその場にいる全員が主を釣り上げる為に全力を出すことに。後から来た人は前の人を支えるように。順番に後ろについて行く。

「せ～の！！」

音無の声に合わせて、全員が引っ張って行く。その規模は……もはや並半端なことではなかった。

「うおぉぁぁぁ

「俺達ごとかよ！！」

「どっちがモンスターだよ！！」

「ねぇこの状況！！」

「まずいですね……」

上から順番に、日向・藤巻・野田・大山・高松の順番。メンバーとして参加していた人達が、上空に舞い……そして、その下には大きく口を開ける、川の主が。

「おい、上条、お前の右手で」

「そんな余裕あるか」

日向は当麻の幻想殺しでどうにか出来ると思い、提案してみるが、今の状況でそんな事ができるはずがない。ましてや、幻想殺しが聞くか自体怪しい。

「このまま落ちたら食われるぞ！！」

「ｃｒａｚｙ　ｆｏｒ　ｙｏｕ！！」

「神は落ちない……うわぁあああああああああああああああああああ！！」

「浅はかなり……」

松下・ＴＫ・直井・椎名の四人の声と共に……一同は重力に逆らうことなく、真下へと転落する。
だがその先には……大きな口を開けた川の主。このままだと、確実に彼らは食われてしまう！！

「「「「「「「食われるぅうううううううううううううううううう！！」」」」」」」

「助けなきゃ……」

一番川の主から遠い位置にいる奏が、落ちて行く一同を見てそう呟く。すると、

「Ｇｉｒｄ　Ｓｋｉｌｌ　Ｈａｒｍｏｎｉｃｓ」

上空にて奏は分裂し、そして真下に落ちながら、両腕から『Ｈａｎｄ　Ｓｏｎｉｃ』を出現させる。そして、川の主を……上空で捌いてみせたのだった。捌かれた川の主は、当然空中でバラバラとなり……下の岩場に肉片が散らばっていった。

「まるで慈善事業だな……」

「戦線どころか、何かの奉仕団体になってるぞ」

野田の言っていることは、正しかった。音無の発案によって、あまりに余った川の主の肉を一気に調理して、一般生徒に分けることにしたのだ。グラウンドの中央で調理をして、そこにはいつの間にか

行列が出来上がっていた。

「でも、戦う相手もいなくなっちゃったし……戦線でもなくなっちゃうのかな？」

大山がそう呟くと、

「んじゃ一体何になるってんだよ？」

藤巻がそう尋ねてきた。苦い笑顔を浮かべて、大山が一言。

「う～ん……死なないようにぐうたらしてますチーム？」

「なんだよそりゃ……」

藤巻が小さな声でそう呟いた。

（まさかこんな時間が訪れるなんて思ってもみなかった……）

隣で調理をしている奏を眺めて、音無は心の中でそう呟く。そして、いつの間にか音無は奏に対して言葉を発していた。

「なぁ立華……下の名前で呼んでもいいか？」

「どうして？」

その質問は、当たり前のようにも聞こえた。何せいきなり『下の名前で呼んでもいいか』なんて聞かれたのだから。その理由を、音無はこう言った。

「親しくなったからだよ……」

「なった？」

「なったじゃないか。一緒に釣りに行って、一緒に料理して……それに、最初から思ってたんだよ、綺麗な名前だなって……」

「……」

奏は、何も言わなかった。ただ黙々と手を動かして、しかし音無の言葉を無視しているわけでもなかった。そんな奏に、更に音無は言葉を付け加える。

「好きだよ……お前の名前」

「……」

「『奏』って、音を奏でるって意味だろ？」

「貴方がそうしたければ、どうぞお好きに」

音無の言葉を遮るかのように、奏はそう言った。そんな奏に、今度は自分の名前を教える。

「俺の名前は結弦。弦を結ぶって書いて結弦。そう呼んでくれていい」

「……うん」

小さく、奏が頷いた。それを見て満足した音無は、

「じゃあ……奏。聞いて欲しい頼みがあるんだ」

「何？」

「これからも……みんなと一緒にいてくれ」

それは、音無の心からの願いだった。それに対して奏は、

「どうして？」

と尋ねるばかり。音無は、その理由を説明した。

「もう誰とも戦って欲しくないから……みんなと楽しく過ごして欲しいから。その……それに……俺もお前と一緒にいたいからな」

顔が赤くなっていくのを、音無は感じていた。身体が少し温かくなっていくのを感じていた。

やがて奏は、少し考える素振りを見せた後に、

「貴方がそう言うなら、そうする……」

「……約束だからな」

「……うん」

奏は、少し何時もよりも感情が篭った声で、音無の言葉に頷いた。

「何かいい感じだな」

音無の隣にせっせと料理をしている当麻は二人のラヴラヴ空間に耐えながら続けていた。

「……何が？」

「いや、なんでもない。」

当麻はこんな楽しい日々も悪くないと思っていた。けど……それはつかの間だったとは思っていなかった。

戦線メンバー＋ガルデモメンバー＋奏で食器などの片付けをしてる中、野田があることに気がついた

「そういえば、ゆりっぺは？」

「そういえば言われてみればいないな」

「どうせどっかで高みの見物だろ。こんな奉仕活動に参加するタマかよ。つか、てめぇも手伝え」

日向と藤巻が洗い物しながら藤巻の質問に答える。当麻も音無と奏と一緒に食器を運んでいた。その時、傷だらけで、倒れるゆりがいた。音無たちはゆりのところに集まった。

野田「ゆりっぺ、誰にやられた？」

ゆり「うっ、天使」

ゆりは精一杯の力で自分を襲った犯人の名前を言った。音無は奏の事をみて、再びゆりに言った。

「待てよ。奏はずっと俺達と一緒にいたんだ。そうだよな。上条」

「あぁ、それにこいつは何の理由もなしにそんな事やるはずは……」

「……！！」

「え？」

ゆりが、とある方向を向く。全員がその方向を見てみれば……。

「う、嘘……だろ？」

「そんな……バカな……！！」

驚きの声をあげたのは、当麻に野田だった。月を背景に、彼らを見下ろしているその姿は、まさしく……。

「『天使』……」

そこには、立華奏の姿をした、もう一人の存在がいた。

## 第19話　モンスターストリーム　後編（後書き）

六甲水「偽天使の襲来。そして、上条さんの幻想殺しが……」

日向「何が起こるんだよ。」

## 第２０話　堕ちる天使　その１（前書き）

六甲水「原作でもかなりお気に入りの回です。」

当麻「そうなのか？」

六甲水「もちろん、上条さんにも見せ場があります」

当麻「日向達みたいなことは嫌だぞ」

## 第２０話　堕ちる天使　その１

屋上に立つ少女は、そのまま恭介達がいる所まで……一気に飛び降りてくる。ドン！　という激しい衝突音こそしたが、その少女はまったくの無傷だった。

「みんなで夜遊び……なら、お仕置きね」

「？！」

その瞳は、奏の物とは違い……赤かった。まるで明確な殺意でも示しているかのような、鋭い目つき。

見ているだけで、身体が硬直しそうだった。その姿は、『天使』というよりも……。

「人間に近い奴か？」

当麻がそう言ったが、誰の耳にも聞こえなかった。

「……」

右腕をあげる、少女するとそこから、奏がいつも使う、『Ｈａｎｄ　Ｓｏｎｉｃ』が出現した。それを出して……ゆり達の方へと斬りかかる。

「！！」

音無に介抱されていたゆりは、その音無を払いのけると、ポケット

よりナイフを取り出して、少女と戦う。ナイフと『Ｈａｎｄ　Ｓｏｎｉｃ』がぶつかり合う度に、周りに火花が散る。

「これは一体、どういうことだよ……」

「『天使』は……立華は無害じゃかったのかよ！？」

当麻が驚いたような声をあげて、藤巻が叫ぶ。そんな中、心の中で音無は思う。

「（違う……アイツは奏じゃない。奏は無抵抗な俺達には、刃を向けたりはしなかった……！！）」

前述した通り、奏は無抵抗な彼らに刃を向けることはない。攻撃するのは、相手が明らかなる攻撃意識を持っている時だけ。つまり……こちら側から攻撃しない限り、奏は攻撃することはないのだ。しかし、目の前にいる少女はどうだろう。攻撃をする意思を持たなかったにも関わらず、自分達に問答無用で斬りかかろうとしたではないか。

「くぅっ！」

ゆりと少女の接近戦では、明らかに少女が押していた。何せ奏と戦っている時とは違い、少女には明確な殺意がある。その分でも、力加減なんかしてくれないからだ。

「きゃあああああああああああああああああああああああああああ！！」

服が切り裂かれ、身体のいろんな部分から血が滲みでる。『Ｈａｎ

ｄ　Ｓｏｎｉｃ』によって切り裂かれるゆりの身体は、もうそろそろ限界に達しようとしていた。

「くそっ……ゆりっぺ！　どうすればいい！！」

野田がゆりに向かって叫ぶ。ゆりの指示を待っているのだ。しかし、今のゆりには誰かに指示を出すことなど出来そうになかった。しばらく少女とゆりの戦いをじっと見ていた音無が……。

「みんな！　背円に取り囲め！　集中砲撃だ！！」

「あん？　何故貴様が命令している！？」

音無が命令することが不満に思ったのか、野田がなにやら騒いでいた。しかし、そんな野田は無視して、音無は続ける。

「『Ｄｉｓｔｏｒｔｉｏｎ』で曲げられようが、いくらか当たる！！」

確かに、下手な鉄砲も数撃てば当たる。その諺通りに、周りから一斉射撃さえすれば、その内の何発かは当たることだろう。音無の判断は、正しい判断だった。当麻も参加をしようとしたが、幻想殺しは接近戦で、今銃弾の雨の中、あそこに入って戦うのはきついと思い、戦闘に参加しないガルデモメンバーや遊佐の守りにいった。

「離れろ！　ゆり！！」

「！！」

音無の声を聞いて、一瞬のすきをついたゆりが、少女より離れる。
その瞬間に、音無は全員に指示を出した。

「撃てぇ！！」

タンタンタンタンタンタンタン！！乾いた銃声が、何十発と聞こえてくる。少女に向かって四方八方から銃を撃つ。しかし、その弾は、『Ｄｉｓｔｏｒｔｉｏｎ』により弾かれて……すべて軌道をゆがめられてしまった。

「くそっ……！！」

少女が、音無目掛けて斬りかかろうとしてきた。もう駄目だ……音無は心の中でそう呟いていた。
その時だった。

「……え？」

群衆の間を縫って前に出てきたのは、右腕に『Ｈａｎｄ　Ｓｏｎｉｃ』を出現させた奏だった。奏は少女に向かってその刃を向けると、相手の心臓目掛けて刃を刺す。しかし、相手の刃も……奏の心臓に突き刺さった。

「か、奏ぇえええええええええええええええええええええええ！！」

音無は、奏の姿を見て……そう叫んでいた。夜の学校の敷地内にて、音無の声は十分すぎる程に響いていた。雲で、満月が隠れた。

保健室にて。いつ少女が襲ってくるかも分からないので、ＴＫと椎名が門番を担当していた。保健室の中では、音無が終始落ち着きがなかった。

「奏は大丈夫なのか……かなり深い傷だろ？」

ベッドの上で眠っている奏を見て、音無が尋ねる。ゆりは、腕を組んだ状態で、答えた。

「私達と同じよ。致命傷でも時期治るわ」

しばらく静寂の時間が流れる。そして、その時間を打ち破ったのは、日向の一言だった。

「同じ奴が二人ってどういうことだよ……！！　そんなわけ分かんない世界になっちまったのか？」

「……理由はあるわ」

「……どういうことだ？」

ゆりの呟きに、当麻が尋ねる。するとゆりは、

「『天使』エリアでの侵入ミッション……覚えてる？　彼女のパソコンに、スキルを開発するソフトがあったでしょ」

「スキルを開発するソフト？　そんなのあるのか？……てか、スキルってなんだ？」

「……この場合は『天使』使用する武器や能力のことです。右腕から刃を出したりするのも、そのソフトウェアで作り出したものということでしょう」

当麻の疑問に答えたのは、遊佐だった。

「ああ……で、それがどうしたって言うんだ？」

音無が、ゆりに先の言葉を言うように要求する。その要求に答えるように、ゆりが言った。

「その中に、見たことのないような能力がいくつかあった。その一つ……『Ｈａｒｍｏｎｉｃｓ』って能力が発動してるのよ」

「ハーモニクス……？　どんな能力なんだ？」

当麻がゆりに尋ねる。すると、

「一体が二つに分かれる能力だったわ」

「要は分身……か？」

「その通りよ」

「つまりは、それも『天使』自身がソフトウェアで開発したスキルということですか……」

「しっかし、そっくりそのままってわけじゃなかったみたいだぜ？」

「コイツと違って好戦的だ……何故だ！？」

藤巻、日向と続く。音無は、大げさな動きを見せながら、まるで奏を庇うように言った。

「奏は自分を守る能力しか使わない……！！　刃にしたってそうだ！　跳弾させる為だ！」

その時。直井が呆れながら、こう言った。

「まったく、無能な集団だな……あ、もちろん音無さんは違いますよ？」

「基本アホな集団ですから」

自分のことは差し置いて。ユイが直井の言葉に答えた。

「僕が可能性を一つ教えてやろう。川釣りしに行った時のことを思い出せ」

そう直井が提言したところで、ゆりと当麻が何かに気がついた。

「なるほど……つまり強い攻撃意識を持っている時に分身したから、こういうことになったのか」

「そういうことだ」

「なるほど……その時の本体の命令に従い続けているということね」

当麻と直井の言葉を合わせて、ゆりが一つの結論を出す。そんな中でも、やはり音無は奏を庇うのだった。

「でも、奏が強い攻撃意識を持つことなんてない！」

「……どうでもいいけど、貴方、やけにあの娘を庇うのね」

流石にゆりが気付いたのか。音無にそう尋ねていた。まさかそのことを聞かれるとは思ってなかったらしく、音無は少し動揺しながら答えた。

「そりゃ……可哀想だろ？」

「……まぁいいけど」

興味をなくしたように、ゆりが呟いた。

「それよりも、今問題なのは『天使』を如何にして消すかよね……」

ゆりがもう一度、呟く

「意図的に出したのなら、意図的に消すことも可能ではないのか？」

壁に寄りかかっている松下が、そう提案してみる。しかし直井は首を横に振ってそれを否定する。

「いや、意図的に消せているのなら、『天使』はこんな目には遭っていないだろう」

「恐らく、無意識での出現ね……だから彼女には消せなかった。刺し違えてでもやるしかなかったのよ」

「おいおいちょっと待ってくれよ！　あんなのが消えないなんて…

…あんなのが居続ける世界になるのかよ！？」

ゆりの言葉を聞いて、藤巻が慌てるように言った。そんな藤巻を宥めつつ、ゆりは言う。

「今は見逃されてはいるけど、明日からはそうもいかない。模範的な行動から外れたら、すぐさま血生臭い戦闘に発展する」

「生徒会長でもないのに？」

大山の疑問はもっともな物であった。もう奏は生徒会長ではないので、こんなことをする必要はない。

「多分だけど、あの立華にそっくりの女の子は、立華の俺達を更生させようとした意思だけはあったんだろうな。だから分身にもそれが継承された。その上何故か好戦的ときた。」

「……最悪ね」

当麻の発言を聞いて、ゆりが呟いた。

「対抗しようにも時間が無さすぎるぜ……」

「……少し、時間を頂戴」

「どうやって、その時間を作る？」

ゆりの言葉を聞いて、音無が尋ねた。すると、ゆりはこう提案した。

「授業に出て、そして受けるふりをして。先生の話には決して耳を

傾けないで。授業をまともに受けたら消える……分身にバレないように、とにかく別の作業に没頭すること。そして一日持ちこたえて。誰一人消えずに、再び会えることを祈るわ」

そして、その場は解散することとなった。あることを忘れながら……

## 第２１話　堕ちる天使　その２

それぞれが少女の気を引くために授業に出ている中、音無はあることに気が付き、当麻に小声で話しかけた。

「なぁ、お前の幻想殺しで何とかなるんじゃ……」

音無の言葉を聞いた瞬間、教室にいた全員が立ち上がり当麻と音無に詰め寄った。

「そうだよ。上条の奴は天使の攻撃を何度か打ち破ってる。それだったら」

「可能性がある。ゆりっぺのところにいくぞ」

日向と藤巻が当麻と音無のえりを掴みながら、教室を出て行く。他のメンバーもあとを追った。

ゆりに当麻の幻想殺しを聞き、保健室に戻ると、保健室は酷い有様でベッドに寝ていた奏が居なくなっていた。

「この乱れようは拐われたとしか思えない……貴様、何をした？」

ゆりの方を指差しながら、直井がそう尋ねる。

「貴様って……プログラムを書き換えたのよ。もう一度あの娘が『Ｈａｒｍｏｎｉｃｓ』を使えば、追加した能力が発動して本体に戻るはずだったのよ」

質問に対してゆりがそう答える
「でも敵の動きが予想以上に早かった。あの娘を隠されては打つ手がないわ」
「どうするんだ？」
松下が尋ねると、ゆりはこう答えた。
「探すしかないじゃない」
「凶悪な『天使』の目を逃れつつ……ですか」
「授業を受けるふりだけでやっとだったってのによ……」
藤巻はボソッと呟いていた。その呟きは彼にのみ当てはまるものというわけではなかった。
「陽動がどれだけもつか……」
「陽動って……私ですか！？」
日向の呟きに対して大げさに驚くのは、ユイだった。ユイは、流石に自分が話題に出されるとは思っていなかったようで、かなり驚いていた。
「お前何の為にガルデモ入ったんだよ！」
「それは……岩沢さんに憧れて」

「ガルデモは陽動の為にあんだよ！」

「いやいや、あんな怖いの相手に陽動なんて出来ないですって！そもそもお前人に命令ばかりして、何様のつもりだ！」

ユイが慌てた様子でそう叫ぶ。日向も、負けじと叫んだ。

「ここじゃお前の先輩だ！　てか逆ギレか！！」

「先輩かぁ！　すみませんでしたぁ！」

その後で、ユイはゆりの方を見て、敬礼しながら言った。

「あの……ライブ中漏らすかもしれませんが、頑張ります！」

「決意はありがたいけど、今はまだいいわ……まずは私達が今出来ることをしましょ。総員に通達。『天使』の目撃情報を至急集めてきて！」

「迅速に集められた情報から、幽閉場所はギルドの可能性が高いと分かったわ。となればその最深部ね」

体育館に集められた戦線メンバーはゆりの話を聞いていた。しかし、今回のオペレーションが過激すぎるという点もあり、ガルデモメンバーは残った。

「あの爆破した場所にか？」

「そう。トラップも稼動したまま、もっとも危険でもっともここから離れた場所ってことね」

音無の疑問に、ゆりが答える。

「まぁたここに潜れってかよ……」

「前回はほぼ壊滅状態だぜ……」

事情を知っている日向・藤巻は、そんなことをぼやいていた。

「ふん……何を臆しているんだ？」

そんな二人を見て野田がそう言った。……しかし、彼は前回のギルド潜入作戦で真っ先に死んだ人間だ。そのことを藤巻に指摘されて、もはや何も言えなくなってしまっていた。当麻は未だに怖いイメージしかなかった。

「皆さんの為に漏らしながらでも歌い続けます……根性見せます！！」

泣きながら、敬礼しながらそんなことを言うのは、ユイだった。そんなユイを見て、ゆりが言った。

「あんなのにかかっちゃ陽動も瞬殺よ。今回は陽動なし。正々堂々と行くわよ」

「『天使』と戦いながら、か……」

全員が不安を残しながら、今回のオペレーションが、始まった。

「前のトラップはそのまま放置されてんな……ラッキー☆」

ギルド連絡通路地下４階。日向の呟き通り、前回の潜入作戦にてメンバーが引っかかったトラップのすべてが、すでに放置されたままとなっていた。つまり、鉄球やハンマー、床崩れや天井が落ちてくるトラップなどはもう稼働しないということだ。一同にとっては、それは安心出来ることだった。

「ギルドって……一体何なんだよ。」

その場にいなかった当麻は何故かホッとしていた。

「あの……こんなところで『天使』に出くわしたら、どの道漏れそうなんですけど……」

不安そうにつぶやくユイ。そんなユイを見て、日向がどうでもいいという顔を見せながら、一言。

「構わん」

「構ってくださいよ！！」

「もしものときは日向が処理してくれるってよ」

「「お前はアホか！！」」

当麻の何気ない一言に怒る二人。

「……おい、あそこにいるのって」

「……ええ、そうね」

当麻が、少し遠目の位置にいる何者かを見つけて、ゆりに尋ねる。どうやらゆりも同じ意見のようで。

そこにいたのは……白くて長い髪を揺らし、赤い瞳で彼らを鋭く見つめる……天使だった。

「ひぃいいい

る。その際に……銃器はすべて使い物にならなくなっていた。

「は、速い！？」

「まだハンドガンが残ってる！！」

そう言いながら、ゆりは手榴弾の安全ピンを引き抜いて、少女めがけて投げつける。

「Ｇｉｒｄ　Ｓｋｉｌｌ　Ｄｉｓｔｏｒｔｉｏｎ」

呟きの方が速かったか。それとも手榴弾の爆発の方が速かったか。どちらにしろ、手榴弾の爆発によって、辺り一面に土煙が立ちこもる。そのおかげで双方共に視界は良好ではなくなった。だが、ゆりはそれをチャンスだと思った。

「各個射撃！！」

ハンドガンを取り出した戦線メンバーは、少女がいるだろう方向に向かって銃を撃つ。

「意外と速くけりがつきそうね……」

今の状況を見てゆりがそう呟いた、その時だった。

「ぐぉあああああああああああああ！！」

「「「「！？」」」」

野田の悲鳴が聞こえる。その悲鳴の正体が気になって、彼らが後ろ

を振り向いたら……。

「な……に……！？」

そこには、『天使』によって心臓を突き刺された野田の姿があった。

『天使』は、その野田を壁に投げつけると、戦線メンバーを睨みつけた。

「こ、これってどういうこと！？」

「オリジナルか？」

「違う……コイツも分身だ！！」

大山と日向の疑問に対して、音無がそう答える。

「敵がもう一体いるってことですか……」

冷静に状況を解説する高松。そして、血まみれになっている野田を見て、藤巻が一言。

「どうでもいいが、また真っ先にやられたな、アイツ……」

「各個射撃！！」

ゆりは即座に命令した。だが、そうなってくると……後ろにいる敵が完全にノーマークとなっていた。

「後ろにいる敵はどうするんだよ！！」

「いいから！　まずは目の前の敵よ……！！」
銃を撃ちながら、ゆりがそう答える。しかし、背後からこんな声が聞こえてきた。
「忙しそうね……」
「！？」
そこには、すでに立ちあがった……もう一人の少女がいた。
「ゆりっぺ！　もう残弾が！！」
（勝ち目なんてない……！？）
半ばあきらめかけていたゆりだが、辺りを見回していく内に……目の前の少女を通り過ぎたところに、扉らしきものがあるのを発見した。そしてゆりは、思いついた。
「入口を塞ぐわ。ついてきなさい！　行くわよ！！」
手榴弾を目の前の堕天使に目掛けて投げつける。当然少女はその軌道をゆがめるが、爆風によって土煙がたち、何も見えなくなる。その隙に……彼らはその扉を開いて、中へと入って行く。
「あと１０秒！　間に合わなかった者は残していく！！」
１０，９，８……。ゆりによってカウントされる、１０秒間。その間に何とか逃げ切れるように、メンバーは全力で走る。彼らを一掃しようと、もう一人の少女も全力で近づいてくる。そんな少女に向

かって、ゆりは銃を撃ち続ける。

「7，6，5，4……」

残っているのはゆり一人。ある程度威嚇射撃をしたのち、ゆりも扉に向かって走り出す。その先には、手を伸ばしながらゆりを待つ音無の姿が。

「3，2，1……0！！」

そしてカウント終了と共に、ゆりは扉を通って中に入ることに成功したのだった。

「野田君以外、全員大丈夫？」

ゆりが状況の確認をすると音無があることに気がついた。

「上条は？」

音無の発言に全員が当麻の所在を確認したが、この場にはいなかった。すると、ゆりがあることに気がついた

「まさか、上条君。あなた、天使二人相手を……」

扉越しから話しかけるゆり。当麻は……

『あぁ、ここは俺が食い止める。だから、みんなは早く立華の所に』

「それじゃあ、あなたは……」

『大丈夫だ。きっと合流するから……』

当麻の声はそれから聞こえなくなった。あとは扉越しから激しい戦いの音が聞こえ続けた。

「くっ、皆いくわよ」

当麻は二人の天使と対面していた。

「全く、そっくりなやつが増やしやがって、どこの御坂妹だよ」

当麻は自分が生きていた世界の中にいた少女の事を思い出していた。

「……あなたは何を言ってるの？」

「仲間に見捨てられて、狂ったかしら？」

「はぁ、違えよ。あいつらは俺のことを信じてるからこそ、先に行ったんだ。俺がすることは、お前らを倒して、ゆりたちに追いつくことだ。」

「……出来るの？」

「更生させてあげる。」

「いいぜ、来いよ。立華が生み出したその幻想をぶっ殺してやる。」

二人の少女と幻想殺しの上条当麻がぶつかり合う。

## 第２２話　堕ちる天使　その３（前書き）

お待たせしました。堕ちる天使の続きです。

## 第２２話　堕ちる天使　その３

ギルド連絡通路地下５階。

そこにて一同は、つかの間の休息がてら、今の状況を話していた。

「あんな狂暴な『天使』が二体……前の降下作戦より性質が悪いぜ……」

床に座り込んで、日向がそうぼやいた。

「そうね。でも何で天使が二体も……」

その言葉に対して、ゆりは呟いた。。そんな中、前に出てきて彼らを批判するのは、

「まったく低能な奴らだな……あ、もちろん音無さん以外ですが」

そう。直井だった。

「何かしら？直井くん」

「僕が問題点をまとめてやろう」

「よろしく」

ゆりのことを指さした後に、そんなことを言った。ゆりは呆れながらも、直井に説明を求めた。

「問題は二つある。まず一つは、何体分身が作られたのか」

「今現在だけでも、合計五体は確認できているわけだ……」

「分身が分身を作っているってことは……」

「数に限界はないってことだ」

音無が呟くと、それに続く形で直井が言った。

「じゃあそれってつまり……１０体や２０体……それ以上いる可能性もあるってことか？」

日向がそう呟く。

「えぇ、それじゃあ、今上条君が戦ってる天使もだんだんと増えてくるって言うの？」

大山が怯えながら言った。確かに今当麻は二人の天使を相手にしているが、戦っている最中にもっと増殖する可能性があるかもしれない。

その時、音無が何かを思いつく。

「待てよ……？　でも、ゆりが能力を追加している。分身は本体に戻るようになったんだろ？　消えるのを待っていればいいんじゃないのか？」

確かに音無の言う通りだった。ゆりが『天使』に能力を付け足して、『Ｈａｒｍｏｎｉｃｓ』を発動したら、本体に戻るように設定した

のだ。だからもし分身がそれを発動した所で、結局は元に戻ってしまう。
そう考えていた音無だったが、
「いや、それこそが二つ目の問題……何でしょ？　直井くん」
「ふっ……その通りだ。少しは貴様も役に立つんだな」
「そりゃありがたい褒め言葉で」
「……もしその能力を追加するよりも前に、分身を大量生産をしていたとしたら……」
「……ちょっ、ソイツは……！！」
直井の言葉を聞いて、ようやっと分かった一同。
「ふっ。ようやく気付いたか愚民共……あ、音無さんは気高い貴族でありますが……」
どんな時でも、直井は音無に対するフォローを忘れない。
「いいか。僕達がここに乗り込んでくることが分かっていて、既に分身を量産し、ギルドに配置させていたとしたら」
「そりゃ……」
日向がその先の言葉を言おうとしたところで、
「Ｔｒａｐ」

「そう……罠だ」

ＴＫの言葉に、直井が反応した。

「そしてこの先も、うようよいるだろう……」

直井の言葉を総合して、松下が出した結論は。

「閉じ込められたということか……」

逃げることも出来なければ、前に進むのも困難。こんな状況で、果たして今回のオペレーションを完遂することは出来るのだろうか。

「武器の補充も出来やしないんだぞ……殺られるのを待つだけじゃねえか……！！」

悪態をつくのは、藤巻だった。

「こんなことまでして何が目的なんだ……！！」

「最終的には完全なる服従でしょ。それが彼女の使命だもの」

日向の言葉に答えた後、ゆりはすっと立ち上がった。

「大人しく消えろってことかよ！？」

「こんな時に、上条がいてくれれば……」

音無の言葉は誰もが思っていたことだった。当麻の右手は異能の力

を打ち消すことができる。なら、この作戦もどうにかできるかもしれない。だが、今は当麻は一人で二人の天使と戦っている。

「……行くわよ」

ゆりは全員に向かってそう指示を出して、そしてそれが、一時の休憩時間の終わりを意味していた。

その頃、当麻は……

「まず、一人。」

「ん、きゃあ」

二人の天使と戦い、ようやく一人目を右手で殴り消し去った。

「あと一人。早く皆と合流しないと……」

もう一人の天使を見ると、天使は少しばかり笑っていた

「合流？残念ね。今頃あなたの仲間はやられてるかもしれないわ」

「言い切るなよ。偽者野郎。お前を倒して皆と合流する」

「それじゃあ、私は、あなたを更生させて、あの人達を追うわ」

ギルド連絡通路地下１０階。彼らの目の前には……またしても天使が立っていた。

「また現れたよ……」

「これで『天使』の数は三体目だね」

日向と大山の呟きの後で、ゆりが銃を堕天使に向ける。だが、そんなゆりの構えていた銃を、手で降ろさせた人物がいた。

「……え？」

「弾が、勿体無かろう……」

横から現れたのは、松下だった。松下はゆりが銃を構えているのを見て、前に出てきたのだ。

「お……おい！」

「何する気だ？」

その行動の意味が理解出来なかった日向と音無の二人が、松下に向かってそう言っていた。だが。その時だった。

「うぉおおおおおおおおおおおおおおお！！」

「！！」

天使目掛けて……松下が勢いよく走りこんだ。当然、天使は迎撃する為に腕から刃を出現させる。だが、それよりも早く、松下が柔道の抑え込みの要領で、堕天使を地に伏せていた。背中から堕天使の刃が。そこから血をダラダラと流すも……松下の意識は未だに保たれていた。

「「「「松下五段！！」」」」

一同は叫ぶ。そんな彼らに向かって、松下は言った。

「行け！　俺の意識がある内にいけぇえええええええ！！！！」

「何だよその死に際だけ格好いい奴みたいなセリフは！！」

日向が松下に向かってそう叫ぶ。

「急いで！　今の内に行くわよ！」

「あ……ああ！！」

ゆりの指示の元。一同は天使を組み伏している松下の横を通り過ぎる。

「耐えろよ松下五段！！」

藤巻が通り過ぎる際に、松下に向かってそう言葉をかけた。一同が去っていった後で、松下は薄れいく意識の中、こう呟いた。

「後は任せたぞ……みん、な……」

そして松下の意識は、ここで途切れた。松下を中心として、その場には血だまりが出来上がっていた。

松下が犠牲となった後、一同はどうにか危機を脱した。

「松下君の犠牲は無駄にしない……」

歩きながら、ゆりが呟いた。その後で、一同に向かって言った。

「彼のおかげで分かったんだけど、先に進むにはあれが一番いい方法なのよ。『天使』は身体が小さいからあれが一番。いくら『天使』が馬鹿力でも、柔道の抑え込みなら通用するということよ」

「つまり、一体につき一人の犠牲で済む……ということですね？」

メガネをずらしながら、高松が言った。

「犠牲で済むって……！」

音無は何か言いたそうだったが、そこにゆりの言葉が被さった為に、

無言になるしかなかったのだった。

「そして私達がオリジナルを助け出せれば、彼らも助け出せる……急ぎましょ」

その言葉の通り、彼らは前に進むしかなかったのだった。

「四人目」

目の前にいる天使を見て、音無がそう呟いた。その時だった。

「Ｉｔ'ｓ　ｍｙ　ｔｕｒｎ」

「へ？」

手をポキポキと鳴らしながら、音無の横からＴＫが出てきて。

「Ｇｅｔ　ｃｈａｎｃｅ　ａｎｄ　ｌｏｏｋ！」

そう言いながら、ＴＫは勢いよく天使に向かって走って行き。

「ＦｏｏｏｏｏＨａＨＨａａａａａｈ！！」

そして、目の前で……飛んだ。最終的には、天使を抑え込んで、心臓をグサリ。

「「「「「ＴＫぇえええええええ！！」」」」」

「おいおいなんだよこの少年漫画の最終回みたいな展開は！？」
ＴＫの名前を叫ぶ一同に、この状況に対してツッコミを入れる日向。
「いいから、どんどん行くわよ！」
ゆりの指示の元、一同はどんどん先へ行くこととなったのだった。

「この肉体……魅せる時が来たようですね」
グサッ。
「「「「高松ぅうううううううううう！！」」」」
「へ……へへ……！　ビビってられるかってんだ……だりゃあああああああああ！！」
ザシュ！
「グハッ！」
「「「「藤巻ぃいいいいいいいいいいいい！！」」」」

「浅はかなり……浅はかなりぃいいいいいいいい！！」

ザクッ！

「「「「椎名ぁあああああああ！！」」」」

「さぁ気付くんだ。お前はピエロだ。ほぉら、あんなところに……寂しげな目をしている女の子がいるよ……」

直井の瞳が赤くなる。催眠術を大山にかけているのだ。そしてその瞳を直視した大山は。

「ああ！　いっけな～い本当だ！　僕が笑わせてあげ……！！」

ザクッ。そのまま、天使に刺されてしまった。

「大山ぁあああああああ！！」

日向の叫び声だけが、響き渡る。

「お前最低な……」

「い、いや違うんですよ！　聞いて下さい、言葉のあやです。次は僕が行きますから……」

自分のことを指差しながら、直井はそう言った。

サクッ。
そして宣言通り、直井が堕天使に突っ込んでいき、心臓をグサリ。

「「……」」

「……おい誰か何か言ってやれよ」

無言の時間が流れた故に、日向からそんな一言が洩れる。ユイは、首を振りながら、

「いや、私名前知らないですし……」

「行きましょ」

このまま止まっていても仕方ないと考えたゆりは、残ったメンバーにそう言うと、先頭を歩き、先へと向かった。

「これで何体目よ……」

「分かんねぇ……もう数えてねぇよ」

大分進んだところで。またしても天使が現れてくる。もう何体目なのか数える気力すらなかった。

「今度こそ俺が行く」

「待て……俺の番だ。お前達は最後まで残れ」

音無が進んで犠牲になろうとしたら、日向が音無を押し退けて、ゆっくりと前に出た。自らが犠牲になるつもりなのだろう。

「どうして？」

音無が理由を尋ねると、日向はこう言った。

「あの子はお前達を必要としている……とりわけ音無をな。そんな気がするんだ。だからお前達は進むんだ。いいな？」

そうはっきりと、音無に言う。

「後もし……」

「行くんならとっとと行けやぁああ！」

ゲシッ！何かを言おうとした日向の背中を思い切り強く蹴ったのは……ユイだった。蹴られた日向は、そのままの勢いで天使のところまで走っていき、グサリと、心臓を刺されて犠牲に……。

「待ってて……先輩！」

周りがキラキラと輝いているのではないかと思わせる程の表情でそう日向に言うユイ。そんなユイに対して、音無が一言。

「お前……日向のことが好きなのか？　嫌いなのか？」

## 第２２話　堕ちる天使　その３（後書き）

次で終わります。

## 第２３話　堕ちる天使　その４（前書き）

今回で堕ちる天使は終わりです。

## 第２３話　堕ちる天使　その４

そして三人は、ギルド最深部爆心地に到着した。

「とうとうここまで来たわね……」

「ああ、そうだな」

ゆりの呟きに対して、音無が小さな声で返事を返す。下を見れば、結構深い。

「ここから一気に最下層まで降りることになるわ。音無君・ユイの２人はオリジナルを探して。見つけ次第、『Ｈａｒｍｏｎｉｃｓ』の発動を促すこと」

「……俺が戦った方がいい」

決意を秘めた表情で、音無がゆりに言うが。

「あなたはオリジナルを救出することに専念したほうがいいわ。彼女はあなたのことを待っているに決まってるんだから」

「……ゆり。そういえば上条は大丈夫なのか？」

音無の質問にゆりは微笑みながら答えた。

「大丈夫よ。彼ならきっとね。私は信じてるから……」

「……そうだな」

「あの～急いだほうがいいんじゃないんです？」

（（ユイに注意された））

三人は一気に下へと降りて行った。その途中で……。

「ふぎゃっ！」

という短い悲鳴と共に、ガン！　という衝突音が聞こえてたが、音無達はその音を気にしている余裕がなかった。

「あれ、ユイは？」

下に降りきった後で、ようやっと二人はユイがいないことに気付いた。しかし、理由を知る者は誰一人としていなかった。

「なんか、短い悲鳴だけ聞こえたけど……」

「『天使』の餌食になったのかもしれないな……」

「可哀想に……でもすぐに助けに行くわ」

二人はそのままユイの行方を調べることなく、そのまま先へと進んで行った。

どこかの通路で、当麻は必死に走っていた。

「くそ、みんなが行った扉鍵閉まってるから違うところを探さないと……でも、どこを探せば……」

当麻は皆と合流するために他の入り口を探していたのだった。そして、当麻がいる場所からずっと後ろには、消えかかっている天使がいた。

「くっ、うっ、あの幻想殺しなら私を一気に消せるはずなのに……何でこう苦しみながら消えなきゃいけないのよ……くぅぅぅぅ、」

その時、消えかかっている天使の前に銀髪の男が現れた。一瞬ＳＳのメンバーかと思ったが違った。指定された制服を着ていなく、何故か緑色のローブを身にまとっていた。

「あ、あなたは……」

「上条当麻が『世界』から消えたと思ったら、まさかこの世界に来ているとはな。こちら側では死んでしまったということか……」

この男が何を言っているか分からなかった。こちら側？この男は一体……そう天使は思っていると……男はあるディスクを取り出すと今にも消えそうになっていた天使の体が復元した。

「これは……」

「まさか、一万分の一の確率でただの分身ではなく、ちゃんと肉体を持った者が生まれるとはな……私が作った『ＡｎｇｅｌＰＬＡＹＥＲ』のバグか……まぁいい。このディスクをやる。」

そう言って、男は去っていた。天使は男から受け取ったディスクを見るとそこには……

『ＥＶＩＬＰＬＡＹＥＲ』

「まさか、あの男は……」

「そろそろ最後かしら？」

「そう願いたいが……」

そう呟いたところで、物陰からゆっくりと、最後の一人と思われる堕天使が現れた。その姿をジッと見ていた音無に、ゆりが一言。

「ほらっ、アンタはボサッとしないでオリジナルを探す！」

「あ……ああ！」

ゆりに言われて、音無は動く。ゆり達から離れて、奏捜索へと向かった。

「……」

それを眺めた後で、ゆりは威嚇射撃をする。その弾は、天使によって弾かれた。

「やっぱり……」

呟いた後で、ゆりは思い切り強く地面を蹴った。走りながら、弾を撃っていく。だが、それらは天使の腕から出現している『Ｈａｎｄ　Ｓｏｎｉｃ』によって弾かれる。そんなことは、ゆりにとっては想定内のことだった。近付いてきたところで、天使は刃をゆりの心臓目掛けて突き刺しにかかる。ゆりはそれを身体を捻ってかわすと、天使の腕を掴んで、思い切り壁に投げつけた。ドン！　という衝撃音と共に、土煙が舞う。その中に、ゆりは更に銃弾を二発放った。弾が切れた銃を投げ捨てて、ポケットの中から手榴弾を取りだし、安全ピンを引き抜いた後に……天使に向かって投げた。ドォン！と爆発音を奏でて、辺りは更に土煙が強くなる。やがてそれが晴れてきたところで、天使はその場に立っていた。

「ちっ……しぶとい！」

「……」

そう呟いたゆりだったが、天使が両腕を高く上げて、刃を重ね合わせたのを見て、

「！　耳を塞いで！！」

「！？」

慌てて音無は耳を塞ぐ。そして、

「Ｇｉｒｄ　Ｓｋｉｌｌ　Ｈｏｗｌｉｎｇ」

呟いた瞬間。辺り一面に、あり得ない程の騒音が鳴り響いた。岩を剥がし、ピリピリと地面が揺れる程、それは勢いが凄まじかった。

「耳が……！！」

手で耳を塞いでいても、完璧には塞ぎきれていない様子だった。だが、そんな中で……ゆりが不敵な笑みを浮かべながら、天使に近付いた。

「……！？」

グサッ！ゆりのナイフが、天使の腹部に突き刺さった。驚きの表情を浮かべているのは、天使だった。

そのまま、天使の上に乗っかるように倒れこんだ。

「気絶……しない！？」

しかし、その声はゆりには届いていなかった。何故なら……。

「え？　なんて？　耳栓してるからよく聞こえないのよ」

そう。前に『天使』エリア……もとい奏の部屋に潜入した際に、既にその存在を知っていたのだ。だからその対策として、耳栓を用意していたのだ。

「くっ……うぐっ……！！」

苦しんでいる様子の天使。そんな堕天使に、ゆりが悪魔のような笑顔を見せていた。

「ほぉら観念なさい。なんなら、もう一本のナイフで喉を掻っ切ってあげるわよ？」

そんな言葉を告げるゆりの表情は、素晴らしい程輝いていたという。

「いた……奏ぇえええええええええええええええええええええ！！」

叫びながら、音無が降りて行く。

「奏……奏！」

音無は、優しく奏の身体をゆする。奏は、眠そうに瞼を開けながら、意識を取り戻した。

「よかった……無事だったんだな」

「……うん」

奏は少し弱い声で、肯定の言葉を述べた。

「戦線のみんながな、命を張ってお前を助けに来てくれたんだ」

「……そう」

音無の言葉に、奏は小さく呟いた。

「奏……無理を承知で頼むのだが、一つだけ使って欲しい能力がある……『Ｈａｒｍｏｎｉｃｓ』だ。そうすれば、皆助かる。」

申し訳ない表情を浮かべて、音無が頼むと奏は

「……そう。分かった」

「使っても、身体はもつか？」

心配そうな表情を浮かべて、音無が尋ねる。奏は、小さく頷いた後で、

「一回くらいなら……Ｇｉｒｄ　Ｓｋｉｌｌ　Ｈａｒｍｏｎｉｃｓ」

そして、短くそう呟いた。すると、奏の身体から、真上に分身が現れてきた。それを確認すると、音無は、とりあえずポケットの中から拳銃を取り出す。赤眼をした天使は、音無に向かってこう言った。

「プログラムの書き換えをしたようね」

タイムウェイトは１０秒。ゆりが書き換えたプログラムにより、１０秒後には分身がすべて奏に戻る。

「あぁ、全てこいつの中に戻る」

「あれだけの数の冷酷な私たちが……」

「どういうことだ？」

「分身にだって、意識はあるわ。それが消えてしまうわけじゃない。同化するの。貴方達を襲ったたくさんの私たちが、この子の中に戻る。」

「はっ、」

「それだけの意識を吸い込んでただで済むと思う？」

「……！！　待ってくれ！！」

そしてようやっとことの重大さに気付いた音無は、天使に向かってそう叫ぶ。しかし、無情にもタイムウェイトである１０秒は過ぎてしまった。

「時間ね……」

よって、ゆりが書き換えたプログラム通り……すべての分身が、奏の中に戻る。冷酷な性格を持った、堕天使がすべて……奏の中に戻る。

「！！」

辺り一面から、それぞれに配置されていた堕天使のデータが流れ込んでくる。そしてそれは……奏の身体の中に、一気に吸収されていった。

「はぁっ！　うぐっ……あがぁっ！！」

それはまるで、身体の中に一気に毒素を入れられるのと同じと考えてもらっていいだろう。本体をウイルスが浸食していく……そちらの例の方が分かりやすいだろうか。

「くそっ……！！」

音無はそう悪態をついた後で、奏の身体をしっかりと抱きしめる。そして、こう願うのだった。

「無事でいてくれ……奏！！」

だが、その時だった。二人のもとに駆け寄る足音が聞こえた。音無は最初、ゆりかと思ったが……違った。それは……

「違うぜ。音無。願っても立華はボロボロになっちまう。だから……まずは立華を苦しめているその幻想をぶち殺す。」

奏の頭に触れたのは当麻だった。よくみるとあちこち傷だらけだったが、当麻は痛みに耐えながらも奏に入るこむ毒素を消し続けていた。

また別の場所では、生き残った天使が一人現状を把握していた。

「元の体に戻ったのね。だけど……私は……」

天使は男から受け取ったディスクをパソコンの中に入れ、全てをインストールしたのだった。

## 第２３話　堕ちる天使　その４（後書き）

謎の男の正体は、あの逆さまの人です。さらに、オリジナル展開で分身天使が生き残って、当麻に再戦するという話を後半でやります。

## 第２４話　そこにある現実

「この子……一度にたくさんの意識と同化しちゃったんだってね」

「……ああ、上条のおかげで半分ぐらいは消せたらしいけど、残りの半分はすでにどうかしちまったらしい。」

保健室にて。ベッドの上で眠っている奏の周りには、音無とゆりの二人だけしかいなかった。

時刻は夜中。保健室は電気がついていなくて、暗かった。

「……私のせいね」

「いや、ゆりはリーダーとして最高の仕事をしたよ。戦線の最大の危機を回避した」

落ち込むゆりを慰めるように、音無は言う。音無は更にこう付け加えた。

「それに、誰も想像出来なかったさ。ギルドに大量の分身を配置して、待ち構えているなんてさ」

確かにその通りだった。ギルドに大量に配置された、堕天使。一体誰があんなことになるなどと想像出来ただろうか。

「それに、あれは奏の……」

言いかけて、音無は言葉を間違えたと思った。だから音無は、途中で言葉を変えた。

「……冷酷な奏の考えた作戦で、それはやっぱり、奏だから……仕方がなかったことだと思う」

「そう……そう言ってくれると助かるけど……」

音無の言葉を聞いて、ゆりは少し救われたような感覚を感じた。そしてゆりは、そのまま保健室を後にした。

「……」

しばらく、音無は口を開かなかった。だが、少し時間が経過した後で、独り言ともとれるような言葉を、奏に向けて呟いた。

「なぁ……病院なんてない。誰も病まないからって言ってたじゃないか……じゃあなんで……起きてくれないんだ……畜生！」

悔しさだけが、音無の心の中に沸き上がってくる。しかし、だからと言って、彼自身が奏に対してしてあげられることなど、何もなかったのだった。ただ一つ出来ることがあるとすれば……奏が起きることを……戻ってくることを信じて待つことのみ。

「今、この場所に病院なんて必要ねぇよ。必要なのは立華のことを信じるお前だ。」

「！？」

ガラッと扉を開けて中に入ってきたのは……当麻だった。どうやら見舞いに来ただけらしいが、音無の姿を見つけて、話しかけないわけにはいかなかったようだ。

「悪い。あの時来るのが遅くなって……俺がもっと早く来ていれば……」

「いや、上条のせいじゃない。上条は天使二人に頑張ったって思う。」

「……そうか。それじゃあ、俺は戻るけど、あんまり根詰めるなよ」

「……あぁ」

場所は移って、校長室。ゆりが保健室から戻ってきたところで、一同が深刻そうな表情をしていることには変わりがなかった。

「これまでにないことです」

そんな中、高松が話を切り出してきた。

「『天使』のあんな状態は初めてです……このまま目覚めないことも……場合によってはあり得るかもしれません」

「……それこそイレギュラーな事態よ」

高松の呟きに、ゆりがそう反論する。そしてゆりは、更に言葉を付け加えた。

「彼女は絶対に目覚めるわ。いつか目覚めて……寝すぎただけという結果に変わる」

「その時の彼女は……どの彼女なんだ？」

隅の方で壁に寄りかかっていた椎名が、そんな疑問を口にする。だが、一同にとってはそのことよりも。

「し……椎名が喋った！？」

「これは相当重要な問題ってことだよ！！」

滅多に喋らない人物が喋った時。人はそれを通常通りではないということを意識する。今回とて、例外ではなかった。

「まさにそう……それが問題よ」

大山の叫んだ言葉を肯定するように、ゆりが静かにそう言った。

「……で、どっちの『天使』なんだ？」

「それは最初の『天使』だよ……一緒に釣りをした」

「だが俺達を襲った意識は、すべて好戦的で冷酷だった」

藤巻の疑問に答えた大山の言葉を否定するように、野田が言う。それはまごうことなき事実であるだけに、そのことに関して否定は出来なかった。

「数でいけば１００対１くらいだぜ」
「今何故意識を失っているのか……」
藤巻の言葉を聞いた後で、日向がとある一つの推論を述べる。
「多分そのたくさんの意識が、アイツの小さな頭の中で……なんっかその……ぐちゃぐちゃになって酷いことになってるからじゃねえのか？」
「じゃあ目覚めるとしたら……１００の意識で目覚めることもあるの？」
そんな大山の疑問に、ゆりが答えた。
「割合で言えば、元の性格で目覚める可能性は約１％ってところね」
「……どうする？」
「手は打ってあるわ……竹山君を『天使』エリアに送りこんだ。マニュアル翻訳が出来る仲間と共にね」
日向の言葉に対して、ゆりはそう答えた。
「ＴＫと松下は？」
「保健室よ……二人の見張り」
二人とは、奏と音無のことを指すのだろう。日向は頭の中でそう考えていた。

「データをすべて消してログインパスワードを変え、すべての能力を封じるということか……」

ソファーの上で本を読んでいた直井が、そんなことを呟く。その後で、直井はゆりの方を見て、

「だがそれも、一時しのぎでしかない……分かってるのか？」

「分かってる……いつか突破されて、またデータを打ち込まれる」

「ならマシン毎破壊してしまえばいい！」

ハルバードを構えながら、野田が不敵な笑みを浮かべつつそう提案する。しかし、ゆりはそれを即座に否定する。

「マシンはコンピュータ室の備品としていくらでも代わりはあるの。ソフトも同様」

一通り話がついた後で、

「ありゃ？　今日の皆さんは頭が良さそうですよ？　何か悪いものでも食べましたか？」

ユイがそう問いかけたところで、一同は何も言葉を発しなくなった。そんな中で、ゆりは心の中で呟く。

「（後は天命を待つだけね……果たして、神は誰に味方するのか……）」

そしてゆりは、それ以上は何も考えずに、ただ経過を見守るだけにしたのだった。

当麻は一人屋上にいた。本当なら皆がいる校長室か音無と一緒に保健室でいることだって出来たはずだが……

「くぅ、ぐぅぅぅぅ」

当麻は必死に頭を抑えていた。原因が分からず、奏のあの姿を見てからずっと頭痛がひどかった。

「何で、立華の姿を見て……思い出しちまうんだよ。消えた記憶が……」

## 第２４話　そこにある現実　（後書き）

次からは音無の記憶です。当麻もあの子の記憶が戻る予定です。

# 第25話　In Your Memories　前編（前書き）

今回から音無の記憶と当麻の記憶が戻ります。

# 第25話　In Your Memories　前編

ＤＡＹ１

「！！」

目が覚めると……そこは電車の中だった。荷物置きとなっている柵が、何らかの衝撃でひしゃげているのが目に映った。そんな中、音無は時間が気になった為に、ズボンの左ポケットの中から携帯電話を取り出す。表示されていた時間は……『１月１５日　０１：２３』。彼が行く予定だったセンター試験の開始時刻を大幅に上回っていた。

「やべぇ……過ぎてんじゃん……センター試験」

携帯電話を閉じて、ポケットの中に入れなおす。それから音無はゆっくりと身体を起こして……そして、惨状を見た。

「……！！」

そこにいたのは、傷だらけの人達ばかりであった。ある者は頭から血を流し。ある者は小さくうめき声をあげ。ある者は……そのまま息絶えていた。

「っはぁ！」

「！？」

音無が目の前に映る事実を把握するのに時間をかけていたその時。

隣の車両へ移る際に通る扉の近くで、誰かが寄りかかるような音が聞こえてきた。そこを見ると、一人の青年がそこにいた。

「お、おい！」

音無はすぐさま駆けつけていた。しゃがみ込んで、

「だ、大丈夫か？」

「少し……ふらふらする……」

音無はその言葉を聞いた後で、青年の髪の毛を少しかき分ける。みると、そこには傷跡があり、そこから血が流れ出ていた。

「額から血が出てる……」

布を破り、それで簡易的な包帯を作ることにする。作りながら、音無は質問を重ねて行く。

「意識は？」

「大丈夫……」

「気分は？　吐き気とかあるか？」

「ああ……大丈夫だ」

確認を取りながら、作った包帯を青年の頭に巻いて行く。その手際の良さを見て、今度は青年の方から音無に尋ねた。

「何だ……アンタ医者か？」

「まさか……ただの学生だよ」

医学の道を目指しているとは言っても、まだ音無は高校三年生。学生であることには変わりなかった。

「……立てるか？」

「ああ」

音無は青年に自分の肩を貸すと、何とかその場から立ち上がる。そして、車内にいるのは安全ではないと考えた音無は、

「出よう」

「……ああ」

なんらかの衝撃でひしゃげている扉を蹴飛ばして、音無と青年は電車の中から脱出する。そして、電車の外から惨状を確かめてみて……改めてことの重大さを把握していた。前方の通路は瓦礫によって埋め尽くされていて、脱出不可能。

「ひでぇ……」

その惨状を見て、青年は呟いた。

「……そうだ、助けを！」

助けを呼ぼうとポケットの中から携帯電話を取り出すも……開けて

みたらそこは圏外。当たり前だ……何せここは地下なのだから。

「くそっ……！」

「駄目か……」

音無が悪態をついたことで、どうやら外部との連絡は不可能なんだと認識した青年。少し考えた後、音無はこう呟く。

「中に残ってる人達を助けよう」

「手伝おう……」

すると、青年も手伝うと言ってきた。音無は、青年の身体を心配して、

「大丈夫か？」

「まだ少し身体がふらつくが……」

そう言った後で、青年は右手を音無の前に差し出して、

「五十嵐だ」

「音無」

パシッと、互いの右手を絡めて、握手を交わした。時間にして、およそ数十秒。

その後で、青年———五十嵐が言った。

「……急ごう」

「……ああ」

そして二人は、もう一度車内に戻り、残された人達を外に避難させることにした。二人で手分けをして、動けそうな人達を見つけたらその人達にも手伝ってもらって。そうしている内に、避難作業は結構進んでいた。

「チッ、墓参りに行った帰りにこんな事になるなんてな」

「ごめんね、私のために付き合ってくれて……」

「気にすんじゃねぇよ。これは貸しを返すためだ。」

被害者の中に、白髪に介助用の杖を持った少年と、白い修道服を着たシスターもいた。音無は白髪の少年の怪我を処置しようとすると、手を叩かれた。

「なっ、お前」

「俺より、こっちのシスターをやってやれ。」

「え、でも、いいの？あなたのほうが怪我ひどいよ？」

「いいんだよ。てめぇはアイツの大切なやつだろ。お前にもしもの事があったらあいつに……」

「と、とりあえず、二人同時にやるからな。おとなしくしろ」

音無は二人の治療をした。後々二人から名前を教えてもらった。白髪の少年は一方通行、シスターはインデックスと変わった名前だった。

「それじゃあ俺……外に出れるか見てくるよ。必ず戻ってくるから。ライト借りるぞ！」

まだ出られる可能性のある後ろ側に向かって、音無は向かうことにする。

歩き去っていく音無の背中を見て、

「音無！」

「なんだ？」

「……絶対に助かろう！」

「……ああ！！」

五十嵐がそう叫んで。

その五十嵐の言葉に返事を返した後、音無は止めていた足をもう一度動かすのだった。

## 第25話　In Your Memories　前編（後書き）

まさかの一方さんとインデックスの登場です。少しずつオリジナル展開を入れていきます。

# 第26話　In Your Memories 中編

少し歩いたところに、行き止まりがあった。
そこには紛れもなく瓦礫があって、どうやらこれのせいで脱出は完璧に不可能ということらしい。
もはや、助けが来るのを待つしかなくなった。

「くそっ……！！」

音無が、この事態に対して悪態をついた。
その時だった。

「あ……が……！！」

突如として音無を襲う、謎の痛み。
それは腹部からであり、痛みの正体を知る為に音無が服を少しだけズラしてみると。

「……んだよ、これ！！」

白いはずのワイシャツが、その部分だけ赤く染まっていた。
瞬時に理解した……そこから出血しているということに。

「ゲホゴホ！！」

思わずその場に座り込み、音無は咳き込む。
持っていたライトは、その場に落としてしまった。

「く……そ……ハァハァ！！」

音無に出来ることは、今はその痛みに耐えて立ち上がり、五十嵐達のところへ戻り、この事実を報告することだけだった。

「……お、音無！」

「結弦！」

戻ってきた音無を見つけた五十嵐とインデックスの二人は、即座に音無に駆け付けた。そして、尋ねる。

「……出れそう？」

「……ちょっと難しい」

「そうか……」

その事実を知った二人は、思わず残念そうな表情を見せる。

（俺の能力でどうにかできそうだが……この状態で能力を使えば俺の命もヤバイだろうな）

一方通行は首筋に手をやりながら思った。音無は、しばらくの間思案顔を浮かべる。辺りを見回して、その後で、言った。

「みんな、聞いてくれ！」

「！？」

その声に反応する一同。中には希望を持った人が。中には絶望しきった人が。中には苛立ちを見せる人がいた。しかし、音無はそんな目線を気にせず、一同に向かって、言った。

「トンネルは、前も後ろも土砂で塞がっている。携帯も繋がらない。外との連絡も取れない。ここからは一心同体、一人だけ助かろうなんてことは考えないでほしい！　食糧と水を集めて、平等に集めよう！！」

音無の言ってることは正しい。それが、ここにいる全員が生き残る為の最善の方法だろう。しかし、音無がリーダーシップを取ることに関して苛立ちを見せる人物もいた。

「ちょっと待て！　いつからお前が仕切ることになったんだ！」

そんなことを言い出す青年がいた。その青年に対して、五十嵐は言葉を返す。

「じゃあ誰が仕切る！　怪我人の看病の指示を誰が取る！？　コイツには医療の知識がある。まさか怪我人は放置なんてことはないよな？」

「そ、それはねぇけどよ……」

そう言われてしまったら、これ以上反論を述べることは出来なかっ

た。それだけ、この状況が普通じゃないということだ。そして音無が、希望を持たせる為なのか、自分に言い聞かせる為なのか。全員に向かってこう言った。

「必ず助けがくる……それまでの辛抱だ。一緒に頑張ろう！！」

DAY2

「喉が乾いたら言って、！　食事は定時になったら伝えるから！！」

「気分が悪くなったら音無に言ってくれ！！」

少しでも音無にかかる負担をなくそうと、インデックスと五十嵐の二人が働く。そんな中で、音無も怪我人の介抱に回る。

「もう少しの辛抱ですよ……何かあったら、呼んでください」

「あ、ああ……」

電車の座席を一つくりぬいて、そこに寝かされる、恐らくは重傷だと思われる患者。音無はその患者に色々と処置を施すと、その人物に向かってそう言った。処置をしてもらった患者は、小さくお礼の言葉を呟くのだった。

「音無」

そんな音無に、五十嵐はコップに入った水を差し出す。音無は、五十嵐の所まで歩いて向かい、その水を受け取る。そして、しばらく周りを歩きだした。

「……食糧は？」

「手作り弁当とお菓子が少し。飲み物はペットボトルの水とお茶が……五、六本ってところかな」

「もって三日か……」

音無は、食糧の少なさを聞いて、思わずそう呟いていた。

「お前本当によく頑張ってくれるよな……けど自分の体力も温存しとけよな。真っ先に倒れるぞ」

「……ああ」

それは五十嵐の優しさだったのかもしれない。音無は、その忠告を素直に聞き入れることにした……そんな時だった。

「こらテメェ！！」

「「！？」」

突如聞こえてきた怒声。その正体を探るべく、音無と五十嵐がその方向を向くと……そこには、カバンの中に水を入れて、その場から逃げだす青年が一人いた。その後ろを、何人かが追っていて、捕まえた時に、その反動で水が少しこぼれてしまった。

「ああ、水が！！」

「みんな落ち着いて！！」

「やめろ！！」

五十嵐の叫び声が聞こえて、五十嵐が水を抱えた人物を蹴りかかろうとしている青年を取り押さえて、何とかその場はおさまった。音無は、ゆっくりと倒れこんでいる人物に近づいて行く。

「な……何だよリーダー様。俺を拘束でもしようってのかよ！？」

男は、どうやらこの状況に対して混乱しているようだった。だから、逃げられやしないと分かっていて、水を持ちだそうなどということをしたのだ。

「好きにしろよ！　どうせもう誰も助からねぇんだからな！！　なぁ！！　みんなも分かってんだろ！？」

「……助かるよ。きっと……ううん、絶対に」

そんな男に対して、インデックスが言う。だが、周りからは避難の声も聞こえてくる。

「綺麗事だ！！」

「今、その子が大切な水を！！」

「大丈夫だ」

そんな言葉を、音無は一言で解決した。その後で、こう付け足した。

「今のは……俺の分だ。もう俺は、今後一切飲まないから。だから

安心してくれ」

自分の身を犠牲にしてでも、音無は助けられる人を助けたいと思った。その心は立派だとは思うが、どうしてそこまで他人のことを想ってあげられるのだろうかと、五十嵐は心の中でひそかに呟いたという。

「だれかソイツを殴ってよ！　こっちの気が済まない！！」

「やめとけ、そんな奴を殴る体力があるんだったら、今はじっとこのままいるほうが助かる確率が増える。」

今までじっとしていた一方通行が全員に向かって言った。一方通行の言葉に全員が黙った。

「……一歩通行」

五十嵐は、音無の左肩に手を置いて、

「大丈夫だ。俺の分を二人で分けて行こう」

「済まない……」

「気にすんな」

ポンと肩を軽く叩いた後で、数人の男子に、

「よぉし、コイツらをどっかに移動させるぞ。おい、テメェらも手伝え！」

そう、指示を出したのだった。

「結弦。私の分も……」

「お前はしっかり食べてろ。おい、音無。俺の分も分けてやる」

「……一方通行。ありがとうな」

「ちっ、」

音無がお礼を言うと一方通行は舌打ちをし、元の場所に座り込み、目を閉じた。

「それにしても、お前らどういう関係なんだ？」

五十嵐はインデックスに質問をした。インデックスはきょとんとしていた

「どういうって？」

「いや、兄妹には見えないし、恋人同士とか？」

「違うよ。あの人はとうまがいなくなってから私のことを支えてくれた人だよ。」

インデックスは少し悲しそうな表情を浮かべた。

「とうま？」

「うん、私の恩人で、私を悲しませないために嘘をついて私を守ってくれたんだけど……」

音無と五十嵐はインデックスの話を聞いて、理解した。多分そのとうまと言う人物はすでに死んでしまって、今はあの一方通行と一緒にいるんだと……だから、あの時、墓参りと……

「そうか、なら、ここは早く助かって、そのとうまって奴の分まで生きような」

「うん」

音無はインデックスの頭を撫でながら言ったのだった。

DAY3

「音無！　音無！！」

「！？」

身体を休めていた音無は、五十嵐の焦るような声を聞いて起き上がる。痛む腹部を押さえつつ、何とか五十嵐がいるところまで歩いてきた。しかし、そこで目にしたのは……。

「！？　くそっ！」

昨日音無が応急処置を施した青年が、目を瞑っていて、息もしていない様子だった。そして音無は感じる……目の前にいる人物が、このままだと死んでしまうと。

「結弦！」

インデックスの叫び声が聞こえる。しかし、音無の耳には入らない。椅子に座らせているその人物に心臓マッサージを始めた。

「戻れよ……ハァハァ……戻れぇ！！」

叫びながら、息を切らしながら、音無は必死に心臓マッサージを続ける。もう目の前で人の命を失いたくない。必ず助けたい……！！強固の意志は感じられたが、その意志とは裏腹に、その人物の意識は戻らない。

「……」

ポンと、五十嵐が音無の肩を叩く。もうこれ以上は止めろという意思表示なのだろう。

「う……くっ……！！」

目の前で、またしても音無は人を死なせてしまった。その後悔の念だけが、彼の心を支配していた。

（俺はあの日から……何を頑張ってきたのだろう？　アイツ……初音に生きる意味を教えてもらって、それで、また人の命を目の前で

失って……何も変わっちゃいない。俺は無力のままじゃねえか……あの時から、何も変わっちゃいないじゃないか……くそっ！）

心の中で、音無は自分のことを責めていた。

DAY7

一同の目が、虚ろになる。立ち上がる気力すらなく、地面に横たわる者、壁に寄りかかる者。それらのような人達しか見ることが出来なかった。それまで何とか動くことの出来ていた人物達も、今では身体を起こすほどの気力すらなかった。食糧・水は底をつき、彼らはここ数日何も口にしていない。そんな状態が続いたのだ……体力が奪われて当然のことだろう。

「……」

そんな時、音無は少し前の話を思い出した。それは妹の初音がまだ生きていた時の話。どうして身体がよくならないんだろうかと音無が尋ねたら、初音は『ドナーがいればいいんだけどね』とだけ答えた。

そのことを思い出した音無は……。

「五十嵐……サインペン、あるか？」

「あ、ああ……」

力ない声で音無は五十嵐にそう尋ねる。言われた五十嵐は、制服の胸ポケットからサインペンを取り出し、音無に渡した。

「……」

保険証を取り出した音無は、それを裏にして……そして、見た。そこに書かれていたのは、臓器を提供する旨のこと……つまり、ドナーになるかならないかの意思表示だった。音無は、すべての臓器に丸をつけ、その後で自分の名前を、それに署名した。

「まったくよ……」

一連の動きを見ていた五十嵐が、音無に向けてそう呟く。その後で、自らも保険証を取り出して、

「……何しようと、してるんだ？」

弱弱しい声で、鈴が五十嵐に向かってそう尋ねる。五十嵐は、答えた。

「こうしておけば、自分の命がもし尽きても……それでも、その命が人の為に使われる。生きてきた意味が作れるんだ……」

別のサインペンを使って、五十嵐もそれに記入する。それを見ていたインデックスと一方通行は……内心では絶対に助かると思っていながらも、そんな彼の決意を見て、インデックスは神に祈り、一方通行は目を閉じた。すると、どうだろう。周りの人達も、保険証を取り出して、臓器提供の意思表示をしだしたではないか。

「なぁ……やっぱお前はすげぇよ」

起きているのか寝ているのか分からない音無に向かって、五十嵐は言う。

「音無、見ろよ……あれだけ絶望していた連中がみんな、誰かに希望を託そうとしている。お前が、みんなの人生を……救ったんだぜ」

しかし、答える声はなかった。代わりに、音無の手に握られていたサインペンが、カランと音を立てて地面に落ちる音が響く。

「なぁ音無……聞いてんのかよ……音無……！！」

しばらくして、全員が意識を失いかけているときに、一方通行がふらふらと歩き出した。

「ちっ、希望なんてものを他人に託そうとしやがって……音無。てめぇは救われねぇバカだな。だけどな……」

一方通行は首筋に手をやった。そして、一方通行の背中から白い羽が生えた。

「俺も救われねぇ馬鹿だ。わりぃな、インデックス。お前を最後まで見守れなくって……けど、今この場を救ってやるからな。」

一方通行はすべての力を使い、瓦礫の山を外まで吹き飛ばした。その直後、救助隊の人間が入ってきた。

「これで……いいんだろ。音無。俺も、天国、いや、地獄だろうな。あの世でアイツと会ったら殴ってやるからな。アイツも、インデックスを悲しませた罪で地獄だからな……」

一方通行はそのまま壁にもたれかかりながら死んでしまった。

# 第27話　In Your Memories　後編

「……」

いつの間にか夜は明けて、朝になっていた。音無は、頭を撫でられるような感覚を感じて、目を覚ました。最初に目に映ったのは……奏が音無の頭を撫でている所だった。

「奏ぇ！！」

それで音無は理解した。奏が、目を覚ましたということを。

「お前なぁ……心配したんだぞ！　大丈夫か？　身体は平気か！？」

身体を乗り上げて、音無は奏の身体を心配するような言葉をかける。奏は、それらをすべて聞いた後で、

「壮絶な戦いだった……」

「戦い？」

「貴方と約束した私が目覚めたのは、奇跡ってこと。とはいっても、上条君の力もあったけど……」

１００の意識と１の意識。１の意識が勝利したのは、まさに奇跡だったのかもしれない。それに当麻の力がなかった結果が違ったかもしれない。音無は、奏が最後にそう付け加えたことで、ようやっとその意味を理解することが出来たのだった。

「はぁ……」

音無は、安堵の溜め息を漏らした。そして音無は、奏に言う。

「なぁ、俺……全部思い出したよ……死んだ時のこと」

奏に言った所でどんな反応が返ってくるのかは分からないが。はたまた、はたして言う意味があるのだろうかと思いながらも。しかし音無は、このことを報告せずにはいられなかった。

「センター試験の会場に向かう途中、列車の事故に巻き込まれてさ。俺……医者になりたかったんだ。誰かの為になりたい。『ありがとう』って言ってもらえるように生きたいって。そう思って……結構必死に勉強したんだけどな……」

「……」

音無は、顔を下に向けながら、呟くかのように言う。その後で、顔を少し上げて、

「でもさ……俺は最後に、この身体をドナー登録で残せたんだ。俺の身体は……誰かを助けてあげられたはずだ。そう信じる……」

「……」

「？」

ピトッと、頬に手の感触を感じる。それで音無は、奏の方を見た。奏は、右手で音無の頬を撫でつつ、言った。

「きっとその『誰か』は、見知らぬ貴方に『ありがとう』って、一生想い続けるわね」

理由は不明だが、微笑んでいるのか、泣いているのか、嬉しいのか、悲しいのか。あるいはそれらの感情がすべて混ざり合っているのか。そんな表情を浮かべながら、音無に言葉をかけていた。

「……結弦？」

「何だ？」

「ならもう……思い残すことはない？」

奏は、これが最後と言わんばかりに、音無に対してそう尋ねる。音無は、笑顔でこう答えた。

「そうだな……誰かをたすけられたなら、俺の人生は……そう悪いものじゃなかった。そう思えるよ」

そう答えた後で、音無は何かに気付いたような表情を浮かべて。それから、こう言った。

「もしかして……俺は、消えるのか？」

「思い残すことがなければ……」

「……」

少し考える素振りを見せる音無。そして音無は、その答えを……『思い残すこと』を見つけた。

「アイツらがいる」

「……そう。あの人達とずっと一緒にいたい？」

そんな問いに対して、音無は……本心から語った。

「そりゃあ仲間だからな……居たいさ」

楽しいと思い始めていた、戦線メンバーとの生活。それらを手放すのは、音無にとっては苦痛にも近いことだった。生前あれだけの騒ぎをすることがなかった音無にとって、ここでの生活というのは……温かかったのだ。だが、それと同時に……こんな想いまで抱き始めていた。

「でも……今は違う気持ちもある」

椅子から立ち上がり、少しだけ歩く。歩みを止めた所で、音無は奏に言った。

「アイツらも、俺見たいな報われた気持ちになってさ……みんなで、この世界から去れればいいなって。また新しい人生も悪くないってさ……」

「でしょ？」

「ああ……」

納得しかけて、音無は……。

「ん？　ちょっと待て。お前はもしかしてこの気持ちを皆に知って欲しかったのか？」

「……知らなかった？」

そう言った後で、音無は奏に乗りかかるように言った。

「知らねぇよ！　つか俺、会った途端、いきなりブッ刺されたんだぞ！？」

「だって……貴方が死なないことを証明しろって言うから」

（なんて空回りをしてきたんだ。コイツとアイツらは……そしてコイツの不器用さと言ったら……！！）

音無は、実は奏がとてつもなく不器用なのではないかと思い始めていた。しかし今はそんなことに構っていられる余裕もなく、さらに言葉をかける。

「真面目に授業を受けたら幸せなのか？　部活動をしたら満たされるのか！？」

「だって……ここに来るのは皆、青春時代をまともに過ごせなかった人達だもの」

「あ？　そうなのか？」

「知らなかった？」

「知らねぇよ！　つか……そんなこと、どうやったら分かるんだよ」

「見てて気付かなかった？」

「！？」

最後の奏の言葉をきっかけに、音無は驚きのあまりに……というか、何かに気付いた為に、思わず腰をおろしてしまった。そう……ここは、この『死後の世界』は、若者達の魂の、救済場所だったのだ。日向も、あのセカンドフライを捕っていれば、報われて消えることが出来たのだ。もっとも、それはユイによって阻止されて、結局日向は消えることが出来なかったのだが。岩沢も、自分自身の力でそれを達成して、報われて消えて行った。

（誰もここにいたくているんじゃない……人生の理不尽に抗っているだけなんだ。それを奏は、そうじゃない、と……理不尽じゃない人生を教えてあげたくて、人並みの青春を送らせてあげたくて……ここに留まろうとする彼らを説得してきた）

だが、事実は皮肉なものである。たったそれだけの話だったのにも関わらず……互いの信念を貫く為に対立し、やがて武器まで作りだしてしまって……今では抗争の毎日である。

「どんだけ不器用なんだよ……お前」

「……知ってる」

「自覚はあるんだな」

「うん」

呆れながら言う音無の言葉に、奏は素直に頷いた。その後で、こう続けた。

「でももし……貴方がいてくれたら、出来るかもしれない」

「それは……手伝えってことか？」

音無がそう尋ねると、奏は、こう告げた。

「本当なら貴方は消えてるはず。でも貴方は残っている」

「お前の味方になれるのか……俺は」

「貴方が思い残していることは、そのことじゃないの？」

「！？　……そうかもしれない」

奏の味方になりたい。そう……音無は思い続けていた。そして、今この機会をきっかけとして、音無は奏の味方になることが出来る。しかし、頭の中でゆりの過去の話を思い出して……それは、無理なんじゃないかと思い始める。だが。

（けど……だからこそ、そんな記憶を永遠に背負い続けて行こうとしているアイツだからこそ、救ってやりたい……！！）

そう思って、音無はさらにこうも思う。

（出来るんだろうか……この不器用な『天使』と……頼りねぇ……やっぱ無理か？　いや、だったら抗争は続くぞ。）

彼らをこの世界から卒業させる方法が思い浮かばない。戦線メンバーの味方でもあり、奏の味方でもいられる音無だからこそ……なんとかしなければならない。それは分かっていても、やはり肝心なのはその方法。

「なぁ、協力してくれるか？」

「……それはこっちのセリフじゃない？」

「そっか……そうだよな……（『天使』に何言ってるんだ、俺）」

そして音無は立ちあがり、奏に向かって、こう告げた。

「分かったよ、奏……卒業させよう。みんなを」

「……」

「なら、俺も協力するぜ。音無」

保健室の入口の前に当麻が立っていた。

「上条、お前……いいのか？」

「あぁ、俺もあいつらを救ってやりたいからな。」

「それで……具体的には何をするの？」

話がとりあえずまとまったところで、奏が二人に尋ねてきた。音無が提案する。

「まずはアイツらから、過去の話を聞き出さなくてはならない。でも、敵を失った今、ゆりの目を盗んで動くことは不可能だ」

「なるほど……つまり、つまり立華がもう一度生徒会長に戻って、アイツらにとっての敵になるってことか……」

「そして、俺達の指示通りに動いて欲しい」

「うん……私に向いてる作戦ね」

奏は、短くそう呟いた。

「また一人にしてしまうけど……ごめん。けど、すべてが終わったら……！」

その時、音無は自分の発言に対して違和感を感じた。すべてが終わった時……それはみんながこの世界から卒業した時だ。しかし、

（終わったら……その時、その時……俺達はどうなるんだろう？）

何も言えないまま、音無は固まってしまう。

「……音無？」

「……あ、いや、すまない。少し考え事をしてしまってた」

当麻に問いかけられて、ようやっと音無は答えることが出来た。音無は、その後で何かを思い出したかのように、当麻に言った。

「そうだ……上条。お前に言っておきたいことがあったんだ」

「言っておきたいこと……？」

音無はまずこういう話題を出した。

「インデックスって知ってるか？」

「い……ンデックス？」

当麻はその名前に聞き覚えがあった。何故ならずっと無くしていたものが見つかったのだ。

「お、音無。インデックスを知ってるのか？」

「あぁ、一方通行って奴と一緒にいたんだ。一方通行はお前がいなくなってからずっとインデックスのことを守っていたらしい。」

音無がそう言った瞬間、当麻の眼から涙が流れた。いきなりのことだったので音無と奏は慌てた。

「結弦が泣かせた」

「ちがう。大丈夫か？上条」

「あ、あぁ、大丈夫だ。お前らのお陰で大切なヤツの名前を思い出せた。ありがとうな」

翌日。
校長の口から発表された、テストの偽装工作について。それによって、奏が正式に生徒会長に復帰することが決定し、あの日テストの偽装工作に協力していたメンバーは、一人残らず反省室にて反省文を書くこととなった。

「あ～もう！　何で僕がこんな目に……！！」

「それはこっちのセリフだっての。何で俺がこんな目に……」

反省文を書くことに不服な竹山がそう言った後に、当麻が言った。暴かれる際に、奏は当麻のことは何も言わなかったのだが、まさかの日向からの裏切りがあって、当麻まで連行されたのだ。

「あの錐揉み飛行は何だったんでしょうか……？」

「だよなぁ！」

「おや？　珍しく気が合いましたね？」

「やらされた奴にしか分からねぇよ。この気持ちは！　俺達は錐揉み飛行仲間さ！！」

日向と高松が、二人してそんなことを言い出す。そんな中、高松がノリよくこんなことを言い出した。

「おっと……私を脱がす気ですか？」

「おう、脱いでやれ脱いでやれ！」

「やめなさいよ、うるさいわね……」
高松を煽っている日向に向かって、面倒くさそうにゆりがそう言った。すると日向は、すぐさま意見を変えて、
「そうだやめろ！　気持ち悪い！！」
「どっちですか……」
これには、高松も頭を抱えるしかなかった。
「にしてもあの子……もうここ数日のこと、全部忘れちゃったみたいだったね……」
「当然です。１００の方が勝ったのですから……我々を襲った方が」
「本当に一瞬仲間になれるかなって思っちまったぜ……畜生！」
「「……」」
大山の疑問に答えた高松。その高松の言葉を聞いて、悔しがる日向。事情を知っている音無と当麻の二人は、彼らに本当のことを言えないもどかしさを、心のどこかで感じていた。

## 第27話　In Your Memories　後編（後書き）

全てを思い出した二人。そして、全ての力を振り絞って死んでしまった一方通行。最後の戦いの時に出したいと思います。

## 第２８話　Ｇｏｏｄｂｙｅ　Ｄａｙｓ　前編（前書き）

ユイとお別れ回です。やっとここまでこれました

## 第２８話　Ｇｏｏｄｂｙｅ　Ｄａｙｓ　前編

焼却炉の前に、当麻、音無、奏の三人が集まっていた。すると当麻が音無に…

「で、まずは誰から成仏させるつもりなんだ？」

音無に、そう尋ねた。すると音無は、少し考える素振りを見せた後に、

「……最初はユイがいいかと思う」

「……誰？」

分からないと言ったような表情で、奏が尋ねる。

「あの騒がしい奴だよ」

「お前、ユイをそう認識してたのか？それじゃあ奏が分かるわけ……」

「…あぁ、あの子ね」

「分かるのかよ」

当麻の印象だけで分かってしまうユイって一体……とりあえず話を戻すことに

「アイツ……いつも元気でさぁ、日向苛めて笑ってるしさ……バン

ドのボーカルもやって、やりたいことやってさ……もう十分報われているんじゃないかと思ってさ」

「確かにな……ほんの一押し、背中を押してやれば、ユイはここから卒業出来るかもな……」

当麻も、音無の意見には賛成だった。ユイはこの世界にきて、もう十分好きなことをやれたと思う。

だから……後は背中をポンと押してあげて、ここから卒業させてあげるのみ。そう……二人は考えていた。

「そう思うんなら、いいんじゃない？」

奏も、音無の意見に賛成した。

「賛成か？　よし……それじゃあそうしよう」

「後は……奏」

「何？」

「この間凶悪そうな天使を思わせるためにって頼んだ奴出来たか？」

「あぁ、こんな感じでいいの？『ハンドソニックバージョン5』」

奏が出したのは、青く禍々しい爪のようなものだった。確かにそれだったら凶悪そうだが…

「後……羽根生えないかな？」

「羽根？　生やしてどうするの？」
それは当然の質問だった。意味もなく羽根を生やせと言われても、どうしようもなかった。それに対して、音無は答える。
「いや、見た目かっちょいいじゃん」
「……かっちょいいのがいいの？」
「その方が『天使』らしいかなぁって」
「……考えておく」
奏は、肯定の返事を返した。そして、一連のやり取りを聞いた当麻が、ボソッと一言洩らした。
「音無……それ、完璧にお前の趣味だろ」

ガルデモが練習している教室の前で集まる三人
「で、立華は何をすればいいんだ？」
「ああ、こうしよう」
当麻の言葉を聞いて、音無はあらかじめ考えていた作戦を述べた。

「奏はアイツのバンドの練習中に現れるんだ。そしてこう言う。『他の文化部から騒音の苦情がきている』。そしてユイを指してこう言うんだ。『特にお前のギターが酷い。お前のせいでバンドが死んでいる。なのでしばらく、そのギターは没収させてもらう』そして、ユイのギターを取り上げて、奏がその場を離れる。もちろんユイは追いかけてくる。お前は逃げる。そして中庭まで来てくれ。そして俺が奏にぶつかるふりをする。奏は同時にギターを手放せ。そして俺がギターを受け取るから、奏はそのまま逃げろ。そうしてアイツと、二人きりになれる状況を作ってくれ。棗は、もしこの作戦が失敗しそうになった時は、どんな手を使ってでもいいからフォローを頼む」

「お前……まぁいいか。」

「……分かった」

音無による説明が終わった後で、二人はそれぞれそんな返事を返す。そして、音無は二人に言った。

「よし、行くぞ」

そして、三人は行動開始した。

ガルデモのメンバーは練習を始めていた。ただ、今回の新曲はボーカルはユイだけということで、曲は順調に進んでいるかのように思えたが。

「ストップ！」

「？」

ひさ子がそう言葉をかけて、ドラム・ギター・ボーカルすべてが止まる。その後で、ひさ子がユイのそばまで駆け寄ってきて、言った。

「そんなよれよれのリズムで続けるな。前よりはましになってるけど……まだ完璧とは言えないぞ」

「ふぇええ？」

「ユイ……歌うか弾くかどっちかに専念した方がいいんじゃないの？」

「あ～そりゃ言えてる。今のまんまじゃちょっと酷いかな……」

入江と関根の口からもそんな言葉が洩れる。しかし、ユイは言った。

「そんなぁ！　岩沢さん、弾きながら歌ってますよ！」

「そりゃ岩沢はどっちもうまいからだよ」

「う……」

本当のことを言われて、ユイは反論を返せなくなっていた。だが、頑張って次の言葉を言った。

「私だって頑張ってますよぉ。みんな言うことキツすぎですよ！ライブだってちゃんと盛り上がってるじゃないですか……」

そんな時に、ガラッと教室の扉が開かれた。そして、そこから入ってきたのは……。

「て、『天使』？！」

奏が入ってきたことに、一同は驚きを隠せないでいた。そんな中、奏はユイのことを指さして、言った。

「お前のギターのせいでバンドが死んでいる」

「「「「……」」」」

固まった。思わず、メンバー全員が固まった。指摘されたユイ自身ですら、思わず固まってしまった。
ようやっとの思いで言葉を発したのは、ひさ子だった。

「い、一瞬にして今のバンドの弱点を見抜いた！？」

「やっぱりただ者じゃない！」

「音が分かるのよ……！」

関根と入江に至っては、奏を褒めるような言葉すらかけている。

「そんなぁ！　みんなは気付いていないと思ってたのに！！」

「というわけで、しばらくそのギターは没収させてもらう」

「え？」

ユイが状況を把握するよりも先に、奏がユイからギターを奪って逃走。状況を完全に把握しきるまで、およそ１０秒。

「あ～！　私のギター！！　待てやゴラァ！！」

「あ、ユイ！！」

立ち去って行く奏の後ろを、ユイが追いかけて行く。教室の扉は勢いよくバン！　と閉められて、残されたのは四人だけ。

「……ギター無しで練習してみようと思ってたのに」

思わず、ひさ子は、そう呟いてしまっていた。

「音無、来たぞ」

「あ、ああ……本当に予想通りにことが運んだよ」

自分が考えた作戦なのにも関わらず、音無は多少信じられないと言ったような気分になっていた。だが、実際にギターを抱えた奏と、それを追いかけるユイがやってきているのだ。それを見て、動かないわけにはいかない。

「今だ、音無」

「ああ！」

タイミングを見計らって、音無は奏に近づき。

「あ～悪いぶつかっちまった！」

「わぁ！」

二人ともほぼ棒読み状態でぶつかる。しかし……奏がギターを手放す際、そのギターをかなり高い位置にまで上げてしまった。

「ちょっ……バカッ！　高すぎるって！！」

音無は、高く上に上がったギターを落とさない為に、なんとか自力で落下地点まで向かう。そして、キャッチ。

「あ～！　私のギター！」

「ああ、無事だよ……っと」

半ば奪いさるような感じで、ユイは音無よりギターを取り返す。その後で、音無に言った。

「先輩がギターを守ってくれたんですね『天使』から……っと、アイツはどこだゴラァ！」

お礼を言ったと思ったら、今度は奏に対してキレている。そんなユイの動きの移り変わりを見て、音無は言った。

「何が『ゴラァ』だ……ったく、相変わらずお前、好き放題やって

んな」

「へ？　好き放題？　やってないよ好き放題なんて」

何を言っているんだという表情を浮かべながら、ユイが言う。

「バンドのボーカルの座を射止めたじゃん。ギターまで弾いてさ」

「そんなの全然だよ。やりたかったことの一つに過ぎないよぉ～」

「他にもあるのか……？」

思わず、音無は尋ねてしまった。ユイは笑顔で答える。

「あるよ、いっぱい」

「いっぱいって……ちょっと待て。場所を変えよう」

この場では収まらないと思って、場所を移動することにした。

「で、他には何だよ」

場所を大食堂前のベンチに移して、音無はユイの話の続きを聞くことにした。ユイは、音無より受け取ったコーヒーを口にしながら、

「話さなきゃいけないの？」

「話したくなかたらいいけどさ……」

無理に話は聞き出さない。音無は、そんな信条を抱きつつユイに尋ねた。しばらく考える素振りを見せていたユイだったが、Ｋｅｙコーヒーを一口飲んだ後に、

「いいよ、話してあげる」

そう、話を切り出したのだった。

「私ね、やりたいこと人よりいっぱいあるんだ。どうしてだと思う？」

「そりゃ……生きている時に出来なかったからだろ？」

「そうそうその通り！」

ユイはその後で、自分の過去の話を交えつつ、説明を始めた。

「小さい時にさ、後ろから車ではねられちゃってさ、それでさ……身体動かなくなっちゃった」

あっけない感じで言うが、それはとてつもなく辛いことだっただろう。動きたくても動けない。外に行きたくても、自力で動くことが出来ない。歩けないというのは、死ぬよりも辛いこと。生きているのに……行動範囲はベッドの上か、車椅子の上だけ。不自由な生活程、人間を苦しめるものなのだ。

だが、ユイはそのことを後悔しているわけではなかった。

「完全に寝たきりだったんだよね……もう介護なしに生きてらんな

いの。お母さんに頼りっきりだった。お母さんに、凄く悪いことをしたなって……」

ユイは、自分が不自由な身体になってしまったことで、母親にいつも辛い思いをさせてしまっていたことを、後悔しているのだ。もっとも、母親本人が本当に辛い思いをしていたのかはともかくとして、ユイはそう思っているだけの話。

「テレビだけは見れたからさ、音楽番組を見てバンドを見て、こういうのを自分でもやれたらいいなぁって……」

「そっか……じゃあよかったじゃん」

「うん！」

笑顔で、音無の言葉に答える。その笑顔を見た後で、音無はユイに尋ねた。

「で、後やりたいことはなんだ？」

「うん……野球中継も、よく見てたんだぁ」

「野球だったら、球技大会でやっただろ？」

確かに、彼らはすでに球技大会にて野球をやっていた。だが、ユイはやっただけでは満足出来ないらしく、

「あの時打てなかったじゃん！」

「……ヒットを？」

「ホームラン！」

「ハァ！？　それはなに……打たないと駄目なの？」

思わず音無は、ユイに尋ねるように言っていた。ユイは、立ちあがって素振りをするような動きを見せながら、

「駄目だね！　バンドがうまくなったら、ちゃんと野球の練習もしようと思ってるんだけど……ね！」

（その両立はかなり大変だ……）

心の中でそう呟いてから、

「一応聞いておこう……他には？」

「サッカー！」

「サッカー？」

「ブームだったじゃん！」

「確かにそうだったが……（多趣味すぎだ！　どこの世界にバンドと野球とサッカーを一緒にやろうとする奴がいる！）」

心の中でユイにそうツッコミを入れた後に、さらに音無は尋ねた。

「まさかまだあったりとかは……」

「プロレスかな？」

（わけがわからない……どこの世界に！　……つか、テレビで見たものばっかりに憧れてるんだなぁ）

ユイが抱く多くの『やりたいこと』の内容を聞いた音無は、思わず小さな溜め息を漏らす。その後で、決意を秘めたような表情を浮かべて、

「分かった……俺が叶えてやる！」

「ふぇ？」

「まずはそうだな……手頃なところから、プロレスからか？」

「ふぇ？　プロレス？！」

制服の上着を脱ぎながら、音無が言う。ユイはそのことに驚き、

「技は？」

「ジャーマンスープレックス！」

「じゃ、ジャーマンスープレックスだって！？　そんな派手な技が出来るか！　間接技とか出来そうな技にしろよ……」

音無がユイに安全策を出すが、ユイはそれでも引かなかった。

「だって……憧れだったんだもの……！！」

そこから始まる、ユイによるジャーマンスープレックスの素晴らしさについて。音無はそのほとんどを聞き流して、その後でユイに言った。

「あーＯＫ！　じゃあやってみろよ！！　その前に……ここじゃコンクリートで痛いから、芝生のある所まで移動するぞ」

音無は、怪我をするのもいやだと思ったので。二人はとりあえず、芝生のある所まで向かうことにしたのだった。

## 第29話　Goodbye　Days　中編

場所を移動したところで、音無とユイは、ジャーマンスープレックスをやることとなった。

「じゃあやってみろよ、ユイ」

「おっしゃあああああ！！」

両手を挙げて、音無は覚悟を決める。その背後から、ユイが音無の身体にしがみつき、そのまま地面に音無の身体をぶつけることが出来れば、ジャーマンスープレックスの完成だ。

「いいっよっと！」

「うおっ！？」

ユイは音無の身体を何とか上げる。意外と力があることに気付いた音無は、これなら案外簡単に行けるのではないかと思ったが……。

「とりゃあああああああああああ！！」

「いっでぇえええええええええええ！！」

ドシン！！技は失敗し、音無は頭から地面に激突した。

「やっぱり女の子の私なんかには無理かな……」

「いや！　出来そうでしたよ！　むっちゃ惜しかったですよ！！」

ここでユイが諦めてしまうと、作戦は失敗に終わってしまう。それだけは何としても避けたい音無は、ユイにそうフォローを入れたのだった。

「え？　そう？　じゃあもう一回やっていい？」

「あ？　あ、ああ……」

無邪気な笑顔でそう言うユイに対して、音無は戸惑いながらも答えた。最後まで付き合ってあげないと、これはいつまでも終わらないからだ。だが、音無とてそう何回も痛い思いはしたくないと思っていた。いくら死なない身だからといっても、痛みだけはしっかりと感じるのだから。

「とりゃあああああああああああああ！！」

そして、二回目の挑戦。だが、またしてもそれは失敗に終わる。

「……もたない」

「わー！　次こそは絶対に成功してみせますから！！」

「本当、最後だからな」

そして、三回目の挑戦。当然、成功するはずもなく。音無結弦、無駄に大ダメージ。

「……帰る」

「先輩ぃいいいいいいいいいいいいいいいい！！」

さすがにこれ以上は音無の身体がもたない。音無はそのまま帰ろうとしたところで、ふとあることに気付いたのだった。

「お前さ……もしかしてブリッジとか出来ないんじゃねぇの？」

「で、出来ますよその位！」

「やってみろよ」

言われた通りにユイがブリッジをやってみると。

「あ、あれ？」

ブリッジの形になることはなく、そのまま地面に倒れこんでしまった。そして音無は、瞬時に悟る。

（やっぱり原因はこれだったのか。この為に俺は何度も意識が飛びそうに……）

そして音無は、ユイに告げた。

「まずはブリッジの特訓だな」

「ふぇええ？　つまんなーい！」

「いいからやれ！！」

こうして、まずはブリッジの特訓から始まることとなった。初めの

内は、全然立つことも出来なかったのだが。練習を積み重ねて行く内に、次第に立てるようになっていき。数時間後。

「で、出来てます……よね？」

「ぶるぶる震えてるが……まぁいっか。よし、それじゃあやってみるぞ」

手足が多少震えていることに対して不安を感じる音無だったが、ユイにジャーマンスープレックスをやらせてみることにした。ユイは、ブリッジの状態から元に戻り、音無の身体にしがみつく。そして、

「じゃあ……行きますよ！！」

「来い！！」

ユイは……音無の身体を持ち上げた。音無は、心の中で呟く。

（おお！？　腕はお腹に回ったままだ。これは逃げようがない。これは完璧な……完璧な……！！）

そして、最後には言葉にして叫んでいた。

「ジャーマンスープレックスだぁあああああああああああああああ！！」

ドシン！！地響きがして、音無は首の方から地面に落下する。それでも、意識が飛ばないうちに、

「1，2，3……！！　カンカンカンカン！　試合終了！！」

カウントを取り、ユイの勝利を宣言したのだった。……いや、元から勝負などしていなかったから、その言葉を使ってユイがジャーマンスープレックスに成功したことを宣言した。

「やった……やったんだ私……！！」

成功したことに素直に喜びを感じるユイ。音無の身体から離れたかと思うと、

「やったぁあああああああ！　バンザイ！！」

その場で飛び跳ねて、全身で嬉しさを表現していた。ユイから解放された音無の身体は、そのまま芝生の上に倒れこむ。

「はぁ……」

小さく溜め息をついた後で、音無は小さな声でボソッと呟いた。

「こんなのが後いくつ続くんだ……？」

そんな音無の呟きを無視するように、ユイは笑顔で、全身で喜びを見せるのだった。

「大変そうだな。音無」

「なら、あなたが変わったら？」

「いや、音無が進んでやってるからな。ここは音無にやらせないと」
物陰で様子を伺う当麻と奏。そんな二人の所に……
「あれ？上条さん。なにしてるんですか？」
入江が通りかかった。きっとまだ戻らないユイを心配して探しに来たのだろうが……
「あ、えっと、入江はどうしたんだ？バンドの練習じゃないのか？」
「はい、バンドの練習なんですが、ユイがギターを探しに行ったまま帰って来ないので……それにしても、天使と一緒にいて大丈夫なんですか？」
「何が？」
奏は無表情で答える。当麻はため息を付き、入江に事情を話すこととなったのだった。

続いては、ユイと音無による会合の結果、サッカーをやることとなった。ただし、条件がなかなかに厳しいものであった。それは……ユイによる五人抜き（キーパー含む）シュート。こんなこと、普通

のサッカー選手でもなかなか出来ないことだった。ちなみに、ユイがそれに憧れた理由が、『マラドーナだよ』の一言で片付いてしまった。そこで音無は自分を含めて五人のメンバーを集めなくてはならなくなった。というわけで、手軽なところというか、堅実的に松下に頼もうとしたのだが。いつもＴＫと一緒にいるのでＴＫの所に向かってみれば、そこには松下の姿はなかった。

「お～いＴＫ、松下五段知らないか？」

気になった音無は、相変わらず廊下でもダンスを踊っているＴＫにそう尋ねたのだが、ＴＫは、踊りながら答えた。

「今の奴、俺のように踊れな～い」

「そりゃあそうだろうな……」

ヘッドスピンをするＴＫを見て、音無は呟く。常人でもここまでは踊れないのに、ましてや筋肉質な体系をしている松下など、ＴＫのように完璧に踊れるはずがないだろう。

「で、今はどこに……」

「山籠り、ｉｎ　ｔｈｅ　ｍｏｕｎｔａｉｎ」

「山籠り？　またダンスとは正反対なところに行ったな……」

しかし、山籠りをしているということは、学園には来ていないということになる。つまり、人員として呼ぶことは不可能ということだ。

「どうすっかな……」

「俺が集めてこようか？」

と後ろから声をかける当麻。その後ろには入江もいた。

「上条、それに入江も……まさかお前……」

「先輩、事情は聞きました。私も手伝います」

「はぁ、しょうがないか。とりあえず今から言う奴らを集めてきてくれ」

「分かった」

そう言って立ち去る二人。あのことを言ったのが入江だけだよな……上条

「あれ？　先輩一人だけですか？」

サッカー場に行ってみると、すでにボールを持って、中央で待っているユイがいた。それに対して、やってきたのは音無一人のみ。ユイの口からそんな疑問の言葉が出てくるも当然だろう。

「いや、上条がメンバーを集めているところだ。もうすぐ来るはずなんだけど……」

音無も、本当に来るかはともかくとして。とりあえず当麻達が到着するのを待つことにした。そして、待つことおよそ2分。

「……お？　来たぞ……あれ？上条は？」

その中に、当麻の姿は見当たらなかった。とりあえず、音無が連れてきてくれと頼んだ人物はやってきたので、よしとすることにした。

「おい……これは一体どういうことだ？　『天使』がスポーツマンシップに則って、正々堂々サッカー対決をするとか言ってたくせに、そこにいるのはユイじゃねえか」

「ふむ、なるほどな……つまりあの手紙は、普段怠けている俺達に怒りを覚えたユイからの挑戦状だったというわけか」

来たのは、日向、藤巻、野田、ＴＫが来たのはいいが、当麻の姿が見えなかった。

「とりあえず、始めるか」

こうして、サッカーが始まった。ユイは走り出し、最初に出てきたのは野田だった。

「おっしゃー、行くぜ。」

「はん、下手くそなドリブルしやがって、もらったあああああああ」

野田がスライディングをして、ユイのボールを奪おうとした瞬間、いきなり野田の顔面に何かが当たり、ボールを奪うことが出来なか

った。

「何事だ？」

続いて、藤巻、

「何やってるんだ野田。」

「二人目」

ユイは跳び上がり、藤巻の背中に思いっきりケリを入れた。明らかにレッドカードだが……

「審判、今の反則だろ」

「いや、セーフだな」

と今までどこにいたのか当麻が審判をしていた。

「てめぇ、ルールしってるんだろうな」

「一応は……」

こうして、二人目も抜いたユイは、三人目と四人目のＴＫと音無の番になった。再びＴＫを抜こうとしたが、あっさりとＴＫボールに奪われたと思った瞬間、

「あ、わりぃ」

音無が思いっきりタックルをし、結果、再びユイにボールが戻った。

「最後は……テメェか！」

「くっ！」

ゴールだけはさせまいと、日向は構えを取る。そんな日向を指さして、ユイは言った。

「殺してでもゴールを奪う！」

「お前スポーツマンシップはどこいった！？」

「んなこと知るか！」

叫んだ後で、ユイはボールを蹴った。

「覚悟！　必殺シュート！！」

「俺を殺したいのかゴールを決めたいのかツッコミどころが多いシュートが来やがったぁあああああああああああああああああああああああああああああ！！」

しかし、ボールは真正面。このままいけば、日向が見事に止められるだろう……止めた後で無事でいられるかどうかは不明だが。だが、その時だった。

「……え？」

突然軌道が代わり、ボールは真正面から左へと逸れる。あまりにも

突然の事態に、日向は対応できなかった。そしてボールは……そのままゴールネットを揺らす。

「は……入った？」

一番信じられなかったのは、ゴールを決めた本人だった。

「やったぁあああああ！　五人抜き達成だぁ！！」

その場でピョンピョンと飛び跳ねて、ユイは嬉しさを表現する。そんな中、音無はこころの中で呟いた。

（一度取られたし、キーパーも抜いてないしグダグダだったが……まぁいいか）

そして、ある方向に向けて親指を立てる。その方向を見てみると、そこには奏が立っていて。『Ｈａｎｄ　Ｓｏｎｉｃ』をボーガン代わりにして、ボールを狙っていたのだった。

## 第２９話　Ｇｏｏｄｂｙｅ　Ｄａｙｓ　中編（後書き）

次でユイ編終わりです。その次からはオリジナル展開でやりたいと思います。というか、あの二人が出るっていうだけですが……

## 第３０話Ｇｏｏｄｂｙｅ　Ｄａｙｓ　後編（前書き）

今回は少しばかりオリジナル展開でやりたいです

## 第３０話Ｇｏｏｄｂｙｅ　Ｄａｙｓ　後編

お次は野球。一応、音無が話を聞いた中では最後のスポーツだ。

「一応聞いておくが、どの辺まで飛んだらホームランってことにするんだ？」

「そんなの……フェンス越えに決まってるじゃん！」

平然と言い放つ割には、目標がかなり高すぎた。これには、ピッチャーマウンドに上がった音無も、さすがに頭を抱えるしかなかった。サッカーやプロレスの時とは違って、フェンス越えホームランに関しては、小細工とかも無理だし、ちょっとの努力でどうにかなるものでもない。筋力と技術力が大切となってくるのだ。はたして、ユイにそれだけの技術力があるのだろうか？筋力に関しては、先ほどのプロレスにて多少証明されたので、よしとするとして。

「とにかく……思い切り振ってみろ！」

やってみなければ始まらない。とりあえず音無は、横に置いた球の中から一球選んで、投げてみる。

ユイは、飛んでくるボールを全力で当てにいった。結果。カン！

という軽い音がして、ボールは前に転がった。

「あ、当たった！」

ユイにしてみれば、人生発ヒット。しかし、ホームランには程遠い一発だった。

「当たればいいってわけじゃないからな……もっとボールを良く見て、バットの芯で当ててみろよ！」

続く第二球は、ゴロに終わる。

「ボールの上を叩きずきてる！」

第三球は、ピッチャーフライ。

「今度は下過ぎ！」

そして最後には、空振り。空振った後に、ユイは苦笑いを浮かべた。

「もっと球をしっかり見ろ！　目を瞑ってて当たるか！」

その後も、ユイと音無による野球は続く。しかし、結局ホームランは一発も出ることもなく。

「駄目だ……疲れて握力が弱くなってやがる。また明日だな」

「ふぇえええ？」

結局、ユイが疲れたのを理由に、その日は終わりとなったのだった。

その後も、暇さえあれば野球をやり続けた二人。しかし、ホームランは一向に出ない。

「テヤッ！」

「掛け声だけデカくても、当たりは小さいぞ！」

「うっ……まだまだ！」

その後も、二人は野球を続けるが、ホームランは依然として出てこない。

「……」

球が転がって、グラウンドの外に出る。その球を拾って、その後でユイと音無の二人を見た。

「……」

しばらく眺めた後、その人物はそのままグラウンドから離れていった。その姿に気がついた当麻と奏と入江

「アイツ……」

「もしかして、あのひと、私たちがやろうっとしていることに気がついたんじゃ……」

「…そうみたいね。」

「あの、上条さん、少し耳貸してください」

「ん、いいけど、」

そう言って、入江は少し恥ずかしそうに当麻に耳打ちをした。すると当麻は……

「いいかもしれないな。よし、ソレでいこう」

「はい、あの、立華さん、しばらく席をはずすので後は……」

「……私に出来ることは？」

「そうだな。とりあえず、何も無いな」

「分かったわ」

当麻と入江の二人はそのまま校舎の方に入っていったのだった。

「ハァハァ……ティッ！」

ユイは懸命にバットを振るも、当たることなく、空振りしてしまう。疲れているのもあり、辺りが暗くなってきていることもあり、ユイはバットに球が当たらなくなってきていた。そんなユイを見て、音無は判断する。

「暗くなってボールが見えないな……また明日だ！」

「ふぇえええ？」

不満そうな表情を見せるユイだったが、仕方ないと言ったような表情を見せて、ユイはバットとメットをベンチに戻して、グラウンド

を去って行った。その後で、音無は散らばったボールを片付ける。拾ってはカゴの中に入れて……それの繰り返し。そんな中、何者かがグラウンドに入ってきて、ベンチに置かれていたバットを手にする。そのままバッターボックスに入ったかと思うと、

「お前ら何やってんの？」

「え？」

音無に声をかけた。声のした方を音無が振り向くと、そこにいたのは……。

「よっ！」

日向だった。日向はバットを持って、ただその場に立っていた。そんな日向に、カゴに入っているボールを一つ取り出した音無が、尋ねる。

「お前もやるか？　本気の野球」

「フルスイングか……最近してねぇや。そういうのも……いいかもな！」

バットを構えて、それから日向は言う。そんな日向の動きを確認した後で、音無はサイドスローからの一球を投げた。そして日向は、その球をフルスイングして打った。カキン！　と、金属バット特有の音を響かせたその球は、外野の頭を越えて、フェンスに当たった。

次の日。この日も夕方頃まで野球を続けていた。しかし、ここ数日毎日野球していたのが祟ったのか、ユイの体力は限界だった。空振りした際に座り込んでしまい、バットを手放してしまった。

「……大丈夫か？」

心配した様子で、音無がユイに駆け寄ってくる。そして、違和感を感じた。

「……お前、手見せてみろ」

「……イヤだ」

一度は拒否するユイ。しかし音無は、強引にユイの手を見た。すると……タコが出来ていて、しかもそのタコのほとんどが潰れてしまっていた。テーピングはしてあるが、そのテープには血が滲み出ていた。

（無理もないか……）

音無が心の中でそう呟いたら、

「やっぱり無理だったんだよ……もういいや、この夢」

元気に、しかし明らかに諦めの言葉を、ユイは言う。

「諦めんなよ！」

「色々ありがとね……なんでこんなことしてくれたの？」

「それは……」

まさか本当のことを言うわけにもいかず、音無はその質問の答えを避けて、

「お前がやりたかったことだったんだろ？　最後まで頑張れよ」

「ホームランなんて冗談みたいな夢だよ。ホームランが打てなくても、こんなにいっぱい身体が動かせたんだから、もう十分だよ。毎日部活みたいで、楽しかったなぁ」

生前満足に身体を動かせなかったユイにとって、こんなに身体を動かせたのは夢みたいな一時で。それだけで、ユイは満足だった。

「……じゃあ、もう全部叶ったのか？」

そんなユイに、音無は尋ねる。もうやりたかったことは全部やったのかと……。

「叶う？　何が？」

「その……身体が動かせなかった時にしたかったこと」

「……ああ、もう一個あるよ」

「何？」

音無は、それがどんなことだろうと叶えてやろうと思った。それで

ユイが報われて、この世界から卒業出来るのなら……十分に満足出来ることだったからだ。だが、

「……結婚」

「え……」

ユイが言った言葉は、先程の音無の決意すらもねじ曲げてしまう程の威力を持つ言葉だった。

「女の究極の幸せ。でも家事も洗濯も出来ない、それどころか一人じゃ何にも出来ない迷惑ばかりかけてるこんなお荷物……誰が貰ってくれるかな」

ユイは、最後の最後に、自分の中では決して叶いっこないと思っている夢を残していたのだ。もちろん、音無だって分かっている。ここで、何の考えもなしに『結婚してやろう』と言うことは、それこそまさしくユイを傷つける結果に終わるだけだということを。

「神様って酷いよね。私の幸せ、全部……奪っていったんだ……」

「そんなこと、ない……」

力ない声で、音無は言う。うつむきながら言うその声には、自信がなかった。ユイが言っていることは間違っていない。何か悪いことをしたわけでもないのに、ある日突然歩けなくなってしまい、身体が動かなくなってしまい、介護が必要な身体となってしまった。自由を奪われた。語ってしまえばたった二文字、『動く』という自由すら奪われてしまった。そして、それが更に、彼女が結婚出来ないというジンクスを生んでしまった。不幸に、更に不幸か重なってし

まっていたのだ。

「じゃあ先輩……私と結婚してくれますか？」

だからこそ、ユイは真剣だった。簡単な思いで『結婚する』と言って欲しくない。だからその表情は、真剣だった。故に、音無は詰まってしまった。彼は、ユイの話を最後まで聞いて……しかし、答えはひとつ、『Ｎｏ』だった。女性に対して簡単に結婚するなんて言ってはいけない。今回のようなケースなら尚更だ。確かに音無は、ユイのことは嫌いではない。しかし……愛してもいなければ、覚悟もない。

「それは……」

『出来ない』。そう続けようとした、その時だった。

「俺がしてやんよ！！」

「「！？」」

グラウンドに響く、１人の青年の声。その声は、まさかこんなところで聞けるとは思ってはいなかった声で。ある意味では待ちわびていた声でもあった。カラン、とユイが持っていたバットが地面に落ちる。そんな様子すらも気にせず、更に彼は言った。

「俺が結婚してやんよ。これが……俺の本気だ」

そこにいたのは……青い髪の青年。日向だった。

「そんな……先輩は本当の私を知らないもん」

「生きてた時のお前がどんなでも……俺が結婚してやんよ！　もしお前がどんなハンデを抱えてでも！！」

「ユイ歩けないよ……立てないよ」

「どんなハンデでもっつったろ！！」

「！？」

弱音を吐くユイに、日向が叫ぶ。日向のその目は……まさしく本気。決意をした人間の目をしていた。

そして日向は、更に言った。

「歩けなくても、立てなくても、もし……子供が産めなくても。それでも俺は、お前と結婚してやんよ！　ずっと側にいてやんよ」

「……」

ユイの顔が、嬉しさと不安が入り混じったような表情となっている。だが、どちらかといえば嬉しさが勝ったような表情だった。

「ここで出会ったお前はユイの偽者じゃない。ユイだ。どこで出会ったとして俺は好きになっていたはずだ。また６０億分の１の確率で出会えたら、そん時もまたお前が動けない体だったとしてもお前と結婚してやんよ」

優しい口調で、日向はユイにそう言った。しかし、その言葉を聞いたユイは、悲しそうに呟く。

「出会えないよ。ユイ、家で寝たきりだもん」

「俺，野球やってるからさ。ある日お前んちの窓パリンッて、打った球で割っちまうんだ。それを取りに行くとさ、お前がいるんだ。それが出会い。話するとさ、気があってさ。いつしか毎日通うようになる……介護も始める。そういうのはどうだ？」

日向のその言葉を聞いて、音無はその光景を想像した。そして……微笑ましいと思い、思わず笑みを隠せずにいた。ユイは、最後にこう尋ねた。

「ねぇ、そんときはさ。私をいつも一人きりでさ、頑張って介護してくれた私のお母さん……楽にしてあげてね」

その問いに対して、日向は短く、しかし確かな言葉を言った。

「任せろ」

「……よかった」

これで、ユイが抱えてきた後悔……未練は消えた。身体が軽くなっていくのを感じる。地面に足がついていないような、まるで空気になっていくような、そんな感じ。だが、そんなユイに……。

「消えるの待った」

と当麻と入江が止めに入った。何事かと音無と日向が驚いていた。

「お前ら、」

「先輩、あの……」

「折角結婚するんだったら、コレ付けてお別れしなきゃね」

そう言って、入江が渡したのは白いヴェールだった。

「これって、」

「ユイ、この間結婚したいって言ってたでしょ、だから、さっきまで作ってたの。上条さんも早く日当さんに」

「日向。これもユイに渡してやれ」

「これは……」

当麻が渡したのは、鉄の指輪みたいだった。

「悪いな、こんなモンしか用意できなくって、だけど、」

「あぁ、ありがとうな。ユイ」

日向はユイに指輪を渡すとユイは泣きながら……

「私のために……ありがとう。皆」

ベンチには、ついさっきまでユイが使っていたバットとヘルメット

が置かれてあった。ヘルメットを手にとり、日向は空を見上げる。

「日向！」

「……音無か」

そんな日向に声をかけたのは、音無だった。

「……なぁ音無」

「何だ？」

「……アイツは、幸せだったんだよな。報われて、この世界から消えたんだよな？　満足して、それで……消えたんだよな？」

音無の方を向いての日向の問いに、音無はこう答えた。

「……ああ。多分そうだと……いや、絶対にそうだと思う」

「……そっか」

「……よかったのか？」

今度は音無からそんな言葉が返ってきた。日向は、目に涙をためつつ、答える。

「よかったさ」

「……お前は、今度どうする？」

その問いに、日向は言葉をこう返した。

「俺も最後まで付き合うよ。この世界には、まだ心配な奴らがたくさんいるからな」

そう答えた後で、日向はもう一度空を見上げる。そこに映る空は、綺麗としか言いようがない夕焼け空だった。

夜の校舎内。響くのは、大山の悲鳴。駆け付けた男子生徒――――野田は、ハルバードを使って、大山を襲う謎の存在を斬った。しかし……野田は奇妙に思った。そして、呟いた。

「今……俺は何を斬ったんだ？」

その様子を眺めていた遊佐が、無線機を使ってこのことをゆりに報告する。しかし、無線機から返ってきた返事は、こうだった。

『影？　もうちょっとちゃんと説明してよ』

これに対して、遊佐は言った。

「影としか説明出来ません。今駆け付けた野田さんが倒したところ

です。大山さん一人では危ないところでした」

その言葉に対して、遊佐に対する返答ではないのだが、ゆりはこう呟いた。

『危ないって……何が？』

## 第３０話Ｇｏｏｄｂｙｅ　Ｄａｙｓ　後編（後書き）

次回、ついにあの男が登場です。ちなみに遊佐と入江は最後まで生存させます。

## 第３１話　影（前書き）

今回はオリキャラ一人目を出したいです

## 第３１話　影

当麻は、次の相手をどうするか音無と奏と相談する為に、待ち合わせ場所まで向かうことにする。その途中で、日向と直井の二人に捕まっている音無を見つけた。

「……何してんだお前達」

そして、理由は不明だが、何故か日向と直井の二人が、音無をめぐって火花を散らしているようにも見えた。そんな様子を見て、当麻は思わずそう呟いてしまったのだった。

「ああ、上条か……いや、何か二人が待ち伏せしてるかと思ったら、いつの間にか二人だけの戦いに……」

「コイツらは恋する乙女かっての……モテモテだな、音無」

茶化すように、当麻は言う。しかし音無は、首を振って全力で拒否した。

「いやいや、俺男にモテても全然嬉しくねぇから！！」

「もっとも、お前自身結構女子にもモテてるみたいだけどな……」

「え？」

「なんでもねぇよ。ただの独り言だ」

そんな中でも、直井と日向の言い争いは終わらない。

「さぁ僕の目を見るんだ。貴様はトイレットペーパーだ。あっという間に流されて行くトイレットペーパーの潔さに……」

「こらこら止めろ！」

ここで催眠術を使おうとした直井を、音無が間に入ることで止める。中途半端にかかってしまいかけたらしい日向は、その場にゆっくりと倒れこんだ。

「本当に何してんだよお前たちはよ……」

そんな様子を、当麻は終始呆れたような目で眺めていた。

「僕がお手伝いさせて頂きます」

先ほど催眠術をかけた時とは全然違う、音無にだけ向けられる笑顔で直井は言う。……この表現だともしかしたら語弊が生じる可能性もあるので、表現方法を少し変えよう……いや、言葉が見つからないので、敢えてそのままにしておくとしよう。

「お前らな……俺達がやろうとしてることが何なのか分かってるのか？」

見かねた音無が、日向と直井にそう尋ねる。すると二人とも、

「「分かってるよ（分かってますよ）」」

そう答えた後に、直井が言った。

「一人ずつ消していくんでしょ……？」

「お前が言うと犯罪行為にしか聞こえないな」

日向が思わずツッコミを入れていた。

「そもそも直井、お前にはもう思い残すことはないはずなんじゃないのか？」

確かにその通りである。以前に直井が戦線メンバーを襲った際、音無が直井に言葉をかけたおかげで、もう直井には思い残すことなんてなくなったはずなのだ。しかし、それとは裏腹に未だに直井はこの世界に残っている。その理由は……。

「僕は貴方と一緒にいたいんです。それに……コイツより先に消えたくありません」

日向を指さしつつ、直井は言う。思わず当麻は、

「そんな理由でいつまでもこんな世界に残ってるんじゃねえよ……」

と呟いてしまっていった。

「それじゃあどうすればいいんですか？」

「消えるんだよ」

「貴様には聞いていない」

直井の質問に日向が答えたところで、そう言葉が返ってくるだけだ

った。当麻と音無は、そんな直井に呆れを感じつつ……何か違和感みたいなものを感じていた。

「ねぇ音無さん……パートナーが必要でしょ？　僕を使いこなしてくださいよ、音無さん！」

「「「……！！」」」

直井の背後を見て、音無・当麻・日向の三人は絶句していた。そこには……何か得体のしれないものが現れようとしていた。黒い……それこそまるで、影みたいなものが。

「？　どうかしましたか？」

それに気付いていない直井は、そう尋ねる。

「なんだ？　……また何かしたのか？」

日向が、そう尋ねる。しかし、これは直井がやったことではない。おまけに、直井はこのことに気付いていない。だから直井は、

「何のことだ？　僕は何も……！？」

後ろを振り向きながら、直井がそう言う。……そしてその影は、直井目掛けて襲いかかってきた。

「なっ！？」

その影は……直井の身体の中に侵入しようとしてる。あるいは乗っ取ろうとしている感じだった。

「な、何だよこれ……！？」

「なんだよ、コイツ……」

「敵か？　撃っていいのか！？」

わけが分からず、銃を構えた日向・音無だったが、

「入ってくる……何か入って来ます、音無さん！！」

直井のそんな声を聞いて、最初に音無が動いた。影を取り払おうと、直井の身体にタックルしたのだ。

ドン！　という衝撃音の後、直井の身体はごろごろと転がって行く。やがてその動きが止まったところで……直井の身体から、影が分離した。

「ちょっ……こっち来るぞ！！」

新たな標的を求めて、影は音無達の方へと近づいてくる。二人はそれを、銃で迎撃した。

パァン！　と短くて乾いた銃声が響くも、敵は動きを止めるだけで、何だかダメージを与えられているのかどうかすら判断が難しかった。

「死ぬのかよこれ！？」

銃を撃ちながら、日向がそんな言葉を洩らしてしまう。やがて当麻が右手で影に触れると……

「……やったのか？」

影は、跡形もなく消え去っていた。

「何だったんだよ……」

「……何が起きてるんだ、この世界に……」

音無と当麻は、影を倒した後で、そんなことを呟いていた。

「日向さん・音無さん・上条さん、三名で迎撃……全員無事です」

屋上から音無達の戦闘を見ていた遊佐が、ゆりに報告する。その連絡を聞いたゆりは、ボソッと呟いた。

『二体目の出現か……「天使」の新たなるスキルと考えるのが一番自然だけど……』

「しっくりきませんか？」

遊佐がゆりにそう尋ねる。ゆりは、言った。

『そうね……』

以降、沈黙が続く。その後で、遊佐の無線機から、こう連絡が入った。

『戦線メンバー総員に通達。今後は単独行動は禁止、最低でも二人

一組で行動。影を「天使」とは別の敵性勢力として対処する。警戒態勢を常に厳とするように』

「了解です」

そう答えた後で、遊佐は尋ねた。

「ゆりっぺさんは？」

『ゆりっぺさんは考えうる可能性を潰しておくわ』

そう告げると、無線はそこで途切れた。

キーンコーンカーンコーン。突然鳴り始めた、呼び出す為のチャイムの音。それを聞いて、焼却炉近くで休息をとっていた音無・日向・直井・当麻の四人は、その声を聞いて、驚いた。

『生徒会長の立華奏さん。今すぐ生徒会室に来てください』

「これ……ゆりっぺの声じゃん」

声の主は、間違いなくゆりだった。どうやら何らかの問題が発生したらしい。……だが、恭介は別の可能性も見出していた。

「ヤバいな……もしかしたら俺達がやってることがバレたのかもしれないぞ？」

「え？」

その可能性は、決してゼロではない。何せユイが消えたのだ。きっとゆりのことだ直ぐに気がついたのだろうと思った。

「それはまずい……行こう！」

音無達は、ゆりと奏の二人の会話の席に、同席することとにした。

そして場所は生徒会室。

「何よアンタ達」

机を挟んで、廊下側に座るのは奏。窓側に座るのはゆり。そして、扉の近くで、音無・日向・直井・当麻の四人が並んで立っていた。ゆりの言葉に、音無が尋ねる。

「傍聴させてくれ」

「元生徒会長代理、現副会長の僕が許可しました」

「何でアンタの管轄なのよ」

「生徒会室ですから」

「……まぁいいわ」

そんなゆりの言葉を聞くと同時に、直井は背中の後ろで親指を立てた。まぁ、その通りだろうと思って彼らは特別何の反応も見せなか

った。

「で、どうなの？　影よ影」

そんな中、ゆりと奏の会話が始まった。議題は……影についてだ。

「知らない」

「貴女がプログラミングしたんじゃないの？」

「違う」

「じゃあバグという可能性もあるわ……」

その点については、否定出来なかった。何せ、いきなりの出現なのだ……。しかも、奏自身はプログラミングしていないという。そうなれば、第三者によるプログラミングか、もしくは何か奏自身が別のプログラミングをした際に発生したバグと考えるのが正しい流れだろう。

「最近プログラミングしたのはいつ？」

「おととい」

タイミング的は、ドンピシャだった。影の出現がつい先日の話。それとほぼ同タイミングでのプログラミングだ……バグという可能性の方が高くなった。

「部屋に入らせてもらうけど、いい？」

無線機を手にしながら、奏に尋ねる。奏は、無言で頷いた。それを確認すると、ゆりは無線機を通じて連絡を入れた。

「竹山君、よろしく」

『了解。後、クライ……』

ゴトッと無線機を置いて、ゆりは竹山との連絡を切った。その後で、奏に尋ねる。

「で、どんなプログラムを？」

「羽根」

「羽根？　羽根をつけたの？　まさか飛べるように？」

「違う、飾り」

「へ？　飾り？」

思わず聞き返してしまったゆり。その中には、一体何故そんなものをプログラミングしたんだという疑問の声も混ざっていた。

「そう、飾り」

「……何で？」

だからそう尋ねるのは自然の流れだった。しかし、音無の中で焦りが生まれる。

「その方が『天使』らしいからだって……」

「だって？　誰に言われたの？」

（ま、まずいな……）

もしここで奏が音無の名前を出したら、音無達がやろうとしていることがばれてしまう。それだけは何としても避けなくてはならない。何か別の答えを用意しようとしていた……その時だった。

「それは僕です」

「え？」

思わず、音無が驚きの声をあげてしまった。何せ、言葉を発したのは、直井だったからだ。構わず、直井は続ける。

「生徒会長としての箔がつくと思い、元生徒会長代理、現副会長の僕がそう提言しました」

「生徒会長に羽根が生えたら箔がつくの？」

そうとは思えないが、あくまでも直井はその意見を突きとおす。

「はい。生徒会長に、羽根。ふさわしいかと」

「……ハァ」

ゆりは、どうやらその言葉を受け入れたらしい。というか、もはや呆れて言葉も出ないと言ったような感じだったが。直井は、そんな

ゆりの様子を見て、またもや背中の辺りで親指を立てるのだった。
そんな直井に、日向はボソッと一言。

「アホだ」

その後も、話は続く。

「しかし、意外に従順ね。冷酷さなんて微塵も感じられない。以前と変わらないように見えるわ」

その通りだろう。何せ奏は、元の奏として起きたのだから。ただ、作戦を遂行する為に、冷酷な方で起きたということにしているだけの話なのだから。

「いえ、冷酷です」

そして、またしても直井からの言葉が挟まれた。

「副会長の僕は……毎日刺されています」

「え、どうして？」

これには思わずゆりも尋ねないわけにはいかなかった。そして直井は、平然と答える。

「機嫌が悪いと会長は近くにある物を刺すんです。副会長という立場上、割と近くにいることが多いのでよく刺されます。今朝も刺されてしばらく腸がはみ出したままでした……ハハッ」

「笑い事じゃねえだろ、それ」

思わず当麻は、嘘だと分かっていてもツッコミを入れていた。だが当麻のツッコミなど無視するかのように、直井はまとめの言葉を続ける。

「今はとても……機嫌がいいようですが」

「……」

ゆりは、特別何か反応を示さなかった。その様子をみて、直井がまたしても背中の方で親指を立てる。

もう一度、日向が呟く。

「……アホだ」

「ハァ……」

呆れたあまりに、音無までもが小さな溜め息をついてしまっていた。

そんな時、無線機から声が聞こえてくる。

『聞こえますか？　応答してください』

それを聞くと、ゆりは無線機を手にとって、

「竹山君ね？　どうだった？」

『バグはみつかりませんでした。特に今回のプログラミングは装飾付けという比較的単純なものです。意思を持って人を襲うバグなど、発生しようがありません。後僕のことはクライ……』

「ほかのプログラムは？」

覆いかぶさるように、ゆりが尋ねる。しばらく無言が続いた後で、竹山は言った。

『パッシブに「Ｏｖｅｒｄｒｉｖｅ」、アクティブに「Ｈａｎｄ Ｓｏｎｉｃ」。以前と同じものです。形状は違いますけど……どうしますか？』

「ん……」

ゆりは、考えるような素振りを見せる。そんな中、音無は心の中で呟いた。

（消させる気か？　だとしたらまた一からやり直しだぞ……）

そして、同時に恭介が何かに気付いた。

「……おい、今銃声がしなかったか？」

「何言ってるのよ。銃声なんて聞こえるはずが……」

ゆりがそう否定しようとしたその時だった。パンパン！　と、乾いた銃声が確かに聞こえてきたのだ。

場所は恐らく外から。

「外からだ！」

外に出て、その正体を探ろうとしてみたら……そこで繰り広げられていた光景は。

「な、何だよあの数……！！」

音無達を襲った影が、何人もの人を囲んで、今にも襲いかかろうとしていた。

そんな様子を見て、音無は奏に言った。

「奏、頼む！！」

「……（コクッ）」

奏は音無の言葉に頷くと、柵を越え、そのまま下まで飛び降りた。その時に、装飾付けにつけた羽根を使って、衝撃が身体に加えられないように、羽ばたく。その様子は……まさしく天使。時折まう白い羽根が、その神秘性をより一層演出していた。音無達は……その姿に魅了されていた。やがて奏は地面に降り立つと、そのまま影の方へと向かって行った。

「！！」

「おわっと！？」

そんな様子を眺めた後で、背後からゆりが勢いよく走ってくる。柵を越えたかと思うと、一つ下のところに飛び降り、そこからさらに下に飛び降りる。そして、地面に降り立ち、そのまま奏の後を追った。

「俺も行くぜ！」

「んじゃ俺も！！」

「音無さん！」

「行くしか無いのか！」

後に続くように、音無と当麻の二人も飛び降りる。日向と直井は、互いの顔を見やった後で、生徒会室から出て階段を使って下まで降りて行った。

「くっ！！」

そこはまさしく戦場。影と戦線メンバーが、それぞれの武器を使用して応戦していた。

「これだけの数、幻想殺しで消せるのか？また再生とか……」

「つべこべ言ってないで早く何とかしろ」

「加勢などいらん！」

「へっ！　まぁそう言うなって！！」

野田と日向が背中合わせになった時、そんな会話が聞こえてきた。その後、二人は別れて、日向は銃で迎撃。野田はハルバードを使っ

て次々と影を倒していく。

「……浅はかなり」

椎名は、素早い動きで影を倒した。

「……」

そんな中、奏は無心で相手を切り刻み続けた。腕から出現している刃は、『Ｈａｎｄ　Ｓｏｎｉｃ　Ｖｅｒｓｉｏｎ５』。奏の様子を見て、銃を撃っていた日向が一言。

「うわぁ……あれ喰らいたくねぇ」

別の場所では、ＴＫが軽やかなステップで影の攻撃をかわしている場面がみられた。

「Ｗｏｈ！　Ｄａｎｃｉｎｇ　ｉｎ　ｓｈａｄｏｗ！！」

避けた後で、影の内の一体に銃口を向けて、

「Ｉ　ｋｉｓｓ　ｙｏｕ」

ドンドンドンドンドンドンドン！！影に向かって銃を乱射。結果、その影は跡かたもなく消え去っていた。

「音無！　後ろからの敵も忘れるんじゃねえぞ！」

「ああ、分かってる！！」

一方で、音無と当麻は、互いの背中を守るように銃を撃つ。そんな中で、ゆりはある光景を目撃した。
それは……ＮＰＣが突然自分達を襲う影へと変貌していく様子だった。

（あれは……？）

その時だった。いきなり何体もの影が何らかの攻撃で消されていった。音無たちは最初奏の攻撃かと思ったが違った。上空から降りてきたのは、悪魔の羽を生やした天使だった。

「あれは……奏？」

「ちがう。あれは……」

当麻達の前に現れたのは、以前倒した赤目の天使だった。

「久しぶりね。幻想殺し。」

「あの時の……何で生き残ってるんだ？」

「それは……アタックスキル『ハンドブレード』」

赤目の天使はいきなり腕から赤い刃を出現させ、当麻に斬りかかった。当麻は右手で防ぎ、そのまま赤目を顔面を殴ったが……

「消えない？」

「ホーリースキル『リザレクション』」

顔面を殴られ、青あざと血が出ていたのが一気になかったことになった。

「何あれ？ＡｎｇｅｌＰＬＡＹＥＲになかったじゃない。」

ゆりが奏に質問すると奏は無表情で……

「知らない。あんなスキルは存在しない。」

と答えた。

「残念ね。私はその娘が使ったハーモニクスから生まれた分身ではなく、人として存在できる天使よ。いえ、堕天使立華要」

要はそう言って、黒い翼を広げ、影を一掃した。そして、当麻の方を見て……

「次はきちんと殺してあげる。」

そう言って、立ち去ったのだった。

## 第３１話　影（後書き）

六甲水「オリキャラの要ちゃんです」

要「あら、いいのかしら？」

六甲水「いいんじゃないの？再戦とさせる予定だったし」

## 第３２話　Ｃｈａｎｇｅ　ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ　前編（前書き）

今回は前編と後編になります

## 第３２話　Ｃｈａｎｇｅ　ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ　前編

しばらくした後に、影は殲滅することが出来た。しかし、その場にいる全員が、結構身体がボロボロとなっていた。

「みんな……無事か……？」

「ああ……何とかな」

音無の問いに、当麻が答える。疲れてはいるものの、誰ひとり欠けることはなかった。

「なんなんだよあいつら。化物かよ」

「あんな不気味な存在……この世界にはいなかったぞ」

日向と野田が、そう呟いていた。

「これは悪夢か？」

「誘い乱れるｃａｒｎｉｖａｌ」

続いて、椎名とＴＫがそんなことを呟いていた。

「この世界に長く居過ぎたのかしら……」

「どういうことだ？」

ゆりの呟きに、音無が疑問符を浮かべた。それに対して、当麻が答

える。

「ゲームとかでよくあるだろ？　永久プレイをさせない為の、無敵モンスター」

答えた後で、ゆりが奏の方を見て言った。

「にしても……まるで味方ね」

「……？」

そんなゆりに、奏は首をかしげていた。

「それにしても、何だよあの要ってやつは……」

日向がいうとゆりがある事を考えた。

「あの天使、いいえ、堕天使はその娘が使うスキルとは違った。攻撃に特化して、さらに自己修復が可能なスキル。悪魔のような力ね」

「一体何が……」

その時だった。

「おーい！　おーい！！」

「！？」

藤巻の叫び声が聞こえる。そして、藤巻は言った。

「高松が……高松がやられちまった！！」

学習棟、渡り廊下にて。藤巻の誘導の元やってきたゆり達は、そこにある物を発見した。それは、レンズの部分が割れているメガネだった。

「アイツのメガネだ……」

それはまさしく、高松のメガネだった。いつも外すことなく身につけている、高松のメガネが地面に落ちていたのだ。

「僕見たんだ。あの影に食われるところを」

「食われるって……？」

音無達は、何のことかさっぱり分からない様子だった。だから音無が、大山にそう尋ねた。大山は、音無の方を向いて答える。

「僕が出くわした時にはもう……全身影で覆われていて……僕も助けようとしたんだ！　でも、どうしようもなくて……！！　最後には、メガネまで外れて……」

今にも泣きそうな声で、大山が言う。その後で、藤巻が呟いた。

「アイツがメガネを落とすなんて、相当だぜ……」

日向は、そのメガネをそっと拾い上げる。そして、大山にその先を

述べるように言った。
すると大山は、
「地面に……飲み込まれていった」
「地面に？」
「……イレギュラー過ぎる」
ゆりが呟いた通りだった。この事態は、明らかに異常事態。普通ならありえてはならないことだった。
（何だ……？　俺達の思惑とは違う意思が働き始めている……一体何が起きているんだ？）
音無は、一人心の中でそう呟いていた。

翌日。ゆり達はとある教室の前に集結していた。理由は一つ。いつものように校長室の中に集まっていたゆり達だったが、そこに野田からのこんな通達がやってきた。
「高松がいたぞ！！」
その知らせを受けて、一同はこうして集まったのだ。授業前ということもあって、生徒の教室移動は黙認されていたので、中に入るこ

と自体は簡単だった。そして、教室の中の廊下側の席に……一般生徒の制服を着た高松が座っていた。

「高松君！」

「高松！！」

思わず全員が高松の所まで駆け足でやってくる。そして、半ば叫ぶような形で日向が言った。

「どういうつもりだ？　みんな心配してたんだぞ！」

もちろん、それは昨日のことだ。しかし、高松本人は何を言っているんだという表情を浮かべて、日向に言った。

「心配？　何をですか？」

「何をって……お前影の化け物に食われたんだろ！？」

もう一度日向は尋ねるが、高松は一向に何を言ってるのか分からないと言ったような表情を浮かべている。

「何を言っているのか、分かりませんが……」

高松は、そう答える。その答えを聞いた日向は、

「自分じゃ覚えていないのか……？」

と、小さく呟いた。そんな時、隣にいた恭介が高松にこう言った。

「影に食われたんだよ、お前は。で、地面に飲み込まれたんだよ。その後……自分がどうなったか、覚えてないか？」

「どうしたも何も……いつものように寮で起きて、学校に来ただけですが……」

（……おかしいな。コイツ、もしかしたら……）

当麻がとある一つの仮説を立てようとしていた。そんな中、日向が言った。

「学校に来る？　そっちの制服に着替えて、授業を受けにきたっていうのか！？」

「ええ、まぁ……」

「消えるぞ！　分かってんのか！？」

日向は、もう限界だった。高松の受け答えの仕方に、苛立ちを覚えていた。しかし高松は、依然として態度を変えることなく、まるで何も知らないかのように尋ねてきた。

「消える？　何が消えるのですか？」

「え？　……あ……」

そう尋ねられてしまっては、日向は何も答えることは出来なかった。ここで、『お前の存在が消えてしまう』と言われた所で、結局は何らかの質問の形で返ってくるだけということはもはや分かりきっていたからだ。

「ヤベェぜコイツ……おかしくなってらぁ。元からおかしい奴だったけどさぁ……」

藤巻が、ボソッとそう呟いた。

高松による質問の嵐が邪魔だと思い、そのことに関しては何も言わないようにしていたのだ。そんな時に、ゆりがこう言った。

「もう十分よ、日向君」

「もう十分って……何が！？」

日向がゆりにそう尋ねようとしたのだが、ゆりは気にせず教室の扉へと向かって歩き出す。その際に、高松が言った。

「すみませんが……授業の邪魔です」

「出ましょ」

最後まで聞かないで、ゆりが教室から出て行く。その後を慌てて追いかける、戦線メンバー達。

「い、いいのかよ！？　ほっといて！？」

「いいから」

日向の言葉にも、ゆりはそう反応を返す。そんな中で、大山はいつまでも高松の隣から動こうとはしなかった。

「……」

「大山君！」

「！？」

話しかけようとしたところで、ゆりに名前を呼ばれる。その声を聞いた大山は、高松のことを気にしつつも、ゆり達の方へと向かって行った。

「……」

ピシャッ。扉が完全に閉まった後、高松は机の中から授業に必要な物を取り出し始めた。その様子は、まさしく……。

「今の問答だけで十分よ……何が起きたか分かったわ」

場所を教室近くの階段に移して、ゆり達は先ほどの高松の状況について話をしていた。そして、すべてを悟ったゆりが、メンバー全員に何が起こったのかを、推測の範囲だが述べていた。

「一体何が…」

当麻がそう言うと……ゆりは、その言葉に……答えた。

「彼……ＮＰＣになっちゃったのよ」

「「「「え？」」」」

驚きの声は、全員からだった。それも当然だろう……いきなり仲間の内の一人が、ＮＰＣとなってしまったなんて言われて、はいそうですかと応えられるはずもなかった。

「おい、ちょっと待てよ……それってどういうことだよ？　……わけわかんねぇ」

だから、日向のような反応は、当然とも言えるだろう。

「ＮＰＣということは……魂がないっていうこと？」

そういうことに繋がる。ＮＰＣとなるということは、この世界においては自分の魂を失うということなのだ。つまり高松は、影に襲われてから魂がなくなってしまったということになる。

「じゃあ……アイツの魂はどこに行っちまったって言うんだよ」

「食われたんだろうな、影に……」

藤巻の言葉に、当麻が答えた。

「それってどういうことだよ！？　何？　アイツは消えることも出来ずに、永遠にここで授業を受け続けて行くということか！？」

「……そういうことになるわ」

ゆりは、特に戸惑うことなく、日向の言葉に答えてみせた。それに対して、他のメンバーはどうしても動揺を隠せずにはいられなかった。

「そんな……それって死ぬよりか酷くね？　永遠にかよ……永遠にここに閉じ込められちまったのかよ？！　何だよそりゃ！　くそっ！！」

ドン！やり場のない怒りを解消する為に、日向は壁を殴る。そんなことで怒りは消えないことは分かっていても、殴らずにはいられなかった。痛みが増していくのと共に、怒りもまた増していく。

「こんなことが起こりうるのか……この世界は」

「これじゃあ……『天使』に消されちまった方がまだマシじゃねえかよ……」

「しかも、影は増殖を始めているようだが？」

野田が呟き、藤巻が悪態をつく。その後で、椎名が状況を説明していた。

「ねぇ、どうすればいいの？　ゆりっぺ！！」

自分が何をすれば分からない大山は、ゆりに向かって叫ぶように尋ねた。……無言の時間が、彼らの間に流れる。

「……他のメンバーにも通達して。今夜、体育館に集まってもらうわ。」

## 第３３話　Ｃｈａｎｇｅ　ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ　後編

そして時間は経過して、夜になった。体育館に集まった戦線メンバー

「まだこれだけいたんだな。戦線メンバー」

当麻は集まった戦線メンバーの数に驚いていた。てっきり校長室にいるメンバーでやっているのかと思っていたが、違ったみたいだった。そんな中、壇上に上がっていたゆりの口が、開かれた。

「この世界に異変が起き始めている。『天使』とは異なる敵の出現。まんまで難だけど、『影』と呼んでいる。『天使』と違って神出鬼没で、無差別に攻撃を仕掛けてくる。影に喰われた者は魂を失い、毎日授業を受けるＮＰＣと化す」

そう前置きを置いた後に、ゆりはさらにこう繋げた。

「現在、無制限で増殖中。原因は不明。打開策も今のところなし。先に遊佐さんに告げてもらったように、集団行動で身を守り合ってもらうしかない」

「「「「……」」」」

彼らは、熱心にゆりの話を聞いていた。そして、ゆりは話題を切り替えるかのように、言った。

「さて、こうした危機に瀕する中、この『死んだ世界戦線』に別の思想を持つ者達が現れ、戦線を新たな道に導こうとしている。その道は、現在のこの世界における危機回避の一つの選択支にも成りえ

る」

「……おいおい、まさか」

当麻は、ボソッと呟いていた。恐らく、当麻の勘が正しければ……。

「なので、そちらの代表として……音無君・上条君。ここで堂々とその思いを語ってもらおうかしら」

「やっぱりか……」

当麻の勘は当たっていた。ゆりには、このことがばれてしまっていたのだ。

「しょうがないか。行ってくる」

「あぁ、そうだな」

……そして、二人は他の戦線メンバーにも、話し始める。この世界が、若者達の命の救済の場所であること。楽しい青春を送ることが出来れば、この世界から卒業することが出来ること。しかし……いきなりそれについて信じろと言う方が無理であった。

「ふざけんな！　いい加減なことを言うな！！」

「そんな都合のいい話があるか！」

「そうだ！　この世界にあってたまるか！！」

否定的な声が聞こえる中。

「あったんだよ」

「え？」

日向が、そう言いながら前に出る。

「ユイは、それを見つけた……俺みたいな人間の屑のまま死んできたヤツでもさ、この世界でそれを与えてやることが出来た」

「僕もです」

すると今度は、直井が前に出て、言った。

「僕は神ですが……それでも音無さんだけが、僕に人の心を取り戻させてくれた。たった一言掛けてくれた……労いの言葉で」

それと同時に、ゆりが言う。

「どの道を選ぶかはみんなに任せるわ」

「……ゆりっぺはどうするんだ？」

メンバーの誰かが、ゆりに尋ねる。するとゆりは、壇上から飛び降りて、こう答えて見せた。

「私？　私はいつだって勝手だったし、貴方達を守りやしないし、あたしがしたいようにするだけよ」

そしてその後で、全員に言う。

「あまり時間はないわ……各自よく考えておいて。以上、解散」

そして、この場は解散となったのだった。

体育館での集会が終わった後。ゆりは音無・日向・直井の三人を呼び出していた。当麻はひさ子に呼ばれて同席することが出来なかった。

「何だ？　話って」

「その子を影の迎撃に当たらせなさい」

「奏を？　何故？」

音無は、ゆりの言葉に対して疑問符を打つ。ゆりは、その理由をこう述べた。

「頭を使って行動させるより、何も考えずに戦わせた方が向いてるわよ。見てた分には」

「見られてたのかよ……」

さすがに影との戦闘中に、奏の動きを見ていない方がおかしかった。

覚えていないとかなら分かるが、仮にもゆりは戦線をまとめるリーダーという立場にいるのだ。一人一人の行動くらい、無意識の内にでも把握するのだろう。

「まっ。ゆりっぺの目は欺けんわな」

日向も、ゆりのそんな部分を認めていて、そんなことを呟いていた。

「でも、奏は俺達の仲間だ。一緒にいるべきだ！」

音無の意見も確かにその通りではあった。奏は仲間として共に影と戦うのだから、一緒に行動していた方が断然安全だろう。しかし、ゆりの考えはこうだった。

「他のメンバーだって、貴方達の仲間でしょ。彼らを守るには、その子の力が必要よ」

奏を見て、ゆりは言う。そして、こんなことを付け加えるのだった。

「我々戦線と長きに渡って戦ってきた、その圧倒的な力がね」

「確かに……『天使』だけにそれは適任だな」

音無は、そう呟いた。……それに対して、ゆりは何言ってるのという表情を浮かばせながら、平然と言ってのけたのだった。

「別にその子、『天使』じゃないわよ？」

「……へ？　今なんつった？」

ゆりの言った言葉が信じられなくて。音無は思わず聞き返していた。だが、ゆりはもう一度言う。

「別にその子『天使』じゃないわよ。私達と同じ人間よ。気付いてなかったの？」

「「えええええええええええええええええええええええええ！？」」

思わず、日向と音無は、声を合わせて驚いてしまった。何せ、リーダーであるゆりからの、まさかの奏は『天使』じゃない発言。メンバーとして驚かないわけにはいかないだろう。

「神は……何でもお見通しでしたが」

「……動揺してんじゃねえかよ」

すまし顔で言った直井だったが、その足は確かに震えていた。震えている足を見て、日向がそうツッコミを入れていた。

「……っと、お前！　『天使』じゃねえの？」

音無は、奏の元に駆け寄って、尋ねていた。奏は、首を小さく縦に頷かせた後に、答える。

「うん。私は『天使』なんかじゃない。初めて会った時に私はそう答えたはずなんだけど……」

「……あ」

言われて、音無は初めて奏と遭遇した時のことを思い出す。あの時、確かに奏は言っていた。『私は「天使」なんかじゃないわ』と……。

「ああ！　本当だ！！」

思い出した音無は、思わず頭を抱えてしまった。そんな音無を見て、日向が一言。

「色々あったからなぁ」

「お前達のせいだろ！？」

確かに、元を正せば、色々とあることないこと吹き込んだゆり達のおかげで、今まで音無は勘違いをしてきたのだろう。そして、新たなる疑問が出てきた。

「じゃあ奏は何故ここにいる？　生徒会長なんてしていて、何故消えなかった！？」

その質問に対して、腕を組んだ状態でゆりは答えた。

「彼女なりの、ここにいる理由があるんでしょ」

「ああ、そうか……」

この世界には、未練や後悔を持っている人がやってくるらしい。その未練さえ断ち切れば、無事にこの世界から卒業出来る……確かこの世界はそういう仕組みだったはずだ。奏も、その例外ではなかったというだけの話だろう。

「じゃあ俺達と同じように、なにかを抱えて来てるんだな……ソイツも解消してやらないとな……な？」

奏の頭を優しく撫でつつ、音無は言う。言われた本人である奏は……どこか複雑そうな表情を浮かべて、頷いていた。

「……で、ゆり。お前はどうする？」

奏の頭より手を離して、音無はゆりに尋ねる。するとゆりは、

「確かめてみたいことがあるの」

「戦うのか？　影と」

「場合によっては」

音無の言葉に、そう答えるゆり。そして音無は、引きとめる言葉を言う。

「一人じゃ危険だ！」

「だって仕方ないじゃない。他のみんなには選ぶ自由を与えたんだから」

「お前についていく奴もいるはずだ！」

「考える時間は必要よ……大事なことだもの」

複雑そうな表情を浮かべて、ゆりが言った。

「そりゃ……そうだけど」

そう言われてしまっては、さすがに音無も反論を返すことが出来なかった。

「戻って来た時、みんなが消えて、無事この世界から去っていたら……貴方のおかげだと、思っておくわ」

「そんな……俺は待っている！」

そう訴える音無。しかし、ゆりは笑ってこう言った。

「馬鹿ね……一人で待ってちゃ、影にやられちゃうわよ。そうなる前に、貴方もさっさと去りなさい、この世界から……。私のことは気にしないで」

「いや……気にするよ」

日向が、ゆりに歩み寄りながら、言う。ゆりは、そんな日向の言葉に、少しばかり驚いていた。そんなことは気にせず、日向は言う。

「いきなり何言ってるんだよ……二人から始まった戦線じゃねえか。長い時間一緒に過ごしてきたよな。だから、終わる時も一緒だ。俺はお前を置いていかない」

「相変わらず貴方馬鹿ね……感情論じゃ何も解決しないわよ……」

ゆりがそう呟いたその時だった。

「敵襲！　敵襲だぁ！」

「「「！？」」」

戦線メンバーより伝えられる、そんな知らせ。それを聞いた後、ゆりは奏に向かって言った。

「……奏ちゃん、よろしく」

「……」

言われた奏は、両腕から刃を出して、戦線体勢に入る。それを見たゆりは、

「じゃ、また会えたら会いましょ！」

そう言って、その場から立ち去ろうとする。そんなゆりの名前を、日向が叫んだ。

「ゆりっぺ！」

「……」

言われたゆりは、足を止める。そして、小さく呟いた。

「……酷いあだ名。けど、そのおかげでみんなに慕われたのかもね。ありがと」

「あ……」

そしてゆりは、走り去って行った。音無達は、そんなゆりを、ただ

見送ることしか出来なかった。

当麻はひさ子に呼び出され、ひさ子の後を付いて行くとそこには関根がいた。

「お前ら……」

「悪いけど、私たちはここで消えるから。」

「上条さん。みゆきちの事お願いしますね」

「……あぁ、分かった。」

当麻は入江を守ることを決意し、ひさ子は当麻に握手を求めた。

「じゃあな。上条」

「あぁ、戻ったらガルデモのファンとしてライヴに行くからな」

「はは、そうだな。」

ひさ子は消え、関根は……

「上条さん。お願いがあります」

「ん、何だ?」

「目をつぶってください」
顔を真赤にしながら言う関根。当麻は言われたまま目をつぶると……
「私のファーストキスあげます。」
唇に柔らかい感触を感じて、目を開けるとそこにはもう誰もいなかった。
「……守ってやるからな。お前らの世界を……」
当麻は右手を握りしめながら決意をした。

別の場所では……白髪の少年が一人大量の影を見ていた。
「ここはどうやら、天国でもないらしいな。地獄でもねぇ。一体……」
そう言って、首に手をやると違和感を感じた。
「これは……どうやらこの世界では俺は全力でやれるみたいだな。」
少年はそのまま影に向かっていった。

## 第３３話　Ｃｈａｎｇｅ　ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ　後編（後書き）

次から最終決戦です。

## 第３４話　Ｋｎｏｃｈｉｎ'　ｏｎ　ｈｅａｖｅｎ'ｓ　ｄｏｏｒ　その１

まだ校舎内に残っていた音無・日向・直井の三人。その理由は、まだこの世界の残っている戦線メンバーを成仏させる為だった。先ほども、戦線メンバーと出会って、成仏させた後だった。

「下々共のお見送り、ご苦労様です」

「お前絶対性格破綻してるからな！！」

「破綻などしていない！　神に向かってなんてことを言うんだ！」

直井の言葉に、思わず日向がツッコミを入れていた。そんな二人に、音無が言う。

「馬鹿やってないで行くぞ！！」

だが、その時だった。ガシャン！！　とガラスが割れる音がしたと思ったら……三人の背後に、ある物が現れてきた。確認せずとも分かった……それが間違いなく、影であると。

「うわぁあああああああああああ！！」

三人は、校舎の外へと出る。だが、そこで……あり得ない光景を見た。

「何だこの数は……！？」

直井がそう呟いてしまうのも無理はない。何せ、校庭には、敷き詰

められていると言っても過言ではない数の影が現れていたのだから。

「どうなってるんだよ……ＮＰＣは！？」

「もうこの辺じゃあ……コイツらしかいないんじゃ……！！」

日向の言葉に答えるように、直井が呟く。

「俺達のやろうとしていること……分かってるんじゃねえだろうな？」

音無は、銃を構えつつそんなことを呟いた。だが、その影達は……地面を蹴って、上空から音無達に襲いかかってきた。さすがにこの攻撃は予測していなかっただけに、音無達は動くことが出来ずにいた……。その時だった。ザシュッ！　という切断音が聞こえたかと思うと、その影は何者かによって斬られていた。そして、現れてきたのは……。

「フン……下衆が」

「野田……！」

直井が、その名前を呟く。そこにいたのは……間違いなく、ハルバードを手にした野田だった。

「さすがだぜ野田！！」

銃で影を撃ちながら、日向は野田に向かって言う。音無は、野田にこう尋ねた。

「俺の為に戦ってくれるのか？」

「馬鹿なことを言うな！　俺が動くのは、ゆりっぺの助けになる時だけだ！」

対して、野田も叫び返した。それを聞いた日向は、

「へぇ～なるっ！　お前もとことん一途な奴だな！」

しかし、そう言っていた日向の背後にも、影が……！！だが、この影もまた、突如として発せられたドォン！　という銃声と共に、消え去った。そして、その先に……校舎の窓から身を乗り出して、銃を構えていたのは……。

「大山！？」

「何の取り柄もない僕だけど……ここで活躍出来たら、神様もびっくり仰天かなって！」

笑顔で、銃を撃ちながら大山は言う。

「ああ、見返してやれ！」

どんどん役者が揃っていく。そして、次に現れてきたのは……。

「俺も忘れてもらっちゃ困るぜ……このままいなくなっても、誰も気付かなそうだからな！」

そう、藤巻だった。藤巻の戦闘スタイルは、片手に銃を持ち、片手に刀を持つ、なかなか凄いスタイルだった。普通の人間なら、片方

ですら扱うことは難しいのに、それを両方使う。なかなか出来ることではなかった。そんな中、また新たな人物が現れる。

「Ｃｏｍｅ　ｏｎ　Ｃｏｍｅ　ｏｎ　Ｃｏｍｅ　ｏｎ　Ｃｏｍｅ　ｏｎ　Ｃｏｍｅ　ｏｎ　Ｃｏｍｅ　ｏｎ！！」

華麗な動きで敵を倒しながら、銃を手にしたＴＫが現れてきた。そして、目の前の影に向けて銃口を向けると、

「Ｋｎｏｃｈｉｎ'　ｏｎ　ｈｅａｖｅｎ'ｓ　ｄｏｏｒ」

そう告げて、銃を撃った。

「コイツは役者が揃って来たな……！！」

音無は、集まってくるメンバーを見て、そう呟く。すると、屋上の方から、

「そいや！」

「！？」

掛け声が聞こえたかと思うと、影が地面に向かって投げ飛ばされて、消え去っていく姿が見えた。一体だけではない……二・三体はいるだろう。そして、その人物も下に降りてきて、そして一言。

「なんだこの世界は！？　……何が起きたって言うんだ！？」

「……ていうかお前に何が起きたんだよ」

そこにいたのは、筋肉質だが、かなり痩せている青年だった。しかし、少なくとも彼らは一度も見たことがないと思われる人物だった。

「誰だお前」

藤巻がそう尋ねると、

「うむ……しばらく山籠りしていたのだが、食い物が少なくてな」

そね一言だけで、十分だった。その人物を特定するには、十分過ぎる一言だった。

「お前……松下五段かよ！？」

そう。この人物はまさしく松下。山籠りしていた途中で、どうやらここまで痩せてしまったらしい。あまりの激やせぶりに、一同は驚きを隠せなかった。

「激やせしたな……身体大丈夫か？」

音無が、松下の身体を労るように言う。それに対して松下は、平然とこう言ってのけた。

「おう。むしろキレがいい。もしかしたら今なら、百人組手も行けるかもしれねぇぜ！」

「それ空手じゃねえか……何にせよ助かるぜ……何せこれだけの軍勢だ」

日向がそう呟く。いつの間にかメンバーは、真ん中に集結していた。

そして……

「おらぁぁぁぁぁぁ」

数十体もの影が一気に消えていく。そこにいたのは入江と遊佐を守る当麻の姿だった。

「おぉ、ナイトは両手に花ですな」

と日向がちゃかすと、

「冗談言ってる場合じゃないだろ」

「ギルドって……そりゃ潜伏するには絶好の場所だけど……敵地よ。私達の根城よ」

銃を抱えて歩いているのは、ゆりだった。何故彼女がギルドに潜入しているのかと言うと、音無達とのやりとりとの後、ゆりはコンピュータ室に向かったのだった。理由は、影の出現が、何者かがＮＰＣを影に変換するプログラミングをした為だと考えたからだ。そこで、新型のパソコンを設置している人物から、パソコンが盗まれているとの情報を得た。ゆりは、何処からパソコンを持ち出しているのかを考え……偶然床がズレるのを発見した。そして、そこを破壊してみたら……案の定地下へと続く階段があったのだが、そこがまたギルドだったという話だった。

「……！」

そしてそこにも、やはり影はいた。

「そりゃいるわよね……ウジャウジャと！」

影を確認すると、ゆりは銃で撃ち始めて……しばらくした後に、悟る。

「少ない……？　やっぱりハンドガンだけじゃ無理か……」

「ゆりっぺ」

その時。何者かの声が聞こえてくる。その声のした場所をゆりが振り向くと、そこにいたのは……。

「チャー！」

そう……チャーだった。

# 第35話　Knocchin'　on　heaven's　door　その2

連絡橋。音無達は、そこまで到着していた。しかし、影の数は増していくばかりだった。

「くそっ……キリがない！」

思わず、音無はそうボヤいていた。その時。

「音無さん、下を見てください！」

「下……？」

下を見てみれば、そこにはどんどん数を増して上に上がっていく影の姿があった。

「どんどん数が増えるな……本当にいつになったら収まるんだか」

「音無、後ろ！」

「！？」

当麻が呟いた後で、日向が音無に向かって叫ぶ。慌てて後ろを振り向いてみれば、そこには今にも襲い掛かってくる影の姿があった。だが、その影は音無を襲うことなく、跡形もなく消え去った。

「百人だ……」

「え？」

自然と背中合わせになるような形で、少女……椎名が呟く。音無は、思わず聞き返していた。椎名は言葉を続ける。

「百人……戦力が増えたと思え」

「え……」

「……分からないのか？」

そして、椎名は言った。

「お前の意思は引き継ぐ……！！　行け！！」

「椎名……ああ、後は任せたぞ！」

銃を数発撃った後に、音無は日向達に言う。

「ついてこい、日向！上条！！」

「ああ！」

「おう！」

「あ……どこ行くんですか、音無さん！」

返事を返す日向と当麻に、その後をついて行く直井。当麻は遊佐と入江の手をしっかり握ってるが……その時、何体もの影が一つに集まり巨大な影となった。

「おいおい、こんなのアリかよ」
音無はそう呟くと……その影がいきなり爆発した。全員が何が何だか分からなかった。だが、そこには白髪の少年がいた
「てめぇ、ここにいやがったか」
「「お前は……一方通行」」
当麻と音無はその少年を知っていた。まさかこの世界で出会えるとは……
「こんな所で油売ってんじゃねぇよ。さっさと戻るぞ」
一方通行は当麻の胸ぐらを掴む。だが、影が一斉に襲いかかるが……
「てめぇらも邪魔をするな」
と、攻撃してをすべて反射で吹き飛ばした。そして……
「さっさと親玉を潰せよ。そのあとたっぷり殴ってやる。」
「殴られるのはお前だよ。一方通行」
「言ってろ。」
二人はそう約束をし、当麻達は先に言った。そして残された一方通行は……
「わらわら集まりやがって、一気にケチらしてやるよ。」

黒い羽を発現させ、大量の影を潰すのだった。

「話はギルドの底まで伝わってきた……今は全員が地上を目指している」

「……そう」

チャーからの話を聞いて、ゆりは柔らかい表情で呟いた。

「これを持っていけ！」

そう言って、チャーはゆりに向かって何かを投げる。……それはアサルトライフルだった。

「あ……ありがとう！」

これだけの数の影を、ハンドガンだけで乗り越えられるとは考えていなかったゆりにとって、これは大変ありがたいことだった。

「戦いが……終わるのか？」

チャーは、ゆりにそう尋ねる。ゆりは、こう言葉を返した。

「ええ……終わるわ」

「そうか……」

納得したような表情を浮かべて、チャーは呟く。その後で、更に言葉を付け加えた。

「なら俺達も解散だ……お前達が戦ってきたからこそ、俺達も頑張ってこれたんだからな」

「……今までありがとう。貴方がいなければ、何も始まっていなかったわ」

校長室占拠の時のことを思い出して、ゆりは言う。チャーは、自嘲するような笑みを浮かべて、答えた。

「いや……一人の馬鹿がいただけだ」

そして最後に、短く一言。

「……じゃあな」

そして、そこには誰もいなくなっていた。ゆりは、しばらくその空間を見つめた後に、

「……行こう」

アサルトライフルを構えて、前へと歩みを進めた。

# 第36話　Knockin' on heaven's door その3

「……行きすぎたか」

呟くゆりが今現在いる場所は、オールドギルド。ギルド爆破後に、武器製造の拠点地となった場所である。

「つかの間の休息ね……」

ゆりはそこで、休息をとることにした。壁に寄りかかり、そしてしゃがみ込む。……暗い空間の中、ゆりはそこで考え事をしていた。

（『天使』……ううん、奏ちゃんも頑張ってるかな）

心配するのは、奏のこと。かつては敵だと勘違いしてきたその少女のことを、ゆりは気にかけていたのだ。

（もっと早く気付いてあげていられてればよかったかな……もしかしたら、仲良くやっていられたかもしれない。女の子同士なんだから。こんな世界でも、似合う服とか探してあげることとか、出来たかもしれない……）

そう心の中で呟いた後で、今度は口に出して呟いた。

「でも、結局は無理か……私は、神様を許せない……だから……」

脳裏に思い浮かばれるのは、自分が大切にしていた妹弟の姿。そして、戦線メンバーや呟くのは、神様を許せないというセリフ。しばらくの間……彼女は目を閉じる。

そうしている間、頭の中で、妹弟達が笑っているのだった。だが、そんな時間は早くも崩れ去る。

「……！？」

気付けば、自分が入ってきた所には影が集結していた。

「くそっ……！」

それは何に対しての悪態か分からなかった。分からなくても構わない。今はその影の存在が邪魔だった。進行する上で、完璧に邪魔な存在。だからゆりは、銃口を向けて、銃を乱射しながら……。

「消えろ……消えろ、消えろ、消えろ、消えろ！　消えろ！！　消えろぉおおおおおおおおお！！」

ダダダダダダダダダダダダ！！マシンガンから放たれるその弾は、影を確実に消していく。だが、前方の敵に囚われ過ぎていたゆりは、背後からの敵に気付くことが出来なかった。

「！？」

そしてゆりは、そのまま……。

「……あれ？」

気付けば、ゆりは教室の中にいた。何かを考えていたような気がし

たのだが、一向にそれが思い出せずにいる。隣からは、親友の少女が気軽に話しかけてきていた。

「ねぇってばゆり！　何やってたのよ……授業中に」

実は先ほど、ゆりはボゥッとしてたのが原因なのか。黒板の字をノートに写すことをすっかり忘れていて、思わず絶叫してしまったのだ。そして、恥をかいてしまっていたのだ。

「何って別に……単に考え事よ」

ゆりはそう返事を返し、左手に頬を乗せて、窓から外を見る。そこには……何かが戦っているような姿が一瞬見えたが、瞬きした瞬間に、それも消えた。

（今のは……何？）

ゆりの中で、そんな疑問が生まれる。そんなゆりに、少女は言った。

「考え事？　授業が上の空になるような……もしかして恋？　恋ね！！」

どうやらそういうことに多大なる興味を抱くらしいこの少女は、ゆりが考えていることを壮絶に勘違いして、勝手に盛り上がりを見せていた。そんな少女の様子を見て、ゆりは言う。

「ば～か。出来るもんならしてみたいわよ」

「う～ん……藤原君ならゆりに脈ありだと思うけどな……」

腰を左右に振りつつ、その少女はゆりに言う。そして、

「あ、ほら藤原君一人でいるよ……藤原く～ん！！」

「こら！　こんな！！　……」

少女の口を塞ぐゆり。しかし、肝心な少女の名前を思い出せずにいた。

「……って、アンタ、誰だっけ？」

「え？　ひとみじゃん」

「……ああ、ひとみか」

名前を聞いて、ゆりはようやっと納得したようだ。少女――――ひとみは、そんなゆりの目を直視して、言う。

「そうよ。どっか変になっちゃった？」

「……そうかも」

「ふ～む、それはね～」

「恋煩いとか言うんでしょ」

「正解♪」

「席に戻りな」

呆れた様子で、ゆりはひとみに言う。ちょうどチャイムが鳴り、教師が入ってきたのを受けて、ゆりはそう言ったのだった。そうして授業が始まり、いつも通りに行われる。そんな中でも、ゆりは窓から外を眺めていた。……そして、心の中で呟く。

（何やってるんだろう、私……どうして、こんな所で私は、授業を受けて……）

「……中村、どこ見てるんだ？」

その時、教師がゆりのことを呼ぶ声が聞こえてくる。だが、当の本人は上の空なのか、その声が耳に入ってきていなかった。

「お～い、ゆり～」

「え？」

ひとみに声をかけられて、ようやっとゆりは気付くことが出来た。

「じゃあ中村、そのまま次のページの頭から読んでみろ」

「……」

ガタッと椅子を鳴らし、無言でゆりは立つ。……教科書を読めと言われたのに、ゆりは一向に読もうとしない。

「ん？　どうした？」

教師がそう尋ねると、ゆりは何だか悲しげな笑みを浮かべるのだった。そして、言った。

「……凄く幸せですね」

「あ～……何を言ってるんだ？」

教師から言わせてみれば、わけのわからないセリフだった。しかし、ゆりから見れば、とても意味のある言葉。ゆりは、さらに言葉を続ける。

「凄く幸せな風景……私にはまぶしすぎる……みんなこんな時間に生きてるんだ。いいですね……羨ましいです」

ゆりはすでに死んでいる。その事実はもう変えられない。だから、ここでこうして授業を受けて、楽しい時間を親友を過ごして……。そんな当たり前の日常を過ごしている彼らが、羨ましいと思った。

「ここから消えたら……やり直せますかね……こんな当たり前の幸せを、受け入れられますかね……」

ゆりは、さらに言葉を続けた。

「記憶も失って、性格も変わって……なら出来ますよね？　でも、だったら生まれ変わるって何？　それはもう私の人生じゃない……別の誰かの人生よ」

胸に手を当て、ゆりはさらに言った。

「それはここに、たった一度しかない……これが私の人生。誰にも託せない、奪えもしない人生……！　押し付けることも、忘れることも、消すことも、踏みにじることも、笑い飛ばすことも、美化す

ることも、何も出来ない……！！　ありのままの、残酷で、無比な、たった一度の人生を受け入れるしかないんですよ！！」

いつの間にか、教壇に立つ教師も。周りで授業を受けていた生徒達も、みんないなくなっていた。そんな中、たった一人、ゆりは言う。

「先生……分かりますか？　……だから私は戦うんです、戦い続けるんです。だって、そんな人生……一生受け入れられないから！！」

机をバン！　と叩いて、ゆりは叫ぶ。直後、教室の窓がすべて割れて、そこから入ってくる……影の軍勢。ゆりの身体はいとも簡単にその中に飲み込まれて行く。もがいていると、

「手を伸ばせ！！」

「！？」

聞こえてくる、一人の少年の声。その声に応えるように、ゆりは、右手を伸ばした。

# 第37話　Knockin' on heaven's door その4

「ハッ！？」

ゆりは、目を覚ました。すると、自らの右手を掴んで優しげにほほ笑む音無と、その横ではにかんで見せている日向。そして、そんな日向の隣で目をそらす当麻の姿と遊佐と入江が少し怒っている姿があった。日向は言う。

「はっは～ん！　間に合ったようだな」

「音無君、日向君……上条君…遊佐さんに入江さんまで？」

ゆりは、5人の名前を言う。その後で、遠くにいた直井が、

「僕もいるんだが……」

と、小さく呟いていた。

「戻って……これた……」

ゆりは、小さく呟く。恐らく、『戻って来れた』とは、あの授業風景の中から……つまり、NPCから元に戻れたということを意味しているのだろう。ゆり自身がNPCとなっていたのかどうか。あるいはあの光景が単なる夢にしか過ぎなかったのかどうかは不明だ。しかし、いずれにしろゆりは、あの時間を放り捨て、こちらの世界を選択したのだ。すべてを忘れる道よりも、それを受け入れて戦う道を選んだのだ。

「お前の声が……いや、お前の想いが爆発してるって、奏がここまで連れてきて」

「かなで、ちゃん……？」

音無の言葉に、ゆりがそう呟くと。奏は音無の背後から顔をひょっこりと出して、頷いて見せた。

「……そう、みんなのおかげね。助けられちゃった」

笑みを浮かべて、ゆりは小さくそう呟く。その後で、何かに気付いたような表情を浮かべて、ゆりは言った。

「でも、どうして貴方達はここにいるの？」

すると、当麻が答えた。

「託してきたんだよ。俺達の想いを、引き継いでくれた奴らにな」

当麻は、戦線メンバーの顔を思い浮かべながら、言う。今頃は戦っているだろう彼らを。

「それで……私を助けに来たの？」

「一緒に戦いに来たんだよ」

「ふっ……同じじゃない」

「ま、そうだけど。ゆりっぺが心配だからなぁ」

音無の言葉を聞いて、ゆりがその言葉はまったく同じ意味を持つと指摘する。その後で、日向がそう呟いた。そして、奏がゆりにこうアドバイスをする。

「とりあえず、服整えたら？」

「え？」

言われて、初めてゆりは、自分の服がかなり乱れていることに気付く直井と当麻を除く男二人は、そんなゆりの姿をマジマジと見つめていた。それに気付いたゆりは……顔を赤くして、慌てて服を整え直す。

「駄目ですよ。上条さん」

「はい、ダメです」

「頼むから抓るな」

そして、整え終えた後で、地面から立ちあがり、そして彼らに言った。

「さぁ、行くわよ！！」

「お、おう……」

返事を待たずに、梯子を登り始めるゆり。そんなゆりを見て、日向が一言。

「ったく、相変わらずのペースだな」

「けど、こっちの方がゆりらしくて、いいじゃねえかよ」

「……そうだな」

当麻の言葉に納得する日向。そして音無達も、ゆりの後について、梯子を登り始めるのだった。

そして、場所はギルド連絡通路地下２０階。八人は、岩陰に隠れて……大量に敷き詰められている影を眺めていた。音無は、そんな影の軍勢を見て、言った。

「なぁ……何かあそこを守ってる気がしないか？」

「まぁ奇遇ね。私もそう思うわ」

ゆりも、音無の言葉に対してそう返した。しかし、いくらその先に相手が潜む場所があったとしても、入口いっぱいに敷き詰められている影を倒さない限りには、先に進むことなどとても出来そうになかった。

「しかし、あんなの絨毯爆撃でもしないことには……！！」

日向が、そう呟く。確かにその通りだ……これだけの数を一体一体丁寧に相手にしておくと、どう考えてもやられるのがオチだった。だが、そんな日向の言葉を聞いたのにも関わらず、

「じゃあ行ってくる」

「え？」

奏は一同に向かってそう言うと、一人影の軍勢の中に飛び込んだのだった。

「お、おい立華！！」

「奏ちゃん！！」

当麻とゆりは、ほぼ同時に奏の名前を叫ぶ。奏は、影の軍勢の中に飛び込むと同時に、両足ですでに何体かの影を倒していた。しかし、その周りにも影が……！！

「愚かな……自殺行為だ！」

「……いや、待てよ」

「え？」

直井が呟いた後に、音無が何かに気付いたかのように呟く。瞬間……あり得ない光景が広がっていた。

奏を中心にして、謎の爆発が起きたような感じが見受けられた。同時に、一気に影は消滅。入口を塞いでいた影も、ほぼ全部消え去っていた。

「よしっ！」

そんな光景を見て、音無は思わずガッツポーズを見せる。

そして、影がいなくなったその場所にて、奏が音無達に向けて左手を突き出し、親指を立てていた。恐らく、もうこっちに来てもいいとの合図なのだろう。

「行きましょ」

「おう！」

ゆりの言葉を聞いて、当麻が答える。音無達も、答えずともゆりの後をついていく。だが、奏の所まで向かったところで。

「なっ！？」

次の影が、もう出現していた。それも、数で言えば先ほどと同等ぐらいだ。

「もう湧いてきやがった！」

日向が、思わずそう叫んでしまう。音無は、少し考えた後で、ゆりに言う。

「ゆり、先に行け。俺達はコイツらを片づける……！！」

「……ええ、お願い」

ゆりは、音無達を信じることにした。影との戦闘を音無達に任せ、ゆりは一人、最終決戦の場へと駆け抜けて行くのだった。

「さて……コイツらを殲滅するぞ！！」

「その前に、私と戦いましょ、幻想殺し」

影の中から現れたのは立華要だった。当麻は遊佐と入江を下がらせ、構えた。

「いい加減消えろよ。」

「残念ね。消えるわけには行かないの。」

「なら、お前という幻想がなくなるまで殺し続ける」

「やってみなさいよ。幻想殺し。あんたの幻想をぶち殺すわ。アタックスキル『ハンドブレード』」

「きやがれよ。幻想」

二人がぶつかり合ったのだった。

## 第37話　Knockin' on heaven's door その4（終）

次はＥＶＩＬＰＬＡＹＥＲの説明をやりたいです。まだまだ続きますよ

# 第38話　Knocchin'　on　heaven's　door　その5

「馬鹿にしてる……」

ゆりは、思わず呟いてしまっていた。目の前にある扉には、はっきりと、『第2コンピュータ室』と書かれたプレートが貼られていた。先まで進んだゆりは、この扉があまりにも馬鹿馬鹿しくて、むしろ怒りすら覚えてしまっていた。だが、この部屋に神を演じている者がいるということになる。

「……！」

覚悟を決めて、ゆりは扉を開いて、中に入る。ギイッという鈍い音を立てて、その扉は開いた。中には、大量のパソコンがところ狭しと敷き詰められていた。

「どれだけ盗んだのよ……」

大量にあるパソコンの中を歩きながら、ゆりは呟く。だが、パソコンの画面を見て、パソコンの数よりも別のことを考え出した。

「……これは」

パソコンの画面では、何かのプログラムが動いている様子が映し出されていた。人間の形をした何かが、ゆり達を襲った影へと変わっていく。そんな映像が映し出されていた。

「間違いない……」

ゆりが睨んでいた通りだった。相手は奏と同じく、何らかなソフトを利用して、ＮＰＣを影の怪物へと変化させていたのだ。そして、神を演じていた……。

「よく辿り着けましたね」

「！？」

その時、突如として何者かの声がゆりの耳に入る。その声は、男性のものであり、歳で言えば……学生だと思われるような声だった。ゆりがその人物の声が聞こえてきた方を振り向いてみれば、二台パソコンの前に座っている、一般生徒の制服を着た少年が、そこにいた。そんな少年に、ゆりは言う。

「馬鹿にしてるの？　表にこれ見よがしにプレート貼ってあったじゃない」

「ここは学校ですからねぇ」

「可笑しな価値観をお持ちのようで」

「いえ、それがルールなんですよ」

話していて、ゆりは思う。目の前いる少年は、『人間』ではない、と。その後で、『ルール』という言葉を聞いて、呟く。

「この世界の……神の……」

「神……存在するか否か。実に深淵なテーマです。興味深い。が、それを追究する術は僕にはない。ただ決まり事に従うだけ」

「……貴方もプログラミングで動いているのね」

少年の言葉を聞いた後で、ゆりが自らの考えを確かなものにするために、少年に尋ねる。少年は、相変わらずの笑顔でこう答えた。

「お察しの通りで」

「誰がこんなことをしたの？」

「名前を言っても無意味でしょう……遠い昔の人です。そして、決して会うことが出来ない人です」

確かに、それほど昔の人物なら、名前を言っても無駄だ。だが、神かどうかは分からなかった。ゆりは一旦近くにあるパソコンの画面を覗いた後に、

「『Ａｎｇｅｌ　Ｐｌａｙｅｒ』……このソフトは何なの？」

奏の部屋のパソコンにもインストールされていた、そのソフト……『Ａｎｇｅｌ　Ｐｌａｙｅｒ』。そのソフトが果たして何なのか……ゆりはそのことを少年に尋ねた。すると少年は、相変わらずの笑みを浮かべて、こう答えた。

「知っての通り、この世界のマテリアルを作成、改変出来るソフトです」

『知っての通り』とは、奏の例を受けてのことなのだろう。

「何でそんなことが出来るの？」

更にゆりはそう尋ねた。しかし、少年は首を横に振って、

「さぁ？　僕は開発者ではないので……」

目の前にいる少年は、プログラミングで動いている存在だ。それ以前に、そのソフトの開発者ではない。だから、知らなくて当然のことだった。その後で、少年は更にこう付け加えた。

「でも、貴女達も土から武器を製造している。同じことでしょう」

（結局、同じルールに則ってるのか）

少年の言葉を聞いた後で、ゆりは心の中でそう呟く。そしてゆりは、満足な答えが返ってこないことを分かっていながらも、少年にこう尋ねた。

「そのソフトの製作者は……神になりたかったのかしら？」

「さぁ？　僕にはなんとも……」

やはり、答えはそんな曖昧な物しか返ってこなかった。そして、これ以上の無駄話は不必要と考えたゆりは、

「じゃ、時間がないから本題に入りましょ」

そう言って、ゆりは本題に入った。

「貴方は何が起きたらこうするようにプログラミングされているの？」

「プログラミングの内容は分かりません」

「じゃあ聞き直すわ……貴方にとって世界に何が起きたの？」

ゆりがそう聞き直すと、少年は特に躊躇った様子も見せずに、こう答えた。

「二つのイレギュラーが発生しました。一つは世界に……『愛』が芽生えました」

瞬間。無数に設置されているパソコンの画面に、ハートマークみたいなものが映し出される。その言葉を聞いたゆりは、

「え？　愛？」

思わず少年にそう聞き返していた。少年は、答える。

「そう、愛です。あってはならない、この世界で……」

（そうか……その通りだ）

ゆりは気付く。この世界で愛を覚えたら、その人物はすぐにでも消えてしまうはず。だが、もしそれが芽生えてしまったら……。

「愛が芽生えてしまうと……ここは永遠の楽園に変わります。しかし、この世界はそうなってはいけない。何故ならここは、卒業していくべき場所だからです」

「そう思った人がいたのね」

「ただ……誰かの為に生き、報われた人生を送った者が、記憶喪失で紛れ込んでくることが希にある。その時にそういうバグが発生するのです」

「そしてそれが……そのソフトのプログラマー」

ゆりがそう言うと、少年は驚いたような表情を浮かべて、言った。

「驚きました……ご明察です」

「その人は、この世界のバグに気付き、修正した……それが影を使ってのＮＰＣ化、つまりリセット……」

「はい」

ゆりの仮説を、少年は肯定する。それが肯定されたということは、つまり……。

「じゃあ何？　ＮＰＣの中には、私達みたいなのが他にもいるってこと？」

ゆりのそんな質問に、少年は表情を変えることなく答えた。

「います、一人だけ」

「可哀想に……」

ゆりは、その一人に対してそんな言葉を呟いてしまっていた。だが、

その後の少年の言葉を聞き、

「そのプログラマーです」

「え？」

ゆりは、心底驚いたような表情を見せていた。構わず、少年は言葉を続ける。

「彼は待ち続けました。愛を知り、一人この世界を去って行った彼女を」

「そんな……もう一度出会える可能性なんてない！」

ゆりの言う通り、そんな可能性など皆無に近かった。その女性が、こんな死後の世界に来るなど、あり得ない話のように聞こえた。だが、少年はそれを弱めにだが否定した。

「天文学的数字ではありますが、ゼロではありません。しかし、彼女を待つ時間はあまりに長すぎ、彼はもう正気ではいられなかった……だから、自分をＮＰＣ化するプログラムを組んだのです」

それもそうだろう。いくら何でも、生まれ変わったその女性を、一人死後の世界で待ち続けているのは、とてつもなく長い時間だろう。それこそ、何十年、何百年と……。そして、少年の言葉を聞いたゆりは気付く。

「もしかして……そっちが先だったんじゃないの？　そして同じことが起きないよう、世界に適応させた」

「可能性はあります」
少年は、短くそう答えた。
「その人は……いつか報われるのかしら？」
「さぁ……」
「……何が正しいのかなんだか」
「僕には何が正しいのかは分かりません」
ゆりの言葉にそう賛成意見を述べた後に、
「ただ、ここに辿り着いた貴女ならば、その答えが導き出せるかもしれません」
「……どういう意味よ」
慎重に、ゆりは尋ねる。少年は、ここまで来ても表情を歪めることなく、言った。
「貴女の意思次第では、世界を改変出来る……ということです」
「改変してどうするのよ？」
そして少年は、ゆりの目を見て、こう告げた。
「彼が選ばなかった道も選べます」

## 第39話　Knockin' on heaven's door その6

当麻と要の戦いはまだ続いていた。

「おら、」

当麻が要の剣を消すが、要はそのたびに剣を再生させる。

「くそ、どんだけだよ。」

「自己修復に無限再生。これが悪魔の力『ＥＶＩＬＰＬＡＹＥＲ』の力よ」

「『ＥＶＩＬＰＬＡＹＥＲ』？」

「えぇ、オリジナルが使っている『ＡｎｇｅｌＰＬＡＹＥＲ』の試作品。防御を捨てて、ありとあらゆるモノを蹂躙する最強の力。それが『ＥＶＩＬＰＬＡＹＥＲ』」

要はそう言って、黒い羽を生やし、無数の羽で当麻を攻撃したが、当麻は右手で防ぐ。

「だけど、幻想殺しの前では無意味だ。」

「だけど、あなたの体力が続くかしら？オーバースキル『ハーモニクス』」

要の姿が二人に分かれた。奏が使う『ハーモニクス』と同じ能力だ。

「「二人の私と戦えるのかしらね？幻想殺し。」」

「くそ、」

「それは……私が神にでもなれる、というの？」

「……言いかえれば」

ゆりの言葉に、少年は否定の言葉を述べずにそう告げる。ゆりは、さらに質問を重ねた。

「ここを永遠の楽園にすることも可能なの？」

「彼はそれを否定しましたが、僕自身は否定しません……いや、否定する感情を持ちません」

少年は、右手をアゴに乗せたまま答える。

「神？　私がこの世界の……神？」

呟く、ゆり。目の前の少年は、ゆりが神にもなれるということを認めた。それは、ゆりが望んでいたこと……を少し飛躍させたもの。彼女は、この世界を手にすることが目的だった。神に反逆することが目的だった。それが今、目の前まで来ているのだ。そのことに気付いて、ゆりは……。

「ふふ、ふふふふ……アーハハハハハハハハハハハハ！！」

狂ったかのように、笑い出した。

（手に入れたんだ……この世界を！　私はやっと……戦ってきたのはこの為だったんだ！　『天使』にだって勝てる……これだけのシステムがあれば……！！　……最強だ！）

心の中で呟くのは、欲望の声。力を持ったが故に生まれた、そんな欲望の声。ゆりとて人間だ……欲望が生まれないわけがない。だが、それらの欲望を、ゆりは否定した。

「……なんてことするわけないじゃない。奏ちゃんにも、もうそんなこと出来ない。だって私は……ここまで来たのは、私は……！！」

瞬間。パソコンの画面に映し出されていたハートマークが、強い赤色へと変わる。それはつまり……。

「あれ……？　愛を感じ取りました。ここまで大きいのは初めてです。恐ろしい速度で拡大を……」

呟いている途中で、ゆりが銃口を少年に向ける。そんな姿を見て、少年は顔を若干歪ませた後、尋ねた。

「……何ですか？」

「だって、私がここまでやってきたのは……みんなを守る為なんだから！」

その言葉を聞いて、少年は気付いた。

「ああ……発生源は貴女でしたか。で、何をしようという気です？」

その後で、ゆりにそう尋ねる。ゆりは、少年に言い放つ。

「すべてのマシンをシャットダウンしなさい。今すぐ」

「いいんですか？　ちゃんと考えたんですか？　まだまだ時間はありますよ。それこそ永遠に……」

少年の言葉の後で、ゆりが何かを教えるように、言った。

「あのね……教えてあげる」

頭の中で、生前の記憶を思い出しながら。理不尽に強盗に自分の妹弟を殺された時のことを思い出しながら。ゆりは少年に、言った。

「人間というものは……たったの十分だって……我慢してくれないものなのよ！！」

瞬間。ゆりの持つアサルトライフルの火が噴いた。周辺にあるパソコンを、次々に破壊して行く。

その音は、まるで長きに渡る戦いの終結を示すような、音。ダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダ！！その音が、この戦いを終結へと誘っていく。薬莢が、カランカランと地面に落ちて行く。その音すら、心地よい。その内、アサルトライフルの弾が切れて、今度はハンドガンでパソコンを壊し始める。すべてのパソコンを壊し終えたところで、残るは目の前に座る少年のみとなった。その少年に標準を合わせて、

「もうひとつのイレギュラーは何？」

「幻想を殺すものが現れたと言っておきます。」

「上条君のことね」

「えぇ、プログラマーと彼は同じ世界からきました。そして、プログラマーは幻想を殺す物を早く成仏させろと言ってました。彼はこの世界の理を殺すものです。」

「安心しなさい。彼はすぐに消えるわ。私たちと一緒に……」

「……ふっ」

「！！」

そしてゆりは、すべてを終わらせる為の引き金を、引いた。

「くそ、二体相手は……」

要のハーモニクスに苦戦するすると、要の一人が当麻の後ろに回り込み、

「上条さん」

遊佐が当麻に呼びかけたが、遅く刃が当麻の背中にささら……なかった。

「！！」

当麻の後ろには、要ではなく、一方通行がいた。

「攻撃が反射された。」

攻撃を弾かれ、驚く要。一方通行はというと……

「外の影は全部片付けたが、テメェは何やってやがる。」

「悪かったな。ちっと苦戦してた。」

「そっちは相手するから、お前はもう一人を」

「任せろ。」

## 第40話　Knockin' on heaven's door その7

ジジッという音が鳴り響く。
すべてのパソコンが壊されたその部屋の中央で……ゆりはただ、地面に座り込んでいた。

「（これで……終わった？）」

呟くゆり。
影の発生源となっていた物は取り除いた。
つまり、戦いはこれで終幕を迎えたということになる。
確認こそしていないが、ゆりはそう確信していた。

「これでやっと、みんなは助かったはず……これで無事、この世界から去って行けたはず……」

影がいなくなったのだから。後はこの世界から去るのみ。そしてゆりは、みんながもうこの世界から去って行ったことを信じていた。
邪魔する存在は誰もいない。ならば、さっさとこの世界から消えて、新しい人生に向かって歩みを迎えていて欲しい。内心、ゆりはそう考えていた。

（にしても、不覚だ……お姉ちゃん、アンタ達と同じくらい、みんなのこと大切に思っちゃったんだ）

芽生えた愛は、仲間を愛する心。その想いは、かなり強大で……ゆりの心に、強く根を張っていた。

（アンタ達が誇れるくらい、アンタ達だけを愛する姉で居たかった

のに……ああ、この気持ちは何なんだろう。どうしちゃったんだろう。私を突き動かしていたものが、消えて行く……）

ゆりは分かっていた。それらが消えて行くということは、つまり……。

（それが消えちゃったら……この世界にいられなくなる。人生はあんなにも理不尽に、アンタ達の命を奪っていったのに……なのに……みんなと過ごした時間はかけがえのなくて……私も、みんなの後を、追いかけたくなってきちゃったよ）

そう心の中で呟いた、その時だった。

「……！！」

目の前に、あの妹弟が現れてきたのだ。いや、実際に現れるはずがない……これは幻。だが、ゆりは不思議と、以前直井に見せられた幻とは違って、この幻を……心地よいものだと思っていた。そして、目の前にいる三人は、ゆりに向かってこう言葉をかけるのだった。

「ありがとう……もう十分だよ」

「もうお姉ちゃんだけ苦しまなくていいよ」

「長い間お疲れ様、お姉ちゃん」

そう言った後で、三人はゆりの顔を見て、ほほ笑むのだった。……ゆりは、そんな三人を見て、耐え切れなくなった。

「うっ……う……く……！　うわぁあああああああああん！！」

ダムが決壊したかのように、泣きだした。その泣き声は、誰にも聞かれることがなく。その部屋の中で、いつまでもいつまでも、響いていた……。

「影が消える。まさか……」

みるみるうちに影が全部消えていく。音無たちも疲れきっていた。そして、当麻と一方通行は……

「これで、お前も終わりだな」

「行くか。上条」

「あぁ、」

二人が同時に要の顔面を殴り飛ばし、勝利をした。そして、要の体もだんだんと消え始めた。

「これは……私は幻想として消されるの？」

要は涙を流しながら抵抗しようとするが奏が要の手を握りながらこう言った。

「違うわ。あなたは成仏するの。あなたは最後まで自分で在り続けられたということを達成できたから……」

「私は……人として生きられたのね。」

そう言い残し要は消えていくのだった。

外でも影が消えていく現象が起きていて、他の戦線メンバーも歓喜に湧いている中、屋上でひとつの影があった。それは……竹山だった。

「これで、全部解決したのだな」

竹山の姿がだんだんと変わり、銀髪の男に変わった。その男の名前はアレスター。学園都市を統べる男であり、ＡｎｇｅｌＰＬＡＹＥＲとＥＶＩＬＰＬＡＹＥＲを作った男だ。

「前の世界はすでに崩壊した。上条当麻というイレギュラーがなければ『世界』は成り立たない。一度死に、彼らを導かなければ、『世界』のバランスが取れなくなるからな」

そう言って、アレスターは消えて行くのだった。

# 第４１話　Ｇｒａｄｕａｔｉｏｎ　前編（前書き）

ついに終わりますね。最後辺りグダグダになりましたが、今回は頑張ります

# 第41話　Graduation　前編

影との最終決戦から三日後。この日、ゆりはようやっと目を覚ました。最初にゆりが見たのは、自分の顔を覗き込んでいる音無と奏の姿だった。

「ここは……どこ？」

身を起こしながら、ゆりはそう尋ねる。音無が、その問いに答えた。

「保健室だ」

「保健室？　貴方達……どうしてまだここにいるの？」

『ここにいるの？』とは、『まだ成仏してなかったの？』という問いに繋がるのだろう。起き上がろうとするゆりを心配するように、奏が言った。

「無理しちゃ駄目」

「大丈夫よ……奏ちゃん」

優しげな声で、ゆりは奏にそう言うのだった。その後で、日向が言う。

「まぁゆりっぺにしては大変だったみたいだしな」

「よくそんなのでリーダーが務まっていたものだな」

相変わらずの憎たらしい口調で、直井がゆりに言う。そんな直井の言葉に、日向はわずかながら顔をしかめた。だが、言われた本人であるゆりは、その言葉よりも、まだここにいる二人の方が気になっていた。

「貴方達まで……一体何してるのよ？　影はもういないんじゃないの？　ならもう、邪魔するものは何もないはず……」

ゆりの言う通り、影はもういない。だから、彼らはいつこの世界から旅立っても問題はないはずだ。
だが、音無はゆりにこう言ったのだ。

「ああ、分かってる」

「なら……」

「まだ、お前が残ってるじゃないか？」

「えっ……」

その言葉に、ゆりは驚きを見せる。そんなゆりに、音無はもう一度同じ言葉を繰り返す。

「お前が残ってる」

「あ……私？　ああ……そっか。なんて言うんだろう……」

言われたゆりは、何だか少し恥ずかしくて。シーツを少しつまんでは、それで手遊びをするように弄っていた。そんなゆりに、音無は尋ねる。

「何だよ？」

だが、ゆりが答える代わりに、奏がこんな推論を述べてきたのだった。

「多分だけど、もうゆりが抱えてきた葛藤は解けてる」

「「え？！」」

この言葉に驚いたのは、日向と音無だった。直井は平然とした表情でその様子を眺め、言った本人である奏は相変わらずの無表情。実はこの二人、ゆりが抱えている葛藤はまだ解けていないものとばかり思っていたので、この日はそんなゆりの葛藤を解いてあげようとして、ここにやってきたのだ。しかし、奏から告げられた衝撃的な真実。ゆりも、これには驚きを見せていた。

「！！」

驚きのあまりに、シーツで顔全体を覆って、誰の顔も見ないようにしていた。そんなゆりを見て、音無が尋ねる。

「そうなのか？　ゆり」

「え！？　えっと、それは、その……」

どう答えたらいいのか分からず、ゆりは動揺し始める。日向や音無の顔を見て、その後でシーツの方を眺めて、また音無達の方を見る。その様子を見ただけでもなんとなく理解することが出来たのだが。

「よし。僕が催眠術で吐かせてやろ――――」

「やめろゴラァアアア

を落ち着かせた後、音無達の方に身体を向ける。足をベッドの上からダランと垂らし、それからゆりは一言。

「奏ちゃん……意地悪なんだ……」

「ゆりがあまのじゃくなだけ」

「貴女、言うのね」

そう奏に言った後で、さらにこう言葉を続ける。

「でも、なんとなく嬉しいな……」

「何が？」

奏は、何のことか分からず、ゆりに尋ねる。ゆりは、そんな奏に、こう言った。

「『ゆり』って呼んでくれて」

「……どうして？」

「だって……友達みたいじゃない？」

嬉しそうな表情を浮かべて、そんなことを言うゆり。そんな言葉を聞いた奏は、

「友達……」

と、半ばオウム返しのように呟く。そして、小さくこう呟くのだっ

た。

「……そうね」

かつては敵同士として争っていた、戦線メンバーと奏。そんな戦線メンバーのリーダーとして活動してきた、ゆり。本来ならば分かり合うことが難しい立場のこの二人は、ようやっと互いが抱いてきた誤解を解き、そしてこんな会話をすることが出来るようになった。それが、ゆりにとってはとてもうれしいことだった。それはまるで、友達同士で話しているような感覚だった。

「んじゃ、準備は無駄にならなかったわけだな？」

「ああ！」

感傷に浸っていたゆりを差し置いて、日向と音無がそんな会話をする。彼らの言っていた『準備』という言葉の意味が分からず、ゆりは思わずこう尋ねていた。

「準備って、何か始まるの？」

すると、音無がこう答えた。

「最後に、したいことがあるんだ……奏、やったことないんだってさ」

「え？　何を……？」

ゆりが再び質問を重ねると、

「詳しいことは行ってみてから分かるからよ。ほら、ゆりっぺは早く制服に着替えてこいよ。俺達は玄関で待ってるからさ」

「え、ええ……分かったわ」

枕を投げられた衝撃で倒れている直井の身体を持ちあげつつ、日向がゆりに向かってそう告げて、保健室から出る。音無と奏もまた、ゆりに背中を向けて、保健室から出た。

「……一体、何が始まると言うの？」

四人が出て行った後、ゆりは短くそんなことを呟くのだった。

「他のみんなは？」

歩きながら、ゆりは音無達に尋ねる。音無は、その問いに対してこう答えた。

「全員行ったよ」

「……そっか。よかった」

安心したような表情を浮かべて、ゆりは呟く。その後で、

「上条くんも？」

「あぁ、上条の友達も来ていたらしくってな。最後入江と遊佐と一緒に消えたよ」

「あれは、凄かったな。二人して上条に告白して、結果は帰ってからだとか……」

「それは面白そうね」

「でも、なんだかんだ言って、みんな結構楽しんでたんだよな、ここの暮らし。それが分かったぜ」

みんなこの世界での暮らしを楽しんでいた。そのことは、この三日間を通じて分かってきたことだ。

そして、この世界で楽しく暮らせたのも……。

「それも、ゆりっぺのおかげだと思う」

日向は、ゆりの顔を見てそう言った。

「……そう」

「ああ、高松も行けたんだぜ？　ＮＰＣになった後でも正気に戻れたんだ」

ＮＰＣになってしまったら、二度と元に戻るとは考えられていなかった為に、それを聞いたらゆりは驚くだろうと思い、日向はそのことも報告してみた。しかし、多少驚きはしたものの、

「へぇ……そうなんだ」

「あんま驚かないんだな……」

「？」

そのことに対して、日向は若干の違和感を感じずにはいられなかった。だからゆりにこう尋ねてしまっていた。

「ＮＰＣになったら戻れないって言ってなかったっけ？」

それに対して、ゆりは日向には聞こえないような声でこう呟いていた。

「想いの強さで、いつか人に戻れるようになっていたのね」

「……？」

聞こえていたのか聞こえていないのか。日向が不思議そうな表情を浮かべていた。一方で音無は、先ほどから奏が歩きながら歌っている鼻歌が少し気になっていた。ちょうどゆり達の話も終わったところで、奏にこう尋ねた。

「その歌、なんだっけ？　さっき作業してる時も口ずさんでたよな？」

「……何だっけ？」

メロディこそ覚えているが、それがはたして誰の歌で、どういうタイトルの曲なのかは、奏も覚えていなかった。ただ、ゆりは奏の鼻歌を聞いて、それがどんな歌か気付いたようだ。

「それ、あれよ。ユイが入る直前のライブで岩沢さんが歌った歌、『Ｍｙ　ｓｏｎｇ』」

「ああ……あの曲か」

音無は、思い出してそんなことを呟いていた。

「全校放送で流れた奴だな……まったく」

直井がそう呟く。あの時の岩沢の歌は、ひさ子の計らいで全校放送にしていたのだ。だから、あの日『天使』エリア侵入作戦を実行していたゆり達も、この歌を知ることが出来たのだ。

「いい曲よね」

「……うん！」

ゆりの言葉に対して、奏はそう返事を返していた。やがて、そうしている内に、一同は体育館に到着した。

「体育館？」

「ああ」

ゆりの呟きに対して、音無が短くそう答える。とりあえず五人は、その中に入って行く。そしてゆりが最初に目にしたものは……『死んだ世界戦線　卒業式』と書かれた白い紙。続いて、横一列に並べられた椅子。ある程度の装飾が施された内装。卒業式をやるには十分な設備が整っていた。

「うわぁ……」

ゆりは、そんな光景に感心していた。そしてそんなゆりに、音無が言う。

「俺達で作ったんだ。文字は奏」

「そうなんだ……奏ちゃん、卒業式したことなかったんだ」

中の様子を見て、奏が卒業式をしたことがなかったという事実を知ったゆり。そんなゆりに、奏は言う。

「面白いのかなって……」

「面白くはねぇよ」

日向は、ポケットに両手をつっこんだ状態のまま、奏にそう答えた。後に続くように、音無が答える。

「でも、字を書いてる時は楽しそうだったけどな」

「女子は大抵泣くんだぜ～」

軽い調子で、日向がそう言う。

「ふん……これだから女は」

直井は、そんな女子をけなすようにそう言った。

「じゃ、始めよっか」

「え？　今から？」

音無がそう言ったのを受けて、ゆりは驚いたような声で聞き返す。

「何のために着替えたんだよ……」

日向は、呆れた様子でそう言う。ゆりは、少し動揺したような形で、言った。

「いや、本当に消えるのかなって……心の準備が……」

「……なんだ、それでも元リーダーか？」

直井が、ゆりの挙動を見て、思わずそう呟いていた。

「何よっ！！」

心外なことを言われて、ゆりは怒る。だが、そんなゆりに対して、音無は小さな起爆剤を落とす。

「お前、みんなが消えてからリーダーっぽくなくなったよな」

「え、そ、そう？」

まさかそんなことを言われるとは思っていなかったゆりは、思わずそう聞き返していた。更に日向が続ける。

「確かに何か変わったなぁ……」

「え？　どう？」

「そうだな……何か、女の子っぽくなった」

笑顔で音無はそんなことを言う。しかし、ゆりにしてみれば、その言葉に対してどう反応すればいいのか分からなかった。

「そ、それ……喜べばいいの？　怒ればいいの？」

身体をモジモジとさせて、ゆりがそう呟く。そんなゆりを見て、日向が一言。

「戦い終えたらそんなことも分からない無垢な女の子に戻っちまったんだなぁ。ゆりっぺも可愛いとこあんじゃん☆」

「！？」

瞬間。ゆりの顔が、一気に赤くなり、頭からは湯気が出ているような錯覚すら見えた。照れ隠しに、ゆりは日向のことをただひたすら殴りまくる。奏と音無の二人は、そんなゆりの様子を見て、思わず笑ってしまっていた。

「ゆりは面白いな……」

「……よし、始めるぞ！」

そんな彼らに、音無は卒業式を始めることを告げた。

「開式の辞。これより、死んだ世界で戦ってきた、死んだ世界戦線の卒業式を執り行います」

音無のそんな一言から、卒業式は幕を開けた。

「ではまず、戦歌斉唱！」

「戦歌？　なにそれ？」

リーダーであるゆりは、そんな歌を作らせた覚えはない。だから、その単語が聞こえてきたことに対して驚きを隠せずにいた。

「死んだ世界戦線の歌だよ。校歌の代わりみたいなもの」

「私、そんなの作らせた覚えないわよ？」

そんなゆりの言葉に対して、音無がこう答えた。

「それも奏が作った」

「貴女が作ったの？　……ってそもそも貴女、戦線じゃないじゃない！？」

戦線ではないどころか、むしろ敵対していた存在だったはずだ。

「いいじゃねえか……は～い、歌詞回して～」

音無は、五人分の歌詞を横に流していく。全員に回ったところで、

「メロディーは？」

「校歌って、大体似たようなもんじゃん？　適当に歌っとけば合うだろ」

音無は、半ば適当にそんなことを言う。そして、

「せぇ～の！」

「「「「「「お空の死んだ世界から～お送りします、お気楽ナンバー。死ぬまでに～食っとけ～麻婆豆腐～ああ～麻婆豆腐～麻婆豆腐～」」」」」」

「……ってなんだよこの歌詞！　先に誰かチェックしちまっただろ！　歌っちまっただろ！！」

歌詞の内容があまりにも馬鹿馬鹿し過ぎて、日向がそう突っ込んでいた。それに対して、奏はゆりの背後に隠れる。ゆりは、奏をフォローするように言った。

「まぁ奏ちゃんなりに一生懸命考えたんだから、そんなにいうことないじゃない……ねぇ？」

（コクコク）

背後では、奏が首を縦に頷かせていた。

「真剣にって……お気楽ナンバーって堂々と書いてあるんだが」

直井の言う通り、確かにそう書いてあった。だが音無は、歌詞を見てこんなことを言ったのだった。

「でも……なんて言うんだろう……奏の気持ちが詰まってるような気がするよ」

「どこにだよ」

「頭からけつまで」

音無がそう言うと、日向がもう一度歌詞を確認し、

「……そうだな。アハハ」

「やったね、奏ちゃん」

「うん！」

ゆりの言葉に、奏が笑顔で頷いた。

## 第42話　Graduation　中編

「次は？」

ゆりが、再びそう尋ねる。すると音無は。

「次は……卒業証書授与！」

「あるの？！」

音無の言葉に、ゆりが尋ねる。音無は、奏の肩を叩きながら、

「作ったんだよ。また主に奏がな」

「エヘン！」

腰に手を当てて、胸をはる奏。

「で、授与する校長は？」

卒業証書を受け取るには、それを渡す校長先生がいなくてはならない。だが、校長はこの体育館にはいない。この中の誰かがその役目を担わなければならないのだが……。

「俺だよ！」

かつらやパーティー用のメガネをつけて、格好いいポーズ（本人談）を決めながら、いつの間にか壇上にあがった日向が言った。日向のそんな様子に、ゆりは思わず顔をしかめていた。

「うわぁ……」

「くそ！　俺がじゃんけんで負けたんだよ！！　文句あっかあああああああああああああああ！！」

「ふっ。貴様には適任だな」

何やら怒っている様子の日向を見て、直井がそう呟く。それらをうまく聞き流して、

「さぁ、始めようぜ！」

音無がそう宣言したのを受けて、日向は動きを止め、一同はとりあえず席に座る。そして、音無が言葉を発した。

「卒業証書授与！　では……立華奏！！」

「はい！！」

奏は、大きく返事をして、席を立つ。そして正式動作通りの動きを見せ、壇上へあがる。

一礼。日向もそれに合わせて礼を返し、卒業証書を手渡す。奏はそれを受け取ると、もう一度礼をした後、壇上から降りて、自分の席へ戻って行った。奏が席に座ったのを確認すると、音無は次の人物の名前を告げる。

「次、仲村ゆり！」

「はい！」

呼ばれたゆりは、奏と同じ通りの動きを見せ、壇上に上がる。そして、日向の前に立って、卒業証書を受け取りながら、一言。

「それ、似合ってるわよ？」

「……ほっとけ」

あまり褒められたくはないと思っていたのか。日向は、そっぽを向いてそうゆりに言葉を返す。そして、壇上から降りる際に、卒業証書に書かれていた文字を見て、ハッとした。そこにはこう書かれてあった。

『あなたは本校において　みんなのために　がんばりぬいたことを
証します　死んだ世界戦線』

「……馬鹿」

思わず、ゆりはそう呟いていた。音無は、これが始まる前に、この字は奏が書いたと言っていた。ということはつまり、奏からゆりに送られたメッセージということになる。それにこう書かれていたのだ。

自分が敵として扱われてきたのにも関わらず、奏はこの文章を書いたのだ。そこに、ゆりは何かを感じていたのだ。

「次、直井文人！」

「はい！！」

ゆりが席に戻ったのを確認して、音無はその名前を呼ぶ。彼は壇上

に上がるや否や、

「我を讃えよ」

「ハァ！？」

すまし顔でそう言ってきたので、日向は思わずそんな反応を返してしまう。しばらく悩んだ後に、

「お勤め、ご苦労様でした！！」

「……ふっ」

直井は卒業証書を片手で奪い去るように取り、そのまま自分の席へ戻って行った。

「音無結弦……はい！」

今度は音無が、自分の名前を呼んで、その後で返事をして席を立つ。壇上に上がり卒業証書を受け取った後、

「それ、取れよ」

「え？　じゃあ……」

日向がメガネをとり、かつらを外すと、

「日向秀樹！」

「え？　……あ、はい！」

制服から音無は、日向の分の卒業証書を取り出す。そして日向の名前を呼び、日向はそれに戸惑いながら返事をする。

「なんだよ……まいったな」

頬を手で掻きながら、日向はそれを受け取る。そして、音無に一言。

「ありがとな」

「こちらこそ……すげぇ世話になった」

そして二人は、互いに握手を交わしたのだった。

その後、全員は一旦着席した。そして音無が、次の言葉を言う。

「卒業生代表、答辞！」

そう言うと、音無は咳払いをしながら、席を立つ。しばらくしてから、音無は言葉を言い始めた。

「振り返ると、いろんなことがありました。この学校で、初めて出会ったのは……中村ゆりさんでした。いきなり、『死んだのよ』と説明されました。そして、この死後の世界に残っている人達は、みな一様に、自分が生きてきた人生を受け入れられず、神に抗っていることを知りました。私もその一員として戦いました。しかし、私

は失っていた記憶を取り戻すことにより、自分の人生を受け入れることが出来ました。それは……かけがえのない想いでした。それをみんなにも、感じてほしいと思い始めました。ずっと抗ってきた彼らです。それは大変……難しいことです。でも彼らは、助けあうことを……信じあうことが出来たんです。中村ゆりさんを中心にして出来あがった戦線は、そんな人達の、集まりになっていたんです。その力を勇気に、みんなは……受け入れ始めました。みんな……最期は前を見て、立ち去って行きました……ここに残る五名も、今日を以て卒業します。一緒に過ごした仲間の顔は忘れてしまっても、この……魂に刻み合った絆は忘れません。みんなと過ごせて、本当によかったです……ありがとうございました……卒業生代表、音無結弦！！」

音無が言葉を言い終えたと同時に、四人からパチパチという拍手が鳴った。音無の想いが詰められた、答辞だった。彼の想いがそのまま読み取れる、そんな文章だった。

「全員起立！　仰げば尊し斉唱！！」

そして全員は、卒業式の定番とも言える歌……『仰げば尊し』を歌った。最後の方で、直井が早く歌ってしまったので、多少グダグダな展開となってしまったが。それでも、歌い終えた後には、みんなで笑い合っていた。何だか可笑しくて。楽しくて。直井は照れ隠しかどうか分からないが、顔を四人から背けていたが。他の四人は、心からの笑顔を見せていた。

「閉式の辞。これを以て、死んだ世界戦線卒業式を、閉式と致します。卒業生……退場！！」

そして音無の口より、卒業式の終了が宣言されたのだった。

しばらくの間、静寂の時間が訪れる。卒業式は……少しばかりいろんな騒ぎがあったが、それでも無事閉会した。卒業生……音無達五人は、余韻に浸っているのか。それとも、これでこの世界ともお別れなので、そんな寂しさから何も言えなくなってしまっているのか。どちらにせよ、今この場が静寂な時間に包まれているという事実に変わりはなかった。そして、そんな時間を打ち破ったのは、

「……女の泣き顔なんて見たくない。先に行く」

帽子を深く被り、一番遠くの席に座っていた直井が歩いていく。やがて音無の目の前で止まり、音無のことを見ると、

「う……ぐすっ！」

「お前が泣いてんじゃねえかよ……」

耐えきれず、直井は涙を流し始めた。日向は、そんな直井に向かって、優しくそう言葉をかける。直井は涙声のまま、音無に言った。

「音無さん……音無さんに出会えてなかったら、僕は……ずっと報われなくて……でも……僕は……！！」

最後の方は、もはや言葉になっていなかった。涙声で、はっきりと音無には聞こえていなかった。ましてや、直井本人すらも、自分で言ったのかどうかすらも分からず仕舞いだった。

「もう迷いません……ありがとうございました！」

頭を下げて、直井は音無にお礼を言う。人としての心を取り戻してくれた、恩人に。そしてそんな音無（おんじん）は、直井の肩をポンポンと叩いて、そして言った。

「ありがとう……ございます……！！」

最後に直井は、涙を流しながら音無にもう一度お礼の言葉を言う。そして次の瞬間には……その場から直井の姿が消えていた。直井は……『卒業』することが出来たのだった。

「行ったか……」

そんな直井を見て、日向が小さな声でそう呟いた。その後で、わざとらしく声を大きくして、

「さて！　次は誰が泣く番だ？！」

「泣きなんてしないわよ！」

そう答えたのは、ゆりだった。次は……ゆりの番だった。ゆりは奏の方に身体毎向けると、

「奏ちゃん……」

「？」

「争ってばっかりで、ごめんね」

歩み寄りながら、ゆりは言う。

「どうして、もっと早く友達になれなかったのかな……本当に、ごめんね……」

肩に手を乗せて、謝罪の言葉を並べるゆり。ゆりにとって、こんなにも可愛くて、放っておけない子を、今まで敵として扱ってきたことに対して罪悪感を覚えているのだろう。いや、罪悪感と述べるべきなのだろうか？それは一種の……後悔だった。

「私ね、長女でね、やんちゃな妹や弟を、親代わりに見てきたから。奏ちゃんにいろんなこと……教えてあげられたんだよ。奏ちゃん、世間知らずっぽいから、余計に……心配なんだよ。いろんなこと、出来たのにね……いろんなことして、遊べたのにね……もっと、もっと……時間があったらいいのにね……もう……お別れだね……」

瞳の中に涙を浮かばせて、ゆりは奏に言う。奏は、そんなゆりを見て……嬉しさからか、笑顔になる。

それにしても、神様というのが本当にいるのだとしたら、その人物はどこまでも残酷な存在だろう。こんなにも大切なことに気付いたのが、すべてが終わろうとしている終盤になるとは。もっと早くに気付かせてあげることが出来れば……それこそ、最初から敵対なんてしていなければ。彼女達は、分かり合えただろうに。友達でいられただろうに。

「「……」」

音無と日向は、ゆりと奏のやり取りを、ただ黙って眺めていた。そんな二人に涙を見せないようにしながら、ゆりは優しく奏の身体を抱き、

「さようなら……奏ちゃん……」

「……うん」

奏は、ゆりに抱かれたまま、首を縦に頷かせる。そしてゆりは、優しく奏を介抱し、瞳に残った涙を手で拭うと、

「じゃあね！」

音無と日向の方に向き直り、そして笑顔でそう言ってみせた。

「ああ、ありがとな。ゆり……色々世話になりまくった」

「リーダー、お疲れさん」

二人もまた、笑顔でそう言葉を返した。そしてゆりは。

「うん！　じゃ……また何処かで！」

右手を軽く振って。そしてゆりは……体育館の中から、姿を消した。

「……ま、俺だわな。順番的に言って」

腕を軽く伸ばしながら、日向がそう呟く。そんな日向の言葉に応えるようにして、音無が言った。

「いや、俺でもいいぜ？」

だが、日向はそんな提案を拒否する。

「何言ってんだよ。奏ちゃん残して先に行くなよ。俺が行くって」

「……そうか」

「ああ、俺が行くよ」

小さく、日向が音無に聞こえる程の声で呟く。奏の方をちらりと見た後、日向は言った。

「いろいろありがとな。お前がいなければ何も始まらなかったし、こんな終わりも迎えられなかった。感謝してる」

「まぁ……棗達のおかげでもあるけど……」

音無はそう呟いた後で、

「たまたまだよ……よく考えたら俺、ここに来ることはなかったんだよな」

「どういうことだ？」

そんな音無の言葉が気になって、日向は尋ねる。音無は、その理由をこう述べた。

「俺は最後には、報われた人生を送っていたんだ。その記憶が閉ざされていたから……この世界に迷い込んできた」

最後にドナーカードに臓器を提供して、誰かの為に自らの命を費やす人生を選択した音無。その選択によって、音無は……報われた人生を送ることが出来たのだ。結果的に、ではあるが。

「それを思い出したから……報われた人生の気持ちを、この世界で知ることが出来た」

「そうだったのか……本当に特別な存在だったんだな」

聞いた後で、日向がそんな反応を返す。

「……だからみんなの力になれたのも、そういう『たまたま』のおかげなんだよ」

「そっか……」

日向は、ボソッと小さく呟く。その後で音無の顔を見て、

「まぁ、長話も難だ。じゃ、行くわ」

「ああ。会えたら、ユイにもよろしく」

「おう！　運は残しまくっているはずだからな！　使いまくってくるぜ！」

笑顔でそんな言葉を返す日向。釣られて、音無も笑顔になる。

「……よし！」

一度気合いを入れて、日向は決意する。そして音無の近くまで歩みより、互いの手をパン、パンと二回叩いた後に。

「じゃあな！　親友！！」

パン！　と大きな音をたてて手を叩いたかと思ったら、次の瞬間には、もう日向の姿はそこにはなかった。去り際は笑顔で。そんな言葉を実践したかのような、分かれ方であった。

## 第43話　Graduation　後編

そして残るは、奏と音無の二人だけになった。二人きりになったことで、多少ながら静寂の時間が訪れる。

「えっと……どうだった？　卒業式。楽しかったか？」

音無は、奏にそう尋ねる。奏は、首を縦に頷かせながら、

「うん、すごく」

と答えた。その後で、こう言葉を繋げた。

「でも、最後は寂しいのね」

次々と去って行ったゆり達のことを思い出して、奏は呟く。音無は、笑顔でこう答える。

「でも、旅立ちだぜ？　みんな……新しい人生に向かって行ったんだ。いいことだろ？」

「……そうね」

これまで自分の人生を受け入れることが出来なかった彼ら。しかし、その人生を受け入れて、新たな人生を歩むことを……前に進むことを選んだ彼ら。それは立派な旅立ちであり……褒められるべきことでもあるのだろう。

「……」

ここで音無は、何かを考えるような表情を見せる。やがて、その後で何かが思いついたようで。

「あのさ……外に出ねぇ？　ちょっと……風に当たりたいかなって」

「……？」

音無の言葉に多少の疑問を感じつつも、奏はその申し入れを受け入れた。

外は夕焼け空だった。赤い太陽はいつにもまして赤く、落ち着いて眺めることが出来たら、それはとても美しい光景だったことだろう。しかし、音無は何だか思いつめたような表情を浮かべている。階段を境に、奏は段を数段降りただけ、音無は完全に降り切っていた。最初に話を切り出したのは、音無だった。

「あのさ、奏……ここに、残らないか？」

「え？」

突然の申し入れだった。あまりにも唐突だったので、奏は驚いたような返事を返していた。表情はキョトンとしており、何を言っているのだろうという気持ちが読み取れた。だが、音無にはそんな感情を読み取れる程、今は心に余裕がなかった。

「何か……急に思いついちまった。だってさ……また、ゆりや日向達みたいに、報われない人生を送って、ここに来る奴がいるってこ

とじゃん？」

「そうね……」

確かに音無の言う通りだ。死後の世界が存在する限り、報われない人生を送ったものがこの世界に迷い込んでくる可能性は高い……いや、ほぼ必ず迷いこんでくるだろう。そんな時に、彼らはまずどのような反応を見せるだろうか？

「そいつら、またゆり達のように……ここに居ついてしまいかねない。ここにずっといてさ……苦しんで、生きることに抗い続けてしまうかもしれない」

「そうね……」

神がいるのだとしたら、反逆するのみ。彼らは恐らくそんな思考を持って……そして再び戦いが繰り返されてしまうことだろう。音無の言っていることは正しい。しかし、それは建前でしかなかった。本音を言ってしまうと……。

「でもさ……俺達が残っていたらさ、ソイツらも、今回のようにさ、生きることのよさを伝えてさ……卒業させてやることが出来る。もしかしたら、そういう役目の為に、俺はここに来たのかもしれない」

「……」

風で、奏の髪が揺れる。

「だからさ、一緒に残らないか？　奏がいてくれたらさ……こんな世界でも、俺は寂しくないから」

言い換えると、奏と一緒にずっと居続けたい。音無の中の奏は、それだけ大きな存在になっていたのだから。

「前にも言ったかもしれない……俺はお前と一緒にいたい。これから先も……居続けたい」

音無がそう言った後、奏は風で揺れる髪を整えた後で、階段を降りる。音無も、そんな奏に近付いて行く。

「だって俺は……奏のことが……こんなにも……好きだから！！」

言った瞬間。音無は、奏の身体を抱く。奏を離したくなくて。奏と別れたくなくて。奏を確かめたくて。音無は、奏の身体を抱いて、そして言った。

「好きだ……」

「……」

しかし、奏からは何の言葉も返って来なかった。肯定の言葉も、否定の言葉も、奏は述べなかった。

そんな奏が気になって、音無は思わず尋ねていた。

「どうして……何も言ってくれないんだ？」

音無は奏の身体を抱いているため、奏が今にも泣きそうな表情を浮かべていることに気付いていない。

奏としても、音無からのそんな言葉は……嬉しかったはずだ。けれど、奏は今にでも泣きそうな声で、音無に言った。

「言いたくない……」

それは、細やかなる反応。奏から返ってきた、小さいながらも確かな答え。

「どうして？」

だが、音無にはなんのことかさっぱりだ。理解することが、難しかった。当然だろう……他人の心を覗ける程、人間という生き物は器用な生き物ではないからだ。奏は更に、音無の言葉に対して答える。

「今の想いを伝えてしまったら……私は、消えてしまうもの」

消え入りそうな声だった。必死に絞り出したかのような言葉だった。しかし、やはり音無にはその言葉の持つ意味がうまく伝わらない。

「どうして……？」

そして奏は、そんな音無の質問に対して、こう返事を返したのだった。

「だって私は……『ありがとう』を貴方に言いに来たのだから」

「どういう、こと……だよ……？」

そして奏は、言った。

「私は……貴方の心臓で、生き永らえることが出来た女の子なの」

「！！」

思わず音無は、次にくるはずだった言葉を飲み込んでしまっていた。何も言えず、ただ奏の次の言葉を待つのみだった。そして奏は、言葉を続けた。

「今の私の胸では、貴方の心臓が鼓動を打っているわ……ただ一つの私の不幸は、私に青春をくれた恩人に……『ありがとう』を言えなかったこと。それを言いたくて、それだけが心残りで、この世界に迷いこんだの」

「そんな……」

奏からの突然のカミングアウトに、音無は戸惑いを見せる。奏は、胸に手を当てて、その鼓動を確かめるような動作を見せる。

「……でも、どうして俺だと分かったんだよ」

音無は、その真実が信じられなくて、奏に尋ねる。もしそれが本当なのだとしたら、奏は恐らく……自分の目の前から消えてしまう。離れてしまう。それが嫌で……音無はそう尋ねていたのだ。しかし、奏はこう言った。

「最初の一刺しで気付けた。貴方には……心臓がなかった」

「！！」

思わず音無は、胸に手を当てる。確かに、ドクンドクンと鼓動を鳴らすはずの心臓が、音無にはなかった。臓器を提供したのだから、

それも当然のことだった。

「けど……それだけじゃあ……！！」

その先の言葉を言おうとして、しかし奏に止められる。そして、奏が言った。

「貴方が記憶を取り戻せたのは……私の胸の上で夢を見たから。自分の鼓動の音を……聞き続けていたから」

「そんな……！！」

言われてみれば、確かにその通りだった。普通に寝ているだけならば、そんな夢など見る機会がなかった。心臓を失っていた彼は……完全な身体ではなかった。だから記憶をなくしていて、あの日まで生きていたのだ。そして、自分の心臓の鼓動という、彼の身体にとって足りなかったものを耳で聞くことによって……音無は記憶を取り戻すことが出来たのだ。

「……結弦。お願い」

奏が音無に、ある願いをする。それは……。

「さっの言葉……もう一度言って」

「そんな……嫌だ……奏が……消えてしまう！！」

音無は拒否する。言ってしまったら……奏が消えてしまうと思ったから……いや、奏が消えてしまうから。

「結弦……お願い！」

それでも尚、奏は求める。だが、音無はひたすら拒否し続ける。

「そんなこと……出来ない！！」

「結弦！！」

「！！」

もう、拒否なんて出来なかった。それはある意味で、命令にも近かった言葉だったからだ。

「貴方が信じてきたことを……私にも信じさせて」

そう言ってから、奏は続けた。

「生きることは……素晴らしいんだって」

「……」

「……結弦」

もはや音無は、覚悟を決めるしかなかった。奏に、さっき自分が言った言葉を……もう一度その口で言う他なかった。やがて音無は、泣きながらも奏の側に歩み寄り……そして、奏の身体をそっと抱く。そして、奏に向かって、言った。

「奏……愛してる。ずっと一緒にいよう」

「うん……ありがとう、結弦」

「ずっと一緒にいよう……！」

「うん……ありがとう」

「愛してる……奏！！」

「うん……凄くありがとう」

「奏……うう！！」

「愛してくれて……ありがとう」

奏は、音無の言葉に対して、優しい声で答える。ただひたすら、『ありがとう』としか言わない。

一度たりとも……言葉に対する明確な答えを出していない。奏がここで『好き』と言ってしまったら……音無に『ありがとう』と言う前に、消えてしまうから。自分の正直な想いを伝えてしまうと……消えてしまうから。

「消えないでくれ……奏……奏ぇ！」

もう音無は、それ以外の言葉を言うことが出来なかった。ただ、奏にいて欲しい。

ずっと側にいたい。それだけなのに……そんな簡単な想いすら、今こうして、消え尽きてしまいそうになっている。そして奏は……そんな時間に、終わりを告げる言葉を言ったのだった。

「命をくれて……本当に……ありがとう」

瞬間。音無の身体から、誰かを抱いているという感触が消えた。奏が……目の前からいなくなった。

「あっ！！」

奏が目の前から消えてしまったことで、音無の身体は重力に逆らうことなく、前に倒れる。そして、消えたことを認めたくなくて、音無は必死に腕を動かす。しかし、空を斬るだけで、その腕は何も掴まなかった。

「……！！」

しゃがんだまま、音無は自分の身体を抱く。先ほどまで奏を抱いていた……その腕で。奏の感触を確かめたくて……しかし感じられるのは、自分の身体だけで。目からは涙が止まらない。そして、夕焼けに向かって……音無は叫んだ。

「奏ぇえええええええええええええええええええええええええええええええええ！！！」

## 第４３話　Ｇｒａｄｕａｔｉｏｎ　後編（後書き）

次はそれぞれのＥｐｉｓｏｄｅです。その後番外編を入れたいと思います

## 第４４話　ｅｐｉｓｏｄｅ　ユイ

とある中学校。そこの野球部に所属している少年――――名前を日向秀樹という――――は、今日もグラウンドで練習していた。民家が並ぶその中学校のグラウンドは、ボールが外に飛ばないようにと、少し高めのフェンスが用意されている。

「おらもっと声だせ！」

「はい！！」

響くのは、顧問の先生の怒声や、選手達の掛け声。日向の守備位置はセカンドだ。そして今は……ノックの途中。

「続いて行くぞ！　セカンド！！」

キィン！フライが上がった。ほぼ定位置にいても捕球可能な、セカンドフライ。日向は何事もなかったかのようにその球を取る為にグラブを上にあげて……そこで妙な感覚を覚えた。

「（あれ……前にも同じような球がきたことがあったような……）」

脳裏を掠めるのは、真夏のグラウンドでの、似たような球。しかし、その映像に流れる日向は、今の日向よりも一回り二回りは大きかった。そして何より……その場所を、日向は一度も訪れたことがなかった。だから日向はそれをただの気のせいだと思い……特に気にすることなく、球を捕る。パァン！　という音がしたと思ったら……グラブには球がしっかりと入っていた。

「よし！　日向はもう上がれ！　次のフリーバッティングまで素振りしとけ！」

「はい！」

顧問の先生が、日向に指示を出す。日向は、先生に言われた通り、バットケースから一本の金属バットを取り出すと、距離を十分にとって、素振りを始めた。しばらくそうした後に、先生から次の指示が出される。

「よし……次はフリーバッティングに入るぞ！　ピッチャーには坂本がつけ！　まずは日向からだ！！」

「は、はい！！」

まさか自分が先頭バッターとして呼ばれるとは思っていなかったので、驚いたような素振りを見せた。

日向はそれでも、メットを被ってバッターボックスの中に入る。軟式野球とは言え、頭に当たったらそれこそ大怪我をする。それを防ぐ為のものだ。

（高校生になったら、きっと甲子園に行く……！）

日頃から、日向はそのことを頭にいれながら、野球の練習に励んでいるのだった。そうこうしている内に、ピッチャーからの第一球。これはストライクゾーンから少し左に外れた、ボール。

「いけね。練習に集中しないとな」

それを見送った日向は、考えていたことを一旦止めて、練習に集中

する。ゴロだったり、凡打ながらもヒット級のものであったり、高く上がったフライだったり。彼とて野球選手なので、多少バットコントロールには自信があった。ただ、方向を定めることが出来ても、フライかゴロかの打ち分けは、彼にはまだ出来なかった。そうしている内に、最後の一球がやってくる。……一度彼は、何も考えずにただバットを振ってみたら、はたしてどれほど飛ぶのだろうかと気になって、それをやってみようと思い至った。だから、最後の球は目を瞑って……運任せにバットを思い切り振った。すると……キィン！　という金属バット特有の衝突音が聞こえてきた。しかも、今までで一番大きな音だった。

日向自身もこれには驚く。かなり力を入れた為か、ボールは右に段々と逸れていきながらも……試合ならホームランとされるであろう球を打ったのだ。日向はこれに対して喜びを感じていたのだが……次の瞬間。ガッシャン！　と、ガラスが割れる音が響く。理由はただ一つ……日向が打った球が、民家まで飛んで行き、そして窓を割ってしまったのだ。

「……日向、取ってこい。そして、謝ってこい。今日はもう練習上がりでいいから」

「……はい」

あれだけの特大ホームランを打ったのに、先生も日向自身も、素直に喜べないでいた。特に日向に関して言えば……これからどう叱られるのだろうかと想像する必要さえあったのだった。

少女は、あまりに突然過ぎる事態に対して、反応仕切れずにいた。何時ものようにベッドに横になって、テレビを見ていたら……突然ボールが飛んできて、しかもその球は窓ガラスを割っていた。

あまりにも突然過ぎた。少女———ユイは、その球を避けようと身体を動かすことすら忘れてしまっていた。

「……」

危ないとは思った。しかし、ユイはどんなに身体を動かそうと思ったところで……動かなかった。

小さい時に交通事故に遭い……以降、身体が動かなくなってしまったのだ。ただ、今度学園都市というところで大規模な手術を行う為、もしそれが成功したならば……もしかしたら元の生活に戻れるかもしれない。歩けて、走れて、思い切り身体を動かして……外に出られるかもしれないのだ。しかし、その手術を受けるには、側にいる人が足りなかった。母親がいつでも側についているのだが……それだけでは足りなかった。ユイは無意識の内に欲していたのだ……母親の負担を減らし、そして自分の側にいてくれるような人物の存在を。だが、こんな身である……母親や病院関係者意外の人と出会う可能性など、何処にあるというのだろうか？……話を元に戻そう。今は、外から飛んできたボールをどうするべきなのだろうか。恐らく、このボールを取りにくる人達がいるだろう。その人がボールを取っていき……それで済むはず。だが、ユイは微かに期待していた。その人物が……願わくば、自分の隣にいてくれるような人であって欲しい、と。そんなことを考えている内に、ドアがノックされる。トントンと、扉を叩く音が聞こえたので、

「どうぞ」

ユイは短く、そう答えた。そして、その人物は中に入り、開口一番に、

「申し訳ありませんでした！！」

帽子を外して、頭を深く下げる。そんな少年の姿を見て、ユイは思わず動揺する。

「い、いいですよ。怪我とかしなかったですし……顔を上げてください」

ユイは少年にそう言った。言われた少年は、頭を上げて……ユイのことを見た。

それこそが、ユイと日向の出会いだった。

## 第４５話　ｅｐｉｓｏｄｅ　７月１９日

学園都市、窓のないビルに一人の男が眠っていた。すると、モニターに金髪の女性の姿が映り込み、男は目を覚ました。

「何の用だ？」

「あら、久しぶりに顔を見せてそんな言い方するの？」

金髪の女性は子供っぽく顔を膨らます。

「それで、どうした？」

「……インデックスが学園都市に逃げ込んだのよ。だから追っ手の魔術師を入れさしてもらうわ」

「……そうか、もう、そんな時か……」

男は薄く笑う。女性のほうは何故笑っているのか分からなかったが……

「とりあえず、お願いするわ。」

モニターが切れて、男はある場所の映像をみるとそこには、二人の男女が戦っている。一人は学園都市第３位の超電磁砲。もう一人は……

「再び世界は巻き戻るか。今度は死なずに済みそうだな。」

男は映しだされた映像に映るつんつん頭の少年。名前は……上条当麻。世界は再び科学と魔術の世界となるのだった。

「上条当麻、幻想を殺す者。いや、世界の理を殺す者と言ったほうがいいか。」

## 第４６話　ｅｐｉｓｏｄｅ　結弦&奏

「……」

とある休日。携帯の画面を開きながら、壁に寄りかかる一人の少女がいた。その少女は、白くて長い髪が特徴の、１０人中８人は美少女だと答えそうな少女だった。名前を、立華奏という。今は、日差し避けの意味もあるのか、頭に麦わら帽子を被っていた。

「ゆり……遅いなぁ」

仕切りに携帯を開いては、メールが来ていないかを確認する。実は彼女、今日ゆりと一緒にコンサートへ行く約束をしていたのだ。何のコンサートなのかと言えば……もちろん今話題の少女バンド、『Ｇｉｒｄｓ　Ｄｅａｄ　Ｍｏｎｓｔｅｒ』である。しかし、約束の時間を３０分過ぎても、ゆりは一向に来る気配を見せなかった。その時、携帯の着信音が鳴る。

「あっ！」

奏は閉じていた携帯を慌てて開いた。そこに書かれていたのは。

『ごめん、奏ちゃん！　ちょっと今日寝坊しちゃって遅れるから！
　先にコンサート会場に行ってて！』

「……そっか。ゆりったら寝坊しちゃったんだ」

クスッと笑ってしまう。恐らくゆりは、コンサートが楽しみで夜遅くまで眠れず、結果今日遅刻することになってしまったのだろう。

「……ふんふんふふ～ん♪」

奏は、携帯を閉じて、鼻歌を歌いながら、コンサート会場まで向かう。そして、少し歩きだしたところで……。

一人の青年が街を歩いていた。

「後は初音に漫画でも買って、そのまま家に帰るか」

初音は、病気で入院していた時からの習慣で、漫画を読むのが好きになっていた。漫画と言っても、よく初音の年の少女達が読むような、少女漫画。音無としては、最初の内は買うことに若干の抵抗があったが、今では本屋の人も事情が分かっているらしく、あまりそういう目で見なくなっていた。むしろ、本屋の店員と仲良くなっているとかいないとか。

「ふんふんふふ～ん♪」

「……？」

鼻歌が、音無の耳に聞こえてくる。そしてその鼻歌は、聞いたことがない歌なのに……何故だかやけに耳に残る歌で。どこかで聞いたことあると、その時音無は確かに思った。

「今の歌……！！」

そして後ろを振り向いて、ハッとする。そこにいたのは、麦わら帽

子を被った、白い髪の少女。それだけのはずだったのに……音無は、何故だかその少女のことが気になっていた。

「……！！」

そして音無は、その少女の肩に、手を触れて……。

「「……え？」」

声を出したのは、二人とも同時だった。肩に手を触れた少年も、触れられた少女も。今自分が置かれている状況を、うまく把握できずにいた。

「あ……御免なさい」

「……えっと」

気まずくなった二人。だが、少年はここで、こんなことを切り出したのだった。

「えっと……何処かで会ったことはないか？」

「……そう言われてみると、何処かで会った気もする」

少女も、若干疑問に思っていた。目の前にいる少年が……初めて見る顔ではないな、という感覚を。

「俺、音無結弦。弦を結ぶって書くんだけど……」

「私は立華奏」

二人は自分の名前を言う。そして音無は、奏の名前を聞いて、こんな感想を漏らした。

「奏、か……いい名前だな。好きだぜ、その名前」

「……こんなやり取りも、前にやったことがある気がする」

「言われてみると……そうだな」

やりとりすらも、どこかでやったことのあるようなやり取りだった。音無は、そのことに対して若干の疑問を感じつつ、そして奏にこう言った。

「えっと……とりあえず、向かう先はどこなんだ？」

「コンサート会場。ガルデモのコンサートを見に」

「ガルデモ？」

音無は、これまでテレビや音楽というものをあんまり見たり聞いたりしていなかったので、その名前を出されても、あんまりピンとこなかった。だが、それでも音無は、奏に対してこう言った。

「えっと……もしよかったら、途中まで一緒に行っても構わないか？」

「……うん。大丈夫。ちょうど友達が寝坊して、話し相手が欲しか

ったから」

奏は、音無の言葉を聞いて、肯定する。そして二人は……横に並んで歩き出す。彼らの物語は……これからが始まりだ。

## 第４６話　ｅｐｉｓｏｄｅ　結弦&奏（後書き）

次が本編の最終回です。最後を飾るのはあの人です。

## 最終話　ｅｐｉｓｏｄｅ　インデックス&上条当麻

学園都市

そこのある病院で一人の少女がある病室の前にいた。彼女の名はインデックス。そんな彼女が何故病室の前にいるというと、自分を救ってくれた恩人が入院しているが……頭にダメージを受けているせいで、記憶が無いらしい。

「……あの、失礼します」

インデックスが扉を開けると、頭に包帯をまいた少年がベットにいた

「あの、病室間違ってませんか？」

少年がそう言うとインデックスは泣きそうになった。自分を守ろうとした少年は自分の命の代わりに記憶というものを失ったのだから……

「あの、君、つらそうだけど、もしかして俺たち知り合いだったりするの？」

インデックスは涙を拭き、こう言った。

「とうま、覚えてない？私達、学生寮のベランダで出会ったんだよ？」

「――俺、学生寮なんかに住んでたの？」

「……とうま、覚えてない？とうまの右手で私の『歩く協会』が壊れちゃったんだよ？」

「――あるくきょうかいって、なに？『歩く協会』……散歩クラブ？」

「……とうま、覚えてない？とうまは私のために魔術師と戦ってくれたんだよ？」

「――とうまって、誰の名前？　」

インデックスの口は、あと少しで止まってしまいそうだった。

「とうま、覚えてない？」

それでも、これだけは言っておきたかった。

「インデックスは、とうまの事が大好きだったんだよ？」

ごめん、と透明な少年は言った。

「インデックスって、何？人の名前じゃないだろうから、俺、犬か猫でも飼ってるの？」

「……」

インデックスはその言葉を聞いて、そのまま座り込み泣き出した。

「ははははっ！」

突然当麻は笑い出した。

「なんて顔をしてんだよ、おまえ！　こんな古い手に引っかかるなよな～！」

インデックスは何がなんだかよくわからず、頭に疑問符を沢山浮かべる。

「とうま？　何で？　え？　『光の羽』のダメージで記憶全部ふっとんだって聞いたのに……」

「そのダメージだって、『魔術』によるもんだぜ？　自分の頭に右手をぶちかましゃー、はい、元通りだ！　細かい理屈はわかんねーけど、相手は異能の力なんだから問題なし！！」

堂々と得意気に説明する当麻。

「とうま……じゃあ、さっきの大ボケは？」

インデックスの疑問符が消え、変わりに黒いオーラを纏う。

当麻もそのオーラにビビってしまう。

「お、面白くなかった……ですか？」

「と～～う～～ま～～！！」

インデックスの歯がギラリと光る。だが、その歯は届かなかった。

何故なら……

「ふえ、」

当麻はインデックスを抱きしめた。インデックスも何がなんだか分からなかった。

「悪いな。心配かけて、」

「もう、当麻のバカ」

「ごめん。そして、ただいま」

インデックスは病室を出ると入れ違いに、カエル面の医者が入ってきた。

「行っちゃったよ？　本当に良かったのかい？」

当麻は神妙な面持ちをした

「本当は何も覚えていないんだろう？」

そう。当麻は『光の羽』を頭に直撃したせいで記憶を失ってしまった。しかし、ただそれだけの問題ではなかった。

「君のケースは記憶喪失というより、記憶破壊だね？　思い出を忘

れたのではなく、物理的に脳細胞を傷つけられている。パソコンで言えば、ＨＤを丸ごと焼き切った状態なんだよ？」

つまり、当麻は幼い頃の記憶から昨日までの記憶を二度と取り戻すことはできない。

「先生。俺はさっきまでおかしな夢を見てたんですよ」

「夢？どんなだい？」

「俺は何かの理由で死んじゃって、普通なら天国、いや誰かを悲しませた罰として地獄に行くはずだったんですよ」

けど、と当麻は続けて言った。

「俺が目を覚ました世界は、未練が残った人たちがいる世界で、そこには神に反逆する人たちと、自分は天使という存在で立ち向かう少女がいたんです。」

「……そんな世界があるんだね」

「えぇ、そこで俺は誰かのために出来ることを探して、そこにいる人たちを卒業させたんです。その世界は報われない魂の救済の世界。俺もきっとそこで報われなかった魂を自分で救済をして卒業できたんだと思います」

「……夢というのは記憶そのものだ。君は記憶が無いはずだが……」

「案外、俺はまだ覚えているかもしれないですね」

カエル顔の医者が少しびっくりしたように透明な少年を見た。

「君の『思い出』は、脳細胞ごと『死んで』いるはずだけどね？」

我ながらつまらないことを言ってるな、と医者は言う。けれど、医者は言った。

「パソコンで言うなら、ハードディスク　丸ごと焼き切ったって状態なのに。脳に情報が残ってないなら、一体人間のどこに思い出が残ってるって言うんだい？」

なんとなく、この少年の答えは。そんなつまらない理屈など、一発で吹き飛ばしてくれるかも、と思ったから。

「どこって、そりゃあ決まってますよ」

透明な少年は答える。

「――――心に、じゃないですか？」

こうして、当麻とインデックスの物語は再び紡がれていくのだった。

## 最終話　ｅｐｉｓｏｄｅ　インデックス＆上条当麻（後書き）

六甲水「本編終了ですよ」

当麻「長かった。」

ゆり「最後はグダグダだったけどね」

当麻「まぁ、これでゆっくり休める」

六甲水「いや、実はまだ終わってないよ。」

ゆり＆当麻「「はぁ？」」

六甲水「番外編やるから」

ゆり＆当麻「「聞いてない」」

六甲水「元々やる予定だからね。ちなみに説明すると、当麻が死んだ世界は、原作では生死不明だったけど、死んでしまった世界、いわゆる一周目の世界の当麻は死後の世界にたどり着いた。一方通行も瓦礫を退けるために死んじゃったことになってるし、それで、最終回で当麻は転生後の世界。いわゆる原作の世界に戻った感じです。アレスターもまた一周目の世界でＡｎｇｅｌＰＬＡＹＥＲを作り、二週目の世界に行って、さらに、また死後の世界に行き、竹山という存在でＥＶＩＬＰＬＡＹＥＲを要に授けて、状況をもっと変えた。この当麻たちが転生した世界はアレスターにとっての三週目の世界で、アレスターは死後の世界などの記憶を受け継いでるという感じです。簡単に説明すると音無達の世界観は転生したって話で有るけ

ど、当麻たちがいる世界は時間が戻ったという話です」

ゆり「いわゆるループした世界ね。上条くんが死ぬとその世界は崩壊する。だから、アレスターは上条君を生き残れるようにしたのね。」

六甲水「まぁ、そんな感じだね。それで皆が転生して世界がつながったということです。次回は番外編をやりたいと思います。」

## 番外編その１　当麻とユイ（前書き）

六甲水「今回は当麻がまだ入院中にユイと出会う話です」

## 番外編その1　当麻とユイ

もうすぐ退院ができる当麻。記憶が失っているため何も覚えていない。けど毎日お見舞いに来てくれるインデックスと一緒に帰れることを聞くと少し嬉しくなった。そんなある日のこと……

「どうして、秀樹さんが来ないの」

と隣の病室から大声が聞こえた。

「ほえ、何なの？」

「さぁ、なんだろ？」

気になった二人は隣の病室に行くと、そこにはピンク色の髪で車椅子に座る少女とその母親らしき人がいた。

「あの～、何かあったんですか？」

声をかけると二人は当麻たちに気がついた。母親はいきなり

「ごめんなさい。もしかして隣まで聞こえてました？」

「あ、いえ、そこまでじゃなかったですけど、」

母親はそう、と言うと母親の携帯電話に電話が来たらしく、病室を出て行く。とりあえず自分たちも戻ろうと思うと、インデックスが……

「おいしそうなフルーツだよ。とうま」
お見舞いのフルーツに興味津々だった。
「お前は人様のお見舞い物に興味を持つな。」
「あの、別に食べても大丈夫ですよ。どうせ来ない人からもらったものですから……」
少女は機嫌悪く言う。だけど、当麻は……
「そうか？こんなに美味しそうな物を持ってきてくれるんだ。きっと来るよ。」
「えっ、」
当麻がそう言うと続けて、インデックスも……
「だって、あなたはその人の大切な人なんでしょ、きっと来てくれるよ。何があっても……」
「そうでしょうか、いえ、きっとそうですね。ありがとうございます。えっと、」
少女は笑顔で答えると、当麻は…
「俺は上条当麻」
「私はインデックス。」

「私はユイです。よろしく。」

三人が自己紹介をすると、外から声が聞こえた。

「音無のせいで遅れたんだからな。」

「悪い、昔初音を助けてもらった先生がいて、その人にお礼を言ってたら……」

「全く、音無くんはダメね」

「……結弦。急ごう」

「あぁ、そうだな」

「きっと、ユイの奴怒ってるんだろうな。間に合わないかと思って、来れないって連絡しちまったから」

と楽しそうな声が聞こえてきた。

「ほらな、来ただろ」

「はい」

## 番外編その2　みんなでバーベキュー　前編（前書き）

この皆でバーベキューで番外編も終わる予定です。

## 番外編その2　みんなでバーベキュー　前編

ある日の午後、当麻はインデックスと共に、福引きに挑戦していた。ついさっき、買い物をしたときに、店員から福引券を一枚もらったので、試しにやってみることに……

（まぁ、どうせ、当たらないだろうからな。ハズレはティッシュ箱だし、もらえる分には嬉しいけど……）

「とうま、早く回して回して」

「はいはい。」

インデックスに急かされ、回してみると……出てきた玉は外れの白ではなく、三等の青玉が出てきた。

「おめでとうございます。三等のバーベキューセットです。」

「へっ？」

「バーベキュー。とうま、バーベキューだよ。バーベキュー。」

何故か福引三等が当たってしまった当麻だったのだった。

とりあえず、送ってもらうのはお金がかかるので、そのまま持ち帰ることになったのだが……

「うおおおお、重すぎる。」

「送ってもらえばよかったんじゃないのかな？」

「それだと、お金がかかるからな。それにしても、バーベキューセットなんて……俺が持っててもな。どうせやる機会が……」

「ええええ、今日の夕ごはんバーベキューじゃないの？」

「あの、インデックスさん。残念そうな顔をしないでください。うちにはそんなに大量にお肉はありません。」

二人がそんな話をしていると、前から見知った顔がいた。

「なんや、かみやん。今日はバーベキューか？」

金髪にアロハシャッツにサングラスの男、土御門がだった。

「いや、さっき福引でバーベキューセットもらったんだけど、使い道がないからどうするかっと思って……」

「それだったら、うちに野菜はあるぜ。この間舞夏の奴が大量にもってきたからにゃ～」

まぁ、確かにバーベキューには野菜が必要だけど……

「肉がないだろ。野菜だけじゃ寂しいじゃねぇか。」

そんな事を言っていると、突然携帯が鳴った。当麻は誰かと思い出てみることに……

「もしもし、」

『おっ、もしもし、上条か？俺だよ。日向。』

「あぁ、日向か。」

日向とは夏休み、ある理由で知り合ってから仲良くなった。今は学園都市に住んで彼女の看病をしているらしいが……

『お前、二人で暮らしてるんだろ。さっき、福引で大量に肉貰ったから、やろうかと思ったんだけど…』

「ベストタイミングすぎるぜ。日向。丁度、俺達も肉の話をしていたんだ。」

『どういうことだ？』

当麻は日向に事情を説明すると……

『それだったら、知り合いに声をかけてバーベキュー大会でもやろうぜ。』

「おぉ、いいな。じゃあ、後で場所連絡するから……」

電話を切ると、土御門が笑顔で言った。

「本当ベストタイミングだったにゃ～。場所とかどうする？」

「それだったら、俺達の学校の校庭にしないか？あの人に声をかけてさ。」

「あぁ、なるほど」

こうして、みんなでバーベキューをすることになったのだが……

このバーベキューで恋の嵐が吹き荒れるのだった。

## 番外編その3　みんなでバーベキュー　後編（前書き）

今回で、番外編も終わります。

## 番外編その3　みんなでバーベキュー　後編

そして、夕方。当麻達の学校の校庭でバーベキューパーティーが開かれていた。学校の校庭には、料理の準備をする当麻、姫神の二人がいた。

「何で私が……」

「しょうがねぇだろ。誘った奴ら準備するのめんどくさがるから。その分、姫神は料理も上手いし、手伝ってくれると上条さん的には嬉しいぜ」

「……まぁ、あなたがそう言うなら……」

当麻と姫神がバーベキューの食材を下ごしらえしていると、ある二人がやってきた。それは……音無と奏だった。

「おっ、やってるな。上条」

「音無に、立華。来るの早いな。始まるの7時からだぜ」

今の時間はまだ5時、あと二時間ぐらいしないとメンバーが揃わないだろう。だが、音無は苦笑いしながら言った。

「いや、何か奏の奴が手伝いたいって言ってな。それで、俺たち二人で手伝いに来たんだよ」

「あ、そうなんだ？」

すると、姫神が当麻の肩を指で叩いた。

「ねぇ、その人達は？」

「ん、あぁ、そういえば、姫神はまだ知らなかったな。こっちの茶髪の方は音無、んで、ちっこい方が立華。二人とも病院で知り合ったんだよ」

「はじめまして、音無結弦だ。」

「立華奏です。」

「姫神秋沙です。というか、君は学校での知り合いより、病院で知り合いを作るのが上手だね」

「うるせー、とりあえず、二人が着てくれたのは嬉しいぜ。ぜひ、手伝ってくれ」

「あぁ、やろうぜ。奏」

「うん」

しばらく四人で準備を進め、時刻は６時を回った。すると、また別のメンバーが来た。

「よぉ、かみやん。食材調達してきたにゃ～」

「大丈夫でしたか？お二人とも、料理の準備させちゃって」

やってきたのは土御門と小萌先生だった。小萌先生は音無達に気が付くと、挨拶をしていた。

「えっと、上条ちゃんの知り合いですか？」

「え、えぇ、まぁ、えっと、あなたは……」

「私は上条ちゃん達の担任です。」

小萌は胸を張ってそういうが……音無はある問題で頭が一杯だった。

（いや、ここまで小さい人間見たことないぞ。）

そんなこんなで、7時。さっきまで6人しかいなかったのが、7時になると何人かやってきた。

「おぉ、やってるな。」

「あの、秀樹さん。私本当に病院出ていいのかな？」

「ちゃんと医者の人から許可貰ったから大丈夫だ」

最初にやってきたのは日向と車椅子に座るユイだった。ユイは夏休みに手術を受けて現在リハビリ中だが、あんまり体力に自身がないらしい。きっと今回のバーベキューはユイのためでもあるんだろうな。そう当麻は思っていた。

次に来たのは……

「ねぇ、上条君。バーベキューに誘ってくれたのは嬉しいけど、このシスターの娘がさっきまで大量にお菓子食べてたけど、大丈夫なの？」

「これは、おやつだと言ってましたが、明らかにおやつの域を超えてましたよ」

「もう、ゆりに遊佐はわかってないんだよ。おやつは別腹って言うもん」

「その使い方間違ってるから」

やってきたのはゆりと遊佐とインデックスだった。ゆりとも病院で知り合って、連絡も少しづつとっている。遊佐とは確か初めて会ったが、何だか初めて会った気がしないな。

次に来たのは意外な人物だった。

「ちょっと、いきなり呼び出して、寮監にバレたらどうしてくれるのよ」

「全くですわ。とはいえ、誘ってくれるのは嬉しいですわ」

「ふん、何故君たちみたいな下々な人間と一緒にバーベキューなど……」

やってきたのは美琴と黒子と直井だった。直井は実際に会ったことがないが……音無から話を聞いていた当麻だった。

それからガルデモメンバーや何人も来て、楽しいバーベキューが始まり、皆で大盛り上がりだった。

バーベキューが終わりそうな頃、当麻は一休みとして学校のベンチに座っていた。

「はぁ、食い過ぎた。」

「あの、上条さん。」

ベンチで一休みをしていると誰かに声をかけられた。声が聞こえた方を見るとそこには……入江がいた。

「あれ？確か……入江だったっけ？」

「はい、上条さんはここで食休みですか？」

「ん、まぁな。」

入江とは初めて会った気がしない。遊佐と同じだ。何故だろう？当麻がそんな事を考えていると入江が隣りに座った。

「あの、私、上条さんと初めて会った気がしないんです」

突然そんなことを言い出した。入江だった。一体どういう事だ？

「何だ？突然」

「いえ、今日初めてあったのに……何だか昔に会った気がしたような気がして……」

「まぁ、俺もそうだな。こういうことってあるんだな」

「そうですね。ねぇ、上条さん。またこうして皆で集まることが出来るかな？」

「きっと、出来るさ。こうして皆でわいわい騒いでいれば、それでもうみんな友達だ。きっとまたこういった行事があるさ」

「そうですね。あっ、今度ライヴやるんです。よければ聴きに来てください」

「あぁ、分かったよ」

「じゃあ、ゆびきりです」

「ゆびきりって……」

二人はその後、指切りをした。当麻やｓｓｓの新しい物語は始まり、ずっと続いていくのかもしれない。

## 番外編その3　みんなでバーベキュー　後編（後書き）

というわけで、今回でとある天使は終わりです。かなり長い作品ですが、今まで見てくださってありがとうございます。次回書くとしたら、当麻×インデックスのラヴストーリーかも、それも是非見てください

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8126o/

---

とある魔術の天使

2011年5月21日16時00分発行